狩人のパラドクス

ガラドリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狩人のパラドクス

【Ｎコード】
Ｎ８００８Ｊ

【作者名】
ガラドリー

【あらすじ】
モンスターハンターの世界。その中にあって、華々しく龍を屠るハンターでなく威風堂々と生を謳歌する龍でもなく、陰ながら世界の調和に尽くす者達がいる。人に与し龍を護る、矛盾を湛えた彼らの名は――ギルドナイツ。これは一人のギルドナイトとそれを取り巻くネジの外れたド外道共の愉快な日常を描いた物語、とか色々。

1話　狩人の安穏

湿原。
見渡す限りの湿原。
陰鬱にも不気味にも、葉を垂れるのはどこまでも続く木々の連なり。
木々の空隙に吹き込み抜けるは瘴気の風。それは腐臭にも似て、
「――ここは……」
沼地。
まごうこと無き沼地だった。
しかし、一概にそうであるとは言い切れない。
その風景は見る者が見たならば、
「まるで、――地獄かここは」
　そうかもしれない。
高過ぎる湿気はありとあらゆる生物を腐敗させる毒。
沸き出でる泉は須らく生命を蝕み、気化して肺腑を侵す毒。
しかし、一概にそうであるとは言い切れない。
言い切れないのだ。
「――――いや、」
だが、と。
しかし、と。しかしこの景色を眼に収める者達がこの景色を評して
曰く、
「ここは――」
ここは天国か、と。

●

草。
転じて木。
集まりて森。

息づく命が、その全てを物語る。そして、
虫。
それを食らう鳥。
転じて土となり大地が食らい、それを虫が食らいそれを鳥が食らう。
息づく命が、その全てを享受する。
それら生物は？ここ？では須らく陰気で凄惨だ。
しかし彼らは生きている。
ただひたすらに、生きている。生きているのだ。
ならば。
それらにとって、ここは楽園であり、故郷であり、天国だ。
「――――……」
とすれば。
彼もまた然り、と言えるのだろうか。
殺風景も殺風景、一面の汚泥に所所陰気な草木やその類が繁茂しているだけの、息も詰まりそうなフィールドの中、眼に見えぬ輪廻の只中で、聳え立つ大樹の根元に彼は居た。
人だ。
そして男である。
纏うは皮製のジャケットに顔を隠すテンガロンハット。さらに全身を覆い隠す茶色の外套。体格さえ定かでないそのシルエットは、しかし確かに蹲りの姿勢を模っており、微かな動きがある。
動きは作業に伴うものだ。
そして作業は淡々と行われ、かつ効果音も付いてくるものだ。
その両腕は素早く、かつ正確に作業をこなしていく。
テロロン。
『特産キノコを入手しました』
次、
『特産キノコを入手しました』
次、と。
『特産キノコを入手しました』

次々と、行われていくのは紛うこと無き、
――？茸採り？か。
一見滑稽で可笑しく、しかし全くの無言の。
ほほえましいそして至極単純な、子供でも可能な、――しかし責務を。
ただただひたすらに続けている青年。
『特産キノコを入手しました――』
　ふ、と息をつく彼は、
一口に青年といってもただの青年と一括りにするべきではない。
そう言わしめる理由があった。
なぜなら彼は、若干齢二十五にして自他共に認める？ハンマー使い？の実力者。
また、誇り高き？ギルドナイト？でも、あったのだから。
名を、ガラド。
「――こんなものか」
ガラド・ドレッドルート、という。

●

ハンターとは。
この世界を語る上では欠かすことの出来ないモノ達。
生き甲斐。憧れ。夢の職。英雄。
一方。
殺戮者、蛮族。秩序を乱す者。世界に歯向かう者。他多数。
？ハンター？を世界のあらゆる概念を詰め込んだ辞書で翻訳するとすれば実に様々な代名詞が軒を連ねることだろう。
　なれど。
だが否、と。ハンターはハンターでしかない、と。
ハンターであれば皆そう応えるはずだ。
なんと呼ばれようがそれ以上でもそれ以下でもない、と。そう応え

るはずだ。
何故か。
ハンター達は、知るからだ。
そしてそれを、誇るからだ。
自分達を言葉で定義し括る。その難しさを。

●

ギルドナイツ。
雇われハンター。
流れ、のハンター。
仕事はキノコの採集から。
終には世界の救世主となり。
殺生を嫌う者、忌避する者。
良しとする者、好む者。
草を刈る者。
蟲を駆除(か)る者。
獣を狩る者。
そして、?龍?を狩る者。
異なる思惑、目的、動機、思想、趣向、志、信念、仇、夢を持った
ハンターが、この世界には絶えず息づいている。とすれば、
何一つ、同じ物などない。誰一人、同じ者などいない。ならば、況
や呼び名をや。
だから、人は彼らをただ、ハンター、と。
呼称(よ)ぶのだ。

●

?ギルドナイツ?として名を馳せるガラド・ドレッドルートもまた
然り。

ギルドに雇われたハンターたる彼らの行う責務は、表舞台で華々しく名を馳せ幾多の龍を屠ってきた一般のハンターとは大きく異なる。
それは、世界の秩序の維持及び監視だ。
この世界における絶対的なもう一つの要素。そう、この世界には今も尚、
?龍?が息づいているという、事実。
龍は強大だ。
そして凶暴でもある。
それは時に人里を脅かし、脅威となる。
しかしそれは時に大自然からの恩恵となり、狩人の獲物となる。
それもまた、この世界の秩序に過ぎないのならば。
狩って、狩られて。それは最も原始の、自由な、正しい秩序のカタチ。
世界は順応の時を経て、自然と帰す。
その営みの維持と監視。言ってしまえば裏方である。
龍による人里への被害を最小限に食い止め、また狩人の過剰殺戮を取り締まる。
?人?を護り。そして、
?龍?を護り。しかしその実、
……何も護り切ることは出来ていない。
あくまでも、狩人の一人として。
あくまでも、世界の一員として。
しかしどちらでもない半端者共。
一見矛盾した、しかし管理人として徹底した、?秩序の番人?。
それがギルドナイトだ。

●

而して、ハンターの有無というのは人里にとっては死活問題となる。

ハンターは違う見方をすれば？抑止力？とも言える。
ハンターのいない村などというものはこの世界では風前の灯に過ぎない、そう言わしめるほど、龍の存在とは強大で圧倒的なものだと言えるからだ。
そして、そのような事情を抱えた村落が出ない道理はない。
そこで、ギルドナイトが龍に対する抑止力として派遣されることがしばしばある。
このガラドがその例だ。
「これで四十個目か」
ただ。
ただ、そのような大役を負いし彼は、目下、その責務を果たすべく、
「あと――六十とはな」
早朝から数えて八時間を潰していた。

●

ハンターたるガラドが拠点として根ざした村。
名は？ドリィ？。
と言っても、それは地方名からそのまま取っただけで実質名は無い。
そこは少々変わった土地柄を持っていた。
北からは、雪山が静かに鎮座する極寒地帯。
南からは、活火山と荒野が広がる極熱地帯。
東からは、一面を毒湖沼に覆われた極湿潤地帯。
西からは、広大な熱砂漠が横たわる極乾燥地帯。
しかも、それら四極の地帯は明確に分けられている訳でもなく互いに凌ぎを削るように侵食しあい続け、今では四色のマーブル模様のように複雑なカオスを形成している。
その中心にあって、奇跡のように穏やかな気候に恵まれた盆地がある。
周囲の環境においては並みの飛龍では定住も許されない過酷さを誇

る。
寒すぎる。
と思えば暑すぎる。
ふと気がつけば辺りは霧に包まれており、
ようやく、と晴れてみればそこは荒野だった、という塩梅だ。
その中に在るオアシス。それがここということだ。
この厳しすぎる環境の中をガラドは人の身でありながら単身歩いて横断するという無茶をやり遂げたのだが、当の本人も成程納得せざるを得なかった。
天然の要塞。まさにそれであると。

●

ギルドナイツ宿舎一階ロビー。
いつもなら常時待機のギルドハンターや職員で賑やかなそこも、今は静か。
消灯によりライトは落ち、自動販売機から発せられるわずかな光だけが、無骨な皮ソファーの整然とした並びに明暗を投げ掛けていた。ただそれだけの部屋だ。
夜も更け、だ。だが、
かの青年ガラド・ドレッドルートと、顔一杯に笑みを湛えた長髪の男がそこにはいた。
線の細さは優男、のように見えてそうではない身のこなし。
男は齢四十程、いやそう若くはないか、という印象を受ける。
細められた目は弓のようにしなり、優しさと共に鋭さを内包する。
その物腰は柔らかく、だが力強い。
黒の長髪を垂らし、屈む彼の格好は完全な寝巻きのそれだった。
胸にワンポイント、左右にストライプの入った上下揃いのジャージ。
黒白を意識したデザインのそれは、正式にギルドナイツに支給される就寝用制服だ。

ラフな服装に包まれた男は無造作に、両の手にジュースの缶を携え宣う。
動きとして、右手に持つ缶を差し出しながらの彼の第一声は、
「実に、実に目出度い事だね？」
「……。突然何だ意味不明だ。どれだけ前置きトバせば気が済むんだ？　貴様は」
ガラドは答えとして、男の左手にあった缶を奪い取った。
伸ばした腕には、眼前の男と同じ色の袖があり、服装も同じだった。鋭く引き戻す動きで引っ張られるその生地は柔軟で、全く邪魔をしない。
確認のために、青年は恐らくこの男が飲むつもりであったのであろう缶のラベルを見た。
「……お汁粉？　甘党だな」
「是。冬だからね。暖まろうと思ったのだがね。……しかし、」
言い終わるのも待たず既にプルを引き飲み始めていたガラドを見ながら、優男はさも無念そうに、
「ギルド特製。――ガレオスのキモ入りという、精のつく一品だったのだがねえ」
ガラドは盛大にお汁粉を吹いた。

●

男は、さも残念そうに右手に持っていた缶のプルを引きながら、
「こっちはお前の好きな、コーンポタージュだったのだがね？　まあどっちでも――」
「……貴・様・は……！」
睨むガラドの口からは黒い粘液体が零れ滴っている。が、構わず、
「あ」
口直し、とそのコーンポタージュも奪い、代わりにお汁粉を男の手に押し付け、

「……っ！」
一気に飲み干した。
ガラドは口内に残る、コーンの残滓を咀嚼しながら、
……よし、美味いな。
ほおっと一息入れ、先ほどの悪食感を忘れようとする。と、
「おお、お汁粉君今お帰りかね？」
お、が多いなとガラドが思うが早いか、頃合を見計らったように男は呟いた。
「そしてサヨウナラ、ギルド謹製？つぶつぶキモ入りポタージュ・コーン味？君」
「それもうコーンポタージュじゃねえ――！！」

●

「美味しかったかね？　まだ我輩も飲んだことが無いのだが」
「言うに事欠いてそれか！　というかコーンポタージュですら無いぞコレは！」
「ハッ、同じ事を二度言う上に指示語の多い細かい男だねお前は。口に入れば全ては味と食感と栄養素でしかないことを未だに理解していないのかね子供だなあお前はハハハ」
「おい誰か！　誰か居ないか！　コオロギ探して持って来てくれ！」
その声に、手近な給仕アイルーが急いだ様子でロビーを出て行く。
男は、ふむ、と俯きながら手を顎に当て、暫く考え込むような振りをしながら、
「コオロギは昔食ったことがあるが中々癖になる味だったがね？ハンターたるもの食料は現地調達は基本中の基本だ。忘れるな……！」
「まさか、この流れで説教とは。ああ、予想もしなかったな」
「――というか、何時まで貴様は我輩を貴様呼ばわりかね貴様！」
「貴様のが！　伝・染・ったんだろうがっ！」

青年、ガラドは手元の缶を投げつけながら吐息する。
何故こんなのが俺の上司なんだ、と。
青年はこの男が苦手だった。
飄々として鬱陶しくて意味不明でネジが外れている、そんな彼が苦手だった。
「――チッ」
いくら邪険にしても笑みを消さず、放っておいてくれない彼が。
何時までも子供扱いしかしてくれない、面倒見のいい彼が嫌いだった。
しかし。
青年は改めて頭を強く振り余計な思考を払い、アジャスト。何故なら、目の前のこの男が、自分に話があるとだけ言って、ここに呼び出したのだから。
しかも彼はガラドの？教官？、いわば師匠だ。
なら聞こう、と。いや否、油断はできん――、と自らに言い聞かせ、
「それで話とは何だ糞教官。言っておくが、聞けよ頼むから。頼むから、――簡潔に頼む」
「是。流石に三倍頼まれたら嫌とは言えないね」
軽々と避けた空の缶を拾い、責任重大だ、と熟考を始める教官。
暫くして、うむ、と一言置き、彼は切り出した。いざ簡潔にいこうとして、
「いや何、難しい話ではないのだ。それというのはだね、近日お前に！　ああ漸くだ本当本当に漸くだよ？　うむ、――アレだ、ほら、その何かね、これがまたええとその、ようやああ――くおお――はあああ……！」
くねくねくねくね、と腰を基点にした身悶えを始めた。
それを見詰めるガラドは教官を白けた半目で眇め見ながら、
「簡潔に、って言われたのでわざわざ焦らそうとしたら、――本当に忘れた、と」
「い、否！　良いかね？　このパ――フェクツ教官たる我輩が一体

！　何を！　忘れるというのだろうかいやいや何も忘れる訳がない……！　だろう？　理解オッケイかね？　ドゥーユーアンダスターン？　ん？　ハイよろしい。ハハハ結構結構。――――気合……！」
……最後のはしっかり聞こえているしもう何も言うまい。
簡潔に、とかは叶うことの無い遥かな望みだったのかも知れない。
邪魔するのも悪いので、教官が、ふぬ、とか、ほあ、とか気合チャージするのを見る。
ちょっと長くなりそうなので、ふと傍にあったソファに腰掛け、一息つき、
「ひゅぺる――！」
どうやらまだらしいので、傍にあったリモコンを取りテレビをつけ、
「だ、だだっだだおらあ――！！」
見始めた番組が想定外の盛り上がりを見せたので、傍にあったハンカチを手に取り、
「よ、ようし思い出したよくやった我輩――って何故泣いているのだね貴様は！　しかもテレビなどいつの間に見始めたのかね！？」
教官が叫びとともに振り返った先には、樹海で泣き叫ぶ小さな子アイルーの姿がポップなテロップとともにに映っており、更に木陰には子アイルーを心配そうに見つめるハンターの背中も見える。ならば撮っているのは誰だろうかという話になるが、
「いい話だ……！」
「い、一体我輩の葛藤中に何をしているのかね！？」
「いや、冬休み特番の『はじめてのオトモかい？』が丁度今テレビでやっていてなあ」
「しかも自局……！　身内だからといって集金に居留守を使うのは反則かね！？」
「ああ、ギルド情報部・通称？ギルド放送狂会？の連中か。何故だか奴らは目をつけた奴に一日に五回くらい集金に行くらしいが、俺は確り払っているから何ら問題ない、と」

「このよく出来た弟子が……！　もっと我輩を見習わないかね！？」
「断固断るこの反面教師」
荒い息のまま怒号を放った教官を尻目にガラドはソファから立ち上がった。少なからずこの特番の録画を誰かに頼まなかったことを後悔しつつ、
「で？　話とは一体何なんだ教官。今度こそ簡潔に頼む」
尋ねるや、教官は額に汗など浮かべながらも告げた。誇らしげに、
「お前に赴任命令が出るらしいのだがどうだ嬉しいか嬉しいだろう嬉しいとｙｅａｈ――！」
「是。知っている。で？」
「……何？」
「いや、さっきクリスタルから聞いた。から知っている。――で？」
生まれたのは沈黙。
沈黙。
沈黙。
――――。
たっぷり十秒ほど経てから、
「……何かねその反応はあ――！？」
「自分でハードル上げた結果の当然の帰結だろうと俺は思うがな」
ふむそうかね、と教官は納得し、額に汗したまま真顔になる。
……変なところで聞き分けがいいな。
半ば呆れていると、目の前から声が来た。おかしいね、という前置きで、
「前々から、――本部から出たい出たいと思っていたのでは、なかったのかね？」
瞬間。
ガラドは初めて教官の顔を正面から見据えた。驚きと共に、
……見抜かれていたのか、と。

●

ギルドナイトにおける赴任命令とは、即ち独り立ちを意味する。
それは、一人前だと認められたギルドナイツに与えられる最後の任務。
ハンターのいない人里に赴き、護り、骨を埋めること。
それはつまり、人との関わりを持つということだ。
基本的にギルド本部で寝起きし、働き、鍛錬するギルドナイツは基本的にギルドに引き取られた孤児の集まりである。そうでないといけないのは、
……人すら躊躇い無く屠る覚悟と実力を必要とするため。
勿論それは悪人共に下される制裁であるのだが、人は人。
生半可な覚悟では容易くはない。
その覚悟を生み出すのは厳しい訓練だ。それは子供の頃から叩きこまれる。
そのため、ギルドナイツは本部にいる限り外界との接点が無に等しい。
だからこそ、ギルドナイツは人との繋がりに餓えるのだ。
赴任命令。
それは、一定以上の能力と資格、適正を持ち、数多くの？調停？をこなして来たその活躍が認められたものにのみ与えられる、最後の？試練（クエスト）？。
ギルドナイツにとっての終着点。そこにガラドが到達したということに他ならない。
だからこそ、
……嬉しく無い訳が無いだろう。
だからガラドは、是、と頷き、
「当たり前だろう」
少しは正直になってもいいか、と思った。

●

見れば教官は笑みを深くしていた。
ガラドは僅かな居心地の悪さを覚え、しかしそれを隠すように、
「言っておくが、他意はないぞ」
「まだ何も言っていないのだがね？　我輩は」
「ならもうその話はここまでだ。調子に乗るなよ糞教官。それで？　俺が行かされるのは一体どんな僻地なんだ？　砂漠か？　火山か？　雪山か？　沼地か？」
聞き返す。しかし教官はちっち、と指を振る？甘いな？的な動作を返した。
「そう急くものではない。世間には、急いては事を仕損じる、という格言があってだね。――まあ、我輩の百八ある一家言の一つなのだがね？
やはり、だガラド。そういう大切なことは自分の目で耳で肌で足で、本物を感じたほうが良くはないだろうかと我輩は思うのだがね。違うかね？」
「百聞は一見にしかず、という言葉もあるな」
「ああ、それは七十八番目の格言だね。――我輩の」
「……まあつまり、そこまで知らないんだな？」
「……――そうやって我輩を間接的に見下すのは止め給え。まあいい――」
一息。男はこちらを見据え、諭すように、
「ゆめゆめ忘れるなガラド。貴様は認められたのだよ。喜んで良い。誇って良い。自慢しても良いのだよ？　ならフィーバーしてもモチオッケェ――！　Ｏｈｙｅａｈ――！！」
「その妙なテンションは早急に止めろ。――しかしまあ、礼を言おうと思う」
「別に言わなくていいがね。――まあ、張り切って行って来るが良い、と言おうと思うね」
そうか、という一言を息継ぎとし。

ガラドは告げた。行って来るではなく、自分が最も慣れた肯定の言葉を。
「？是？――とだけ、言っておく」
遍く咎人を照らす？日？の下に、永久の？正？を約束する、その一字を。

●

「――一年、か」
一年前の夜のことだった、と思う。
先達でもあり恩師でもある教官からその言葉を受けたのが、一年前。分かったことがある。一年で。それは、
「過疎地域とは聞いていたが――」
前にも述べたここ一帯の異常とも言える環境の変化速度。
そのせいか、あらゆる獣達は定住するすら難しいらしく、
「まさか飛龍との遭遇率も過疎地域とは予想しなかったな」
ケルビの一匹、モスの一匹すら、何処にも見当たりはしない。
因って狩人（ハンター）も、狩る対象が違ってくる。違った先が、
……？茸狩り？とは上手く言ったものだな……！
「ままならないものだ……」
過酷な環境の下、ガラドはけなげに群生する茸達を一瞥する。
小さく地中から頭を出した茸はその身を揺らし、呼びかけてくるような気さえする。
『がんばる？　がらど？　おーえん？　する？』
『させん？　やっかいばらい？　りすとら？　けんりょくあらそい？』
『ふじやま？　じゅかい？　だめ？　ぜったい？』
……疑問系で励まされているような気もする。
「……是。俺は、負けずに生きるぞ」
その手始めとして、ガラドは遠慮なく茸を毟っていった。

あー、とか、おにー、という声が聞こえるのは幻聴だ間違いない気にしない容赦しない。
茸は喋らないのだから。当たり前の処置だとガラドは思った。
「――――」
ふ、と。
ガラドは今いる？沼地？の景色を見渡す。も、勿論そこには敵などいない。
「気の、せいか……？　――おっと」
『これ以上は何も無いようだ』
分かりやすいテロップと共に、群生していた茸を全て取り終えたことに気付く。
さて、と。景気付けの一言と共に、ガラドは身を起こした。
しかし彼は、次の採集ポイントへ向かいつつ、ふと朝のやり取りを反芻していた。
今度の相手は村の代表者。ギルドナイツとしての雇い主。
つまりは、村長だ。

●

「今日は、と。黄金魚に、トウガラシ。落陽草、ハチミツに薬草アオキノコ鉄鉱石とマカライト。あと個人的にイチゴと特産キノコイチゴは冷やしで。――どう？」
「……一つ、いいか？」
この女性は村長。
背丈は百七十あるかなしかと長身で、三十にも届くか届かないかといった風貌。
しかしその、白髪のような白髪の所為で老け気味に見えなくもない。
且つ。その髪には色鮮やかな赤のメッシュ。どうにも捉え所のない異相である。
しかし、確実に美人の域には入るだろう。そんな彼女。

ハンターの仕事、俗に言うところの？クエスト？はどの村でもそう、全て村の村長が統括し斡旋するしきたりだ。つまりは彼女がそれを司っている。
しかし普通ならハンターにも仕事内容の選択権くらいある。
そう、普通ならば。
「……多くないか？」
「ん？　ああ、多いわねえ。でもま、私たちじゃ外に出られないんだものねー」
……これだ。
ここで言う？外に出られない？というのは、村の外に広がっている過酷な環境のことを示唆している。
確かに、現場慣れしていない彼女らに、訓練も無しに狩場へ出ろというのは酷な話だ。
そのためのギルドナイツ。
そう、理解は出来る。しかし、である。
「頑張ってね？　さぞや辛いだろうから」
ガラドは溜め息一つ、咎めるように、しかし諦めたように、問うた。
「……分かっているのなら少しは遠慮したらどうだ？　――他意はないが」
口ではこうも言ってみる。
が、無駄だ。それも分かっていたことだ。
「だってこれは全部、生活必需品だもの。必要だけど、私たちじゃ採りに行けない。
だったら、餓えて死ぬか、採りに行ける人に頼むしかないじゃないの」
「そうは言うが」
「あーあー、はいはいストップストップ」
「あのな」
「一つだって言ったでしょ」

「否、だから」
……貴様はイチゴがないと餓えて死ぬのか？
などと言えていたら苦労はしない、否、多少は、軽くなっていただろうか。
更に言い募ろうとしたガラドを右手一本で遮り、村長は宣うた。
「どんな依頼だろうとこなすのが一流のギルドナイトでしょ？　しかも貴方、こうでもしなきゃただの無・職・よ？　プーよ、プ――！　分かったら仕事仕事！　あー忙し忙しー」
「うぐっ……」
まだ村長と呼ばれる歳でもなかろう、若輩の？村長？。
だが風格たるや、まごうことなき？村長？。
ひらひらと手を振り振り、歩いていくその後ろ姿を、ガラドは忌々しげに見詰めていた。
「……キノコに、イチゴか」
今日は沼地だろうか、とガラドは呟いた。イチゴはあっただろうか、とも。
誰もその呟きなど聞いてはいやしないことは分かっていたにも拘らず、だ。

2話　狩人猫の憂鬱

「おっと、――これは」
……厳選キノコか……！
そう呟いて手にするのは？厳選キノコ？と呼ばれる茸。しっかりと地に根付いていたそれを、ガラドは左右の五指で丁寧に毟り取る。それを手中で回し玩びながら、
「これは手土――否、自分へのご褒美だ。うん」
そう言いつつ、青年は茸を包み包んだ手を懐へとやり、ポケットにリリース。
「焼いたら旨いんだったか……」
……いや、やはりここは刺身でいやいや持って帰って茸ご飯いやいや待てよ――、
そう言い思いつつ顔は綻び、口は微かに曲を帯びていく。
厳選キノコ。
煮てもよし。焼いてもよし。生でもよし。刻むもよしな汎用性とその味に定評のある高級食材。特産キノコよりも身が固く、引き締まっていて、黒々として傘も大きく張り芳しい香りがして太くて逞しくて吹き出しを付けるなら『有難く味わうがいい……！』とか言いながら両手を腰に誇らしく胸を反りかえらせてポーズだろうかって何の話だ一体。
とかく凄く立派な特産キノコだ。
「――――」
ほう、と嘆息する。
何故だろうかこのキノコを見ていると、男としての畏敬の念と多少の嫉妬心が頭をもたげて来るから不思議だ、とガラドは思う。本当に何故だろうか。
……しかしいつ見ても何処かで見たことがあるような既視形状……！
直ぐに、思い出さなくてもいいか、という気になった。忘れよう、

とも。
「――ふん」
しかし調理をするにも腕が要る食材であることも確かだ。
ならば、
「ちょっと来てくれアーサー。――休憩にしよう」

●

確かに、？敵？はいなかった。
しかし振り向いた先には、確かに呼び声に応え小さくもぞもぞと蠢く影があった。
「何？　どうしたの旦那さん」
「良い物を見つけた。焼いて食おう」
猫。
いや、猫人とでも言うべきか。
毛むくじゃらの二足歩行動物、しかし猫耳があって愛嬌のある顔つきをしている。
猫をそのまま直立させたようなその姿は、淡い黄毛と僅かの泥にに覆われていた。
名はもう有る。アーサー、という名が。
オトモアイルーだ。
獣人族という特殊な種族に属する、アイルー、メラルーという動物がいる。猫に酷似し　たその姿はしかし、しっかと地に二本足で立つ二足歩行動物。
知能は高く、野生のアイルーなどは徒党を組んで襲い掛かってくることもあり、とても厄介なものだ。それはそれはもう大変厄介なものだ。
何が厄介かだと？　決まっているだろうが。
可愛過ぎて手が出せないのだ。
その知能の高さから人間社会に於いても彼らはそれなりの地位を占

めている彼ら。
あるものは料理人として、あるものは獣人族と人間間の取引のディーラーとして。
またあるものはハンターの修行をし始めたりする。それが？オトモアイルー？。
アーサーもそのクチだが、他のアイルーとは一味違う。

●

「えと、何？　旦那さん。呼んだ？」
「是、これだ。焼いてくれないか？」
え、という呟きのような悲鳴が聞こえ、猫は数歩後ずさった。
それを見て、
「何故逃げる？」
「あ、あのね？　えと、今のボクはオトモアイルーなんだよ？　そんなボクに料理なんて」
「――マタタビ三本」
「ええっ！？　そんなあ！　ちょっとそれは反則だよ！？　どっちか選べなんて……！」
「冗談だこの野郎」
この猫とも長い付き合いだと思っている。しかし、
……我等ながら何と安い主従関係か……！
「旦那さんはいい加減、ボクをお手伝いさんみたいに扱うのやめたほうがいいよ？」
「否。お前が自分の立場をどう勘違いしたかは知ったことではないが、村に帰ればキッチンアイルーでもあることを忘れるなよ。お前には休む暇など無い」
「そ、そんなこと言ったって、どうせ最後は旦那さんが全部やっちゃうし……」
「それとコレとは話が別だ」

ガラドは感慨深げに一息。ふ、と呼気を排出し、続け、
「最初、肉の焼き方すら知らなかったのは驚嘆に値したな。手ずから教えてやったのもそうだが、後から入ってきた新入りにすら教えて貰っていたしな。幾らなんでもどうかと思っていたがそのアイルー達も結構楽しそうに教えていたから良かったものの」
「料理は苦手なんだよっ！　もうそれ蒸し返さないでって言ったのにー！」
「確かに言ったが承諾はしていない」
「人の忘れたい過去を穿り返すのはそんなに楽しい！？」
「人なら心苦しいがアイルーなら超楽しい」
「アイルー愛護団体に訴えてやる――！」
「略すとサルの名前だな。――他意はないが」
「ゥキィ――――！」
まあまあ、と押しとどめながら、続く一挙動でガラドは厳選キノコをアーサーの鼻先に突き出した。
すると、眼前にいきなりそそり立った珍味に、アーサーは驚き仰け反り、
「せ、」
「せ？」
「せ、せ、セクハラ――！！」
「……何故そうなる。よく見ろ、ただの茸だ」
「え？　あ、あれ？　茸？　あ、そか、そ、そうだよね。あはは……」
「その割には、息が荒いようだが」
「き、きき気のせいじゃない！？」
しかし、ややもすると漸く正気を取り戻したのか、
「す、すす凄く、おおおっきいね！　こここんなの初めてだよっ！」
「いや、先ずは落ち着け。ステイカーム、ステイカーム」
幾つかの深呼吸を置いて、ガラドは再び尋ねた。それは挙動を伴

いながらの、
「ただの厳選キノコだな？　美味そうな、ただの食材だな？」
「あ、うん。是、是。――って何で擦るの！？　しかも上下！？」
「否、ただ泥を落とそうと。――他意はないが？」
「止めてよっ！　何か知らないけどいけないことしてるみたいだから！　――馬鹿！？」
……仕舞いには馬鹿呼ばわりか……！？
一向に焼こうとしない猫に焦れたガラドは実力行使に移ることにした。先ず手始めに、
「……！」
「って近づけてこないでよ！　しかも無言！？　あ、ちょっと、口あーんとか」
「ならば急いで焼くんだ。こんがりとな……！！」
「何この新しい脅迫――！？」
迫る茸の恐怖に思わず小柄な身体を仰け反る形となる猫。
「わ」
転びそうになる上体をアジャストするため勢いに合わせて小さくジャンプし、
しかしそこに伸びる手があった。
「どこへ行く」
飛び退いたアーサーを宥めるため先ずは動きを止めようとして、
「ひゃ……」
キャッチした。
「逃がすか……！」
続く動きで、
「あ、ちょ！」
ホールドした。
「ええ？　ちょ、ちょっと……何を――」
空中でキャッチされたアーサーは、ちょうど猫が両脇を支え抱えられるように、ガラドの両手にぶら下がる格好となり、しかしその屈

辱的なポーズゆえに、
「じたばたするな……！」
「するよ馬鹿あ――！！」
……成程。成程成程――、
素人目に見ても酷く興奮しているように見えたので、先ず手始めに、
「落ち着け。ほら深呼吸だ。さあ一緒に。ひ、ひ、」
「それ以上言ったら殴るよ！」
普通に深呼吸した。
「はあ――――……」
落ち着いたアーサーはじとっとした恨めしい目つきで見返してくる。
しかし、すっぽりと両手の中に納まっているままでの睨みはただの上目遣いでしかなく、そしてその両目は淡く潤みを帯びており、
……何だろうこの感情は……！
しかしそれよりも何よりも先ずは謝ろう、とガラドは正しく判断を下した。そして正しい行動としてその正しい誠意を示そうとして、数瞬を置いた後に、正しく行こうとして、
「済まなかったアーサー。次は、――もっと優しくする」
「もうそんなんどうでもいいから、先ずは聞いてね？　――あのさ？」
一息。
「ボク料理下手なんだよ？　一番分かってるの旦那さんだよね？　なのに――」
「是。よく分かっている。殺人級の料理を笑顔で出してきた回数まで覚えている。ワカメクラゲを正方形に切って混入し固めた偽ナタデココゼリーに始まりロイヤルチーズとブレスワインのカクテルに終わる計百八式の――」
「ぉうわあ――――！」
「痛っ！　終に手まで上げるか貴様は！　爪を出すな爪を……！」
「出すよ上げるよもうっ……！　どうせボクなんかボクなんかあ――！」

抱きかかえられたままで腕をぶん回してみせるアーサーを見、そして自分の両の前腕に疼痛を得ながら、ガラドは、
……これはこれで……！
先程からのこの感情は本当に一体なんだろうかと疑問を感じた。が、それは今問題ではない。だから、と言う代わりにガラドは微笑み、
「しかしお前は、焼きに限れば下手というわけではないことも俺は把握している。肉焼きが、俺がお前に教えた唯一最初の料理だったというのもあるが」
「それは……ほとんどタイミングの問題だけ、だしさ」
「卵も茹でられん奴がよくもまあ言う」
「それはそうだけどっ！　何でまた言うかなあ！」
「決まっている。――全て事実だからだ」
言葉に口を噤んだアーサーに目線を据え、まるで子供をあやすように言を重ねていく。
「お前がいつも一生懸命に学んでいたことも練習のために徹夜した回数も覚えている。言ってやろうか？　計百二十一回、失敗した日は必ず徹夜し内十三回は二夜連続。
それにまさか、料理音痴キッチンアイルーが、一人前以上に戦いのセンスに長けていたとはな。最も驚嘆に値する事項だ」
「でも、覚えられなかったし……」
「否。怠惰は罪だが努力は報われるべき美徳だ。結果は問題ではない」
「……う……」
「だからと言う訳ではないが、――頼めるか？」
数秒の迷い。
きっとそれは自分の腕に対する不安だったのだろう。が、それすらも喜ばしい。
何故ならば、迷う程アーサーも他人に出すものに妥協していないということだから。

「ああもう……、分かったよ。ありがと旦那さん。だから、降ろして？」
「是。――分かればよし」
何度も言うようだが、アーサーとの付き合いは長い。
上手くやれているかは、――見ての通りだ。

●

と思ったら、何かがかさりと地に落ちる音がした。
同時に、両手の中に納まっている猫からも、ひ、と悲鳴が上がる。
目をやれば、
「……何とまあ。――何と、」
マタタビが落ちているではないか。
数秒の沈黙が降りる。
……成程、先程からテンションが上擦っていたのはコレが原因か。
マタタビには、猫に対して性的興奮を引き起こす成分が含まれているという。
しかし、そんなことは今はどうでもいい。
すうう、と大きく息を吸い込み、ガラドは問うた。
「――さあ、何本特産キノコが集まったか、きりきり吐いてもらおうか」
「あ、あの、旦那さん？　これは、これはね、」
「ほう？　言い訳タイムか。原稿用紙二枚半にまとめて帰ったら提出してもらおう」
「それは暗に言い訳無用の隠喩表現？」
「よく分かってるじゃないか」
一息。
「一体、そこで、何を？」
「え――……、あの、その、マタタビを、抜いて、抜いてね？」
アーサーは先程からきょろきょろと落ち着かない目線だけを申し訳

程度に此方に向けると、意を決したように口を開いた。
「――鬘にしようかと、思ったのニャ。なーんてにゃははは」
「何がにゃははだふざけるな頭にマタタビ植毛してダンボール詰めて捨てるぞ猫婆」
――上手くやれているかは、見ての通りだ。

●

それにしてもまあ、これ程絶好の猟場もない、とも思う。
それは先ほどの厳選キノコを見ても思ったことだ。
ふと、後方に目をやる。すると長い葦にも似た植物が群生しているのが見えるが、何より目を惹くのは、？マボロシチョウ？の群れ。
そして右。少し先には硬い岩壁があり、深い亀裂が入っている。それは一目で判るほどに不自然な深さで人為的に掘られたものであることが判る。
他ならぬ、ガラドの所業だ。
そして亀裂の入っている岩壁の丁度真下には、ピッケルで掘り返した際に零れ出た鉱石がばらばらと散らばっていて、それらはすべて、？ピュアクリスタル？だった。
どれもこれもが、超高級素材だ。
このような猟場は採れる素材の質によって『下位』、『上位』『G級』と区別され、ハンターの腕が上がるにつれて入ることの出来る猟場がより良質なものとなっていくシステムだ。
その観点から見ると、ここは間違いなく『G級』、最上級レベルだと言える。
レベルの高い猟場が強いハンターだけに解放されるのは、その豊かな自然資源を狙ったモンスター達もまた、比例して強くなっていくからだ。
だが、ここにはハンターも、モンスターすらも居ない。
それはおかしい、とガラドは思う。

来たときから、感じていたことだ。数ヶ月前から、思っていたことだ。
これは矛盾だ、と。その類のことを。しかし、本部からは、
……そこは気候、環境ともに不安定なため、弱いモンスターは住み着けず、強いモンスターも好き好んで定住するものは少ない、と言っていたな。だが……、
それでも何かがおかしい、と。思ってしまうのは、考えすぎなのだろうか。

●

「――旦那さん？」
不意にガラドの意識が現実へと引き戻された。
気付く。ガラドの腕の中でアーサーが怪訝な顔でこちらを見詰めていたことに。
「どうしたの急に考えこんじゃって？　――頭のネジ逝ったの！？
――終に！」
「おおっとこんなところに何とも丁度いいダンボールが！？」
ガラドは？羅生門？と剣呑な筆書きで書かれたダンボールを拾った。
途端に、わあ、と慌て逃げ出そうとする猫。だが、
「逃がさんと何度言えば分かる……！」
むんずと掴み直した猫は、暫く慌てていた猫だったが、観念した猫なのか、
「い、一回撫でさせてあげる。それと交換ね？　ほーらフワフワモコモコだあー」
「――ふん……誰が、」
ガラドはその小さな体を迷いなく地面に下ろすと間髪入れずに頭をワシワシと乱暴に撫でてやったりくすぐってやったり頬ずりしたりし足りないのでもう一巡した。
……誘惑に負けたからだ。――他意はない。

お陰でフカフカの毛並みを存分に堪能することが出来たので別に結果オーライ。
「……」
ふと思う。
こいつは、アイルーの癖に一人前に気遣いなどしてくれて。
やもすると自分中心的な性格の奴が多いアイルーの中でも変わり者のうちに入るだろうか、とガラドは思っている。
それが酷く人間臭くて気に入っているのだが。それら全て込みで、……有難い存在だと。
「……いつまでも、変わらないね。――旦那さんは」
眼を細めて微笑みかけてくるアーサーはやはりくすぐったそうで。
ガラドは思い出す。
この村に来る前、ガラドの使役していたアイルー達は揃って逃げてしまったこと。
当然だ、と思ったこと。逃げて当然、と。そう思ったのも一年前だ。
しかし、続いたのは驚き。
思い出す。アーサーが、一人せっせと御握りを量産していた、その光景を。
「これが、ボクの――キッチンアイルーとしての最後の仕事だね」
ただ一人残り、共にこのドリィ地方に踏み入る決意を固めたアイルー。
何を言っている、という言葉と共に、ガラドは言った。
「――どうせだから焼き御握りにしてくれ。保存が利くし時間はあるからな」
「できるかな？」
「是。出来るだろう。なんせお前は――」
それはガラドにとって数少ない特別な存在となった。
そう、丁度友人のようなものだと思う。
それは使役などという言葉では語れない関係だとも思う。
それを？家族？というのだと思うが、――どうなのだろうか。

●

瞬間。

「――！？」

二人は見えない圧に押し潰された。

その衝撃に二人は声を上げることすら出来ず、微動だに出来ず、

「――――！！」

落下し行く厳選キノコだけが景色から切り取られたように下へ行き、泥濘に塗れた。

一瞬のことだった。

3話　泥沼の宝珠

見上げると、そこには澱んだような色をした空が拡がっている。
どこまでもどこまでも続く雲一つ無い灰色空だ。
冬。
　しかし幾ら暦の上ではそうだと分かってはいながらも、
「まあ、忘れちゃうわよねえ。――ここに住んでる者なら、みーんな」
　そう呟くのは、長白髪の女だ。姿勢は崩した斜め立ちで、両の腕をその胸の下で胸を抱えるように組んでいる。しかしその背後には景色として、
「目に付きやすい場所にこんなんデンと立ってたらねえ」
　彼女はその特徴的な赤メッシュの入った前髪を揺らし、背後の景色を肩越しに眺め、
「年中無休で咲く、――桜。ほんっとご苦労さんです、と」
　眼前には桜。樹齢数百年を数える大樹。
　眼下には見慣れた家屋の群れ。それは彼女が歩いてきた方角であり、
「――英雄の丘」
彼女の立っている場所が高地にあることを示している。それは柔らかな雑草に覆われた丘であり、立てば遠く四方、遠くは雪山や火山や砂漠、そして沼地までも確認出来、その頂点には例の桜があった。
「こんな大層な名前付けてくれるとはまさか思ってなかったでしょうね……」
　彼女はその大樹に寄り添うようにして立っていた。しかしただ立っている訳ではない。
　うわ言のように、しかし何処か感慨深げに。零れる言の葉は笑顔と共に溢れ、
「さっきから一体何ブツブツ呟いてんだお前。それ独り言かよ？

ルーテ・織銀」
「――――二人言、よ」
聞かれたが振り返ることはしない。何故なら、
「邪魔しないでよ。今、いいムードなんだから」
「桜の樹と、か？」
「……アンタには永遠に理解できない感傷だからねえ」
まあそうだろうな、と男の声がする。
それは肩越しに後ろを振り返っている自分の丁度背後から聞こえてくる。ならば、
「……いつから私の隣に来てたのよ？　モンジュ・門木」
「ほんっとご苦労さんです、の辺りからだな」
「うわ――ムカつく！　それから今までずっと気配殺してニヤニヤしながら私の二人言聞いてた訳ね！？　ハズかし――！　この変態！」
「別にニヤニヤしてねえ――！　……ま、聞いてたけどな」
まあいいわ、と村長であるルーテ・織銀は嘆息しつつ前を見た。
ここはドリィ村、その村落外れの丘。
ルーテが前髪を書き上げ僅かに下を向き、顎を引いて見詰める先。
そこには鬱々とした密林が遥か遠くまで広がっている。
ここの湿原地帯は木が多い。
だから翼を大きく広げるように葉をつける広葉樹林ではない、重々しく垂れ下がる葉を生やした木々が林立し、泥濘の土壌を覆い隠している。
だから、湿密林の中で何が起こっているかなど見えよう筈も無い。
しかし、
「でも、――いるわよね」
「あそこらへんか？」
モンジュと呼ばれた男は指を一本伸ばし、眼下に広がる光景の中の一点を指してみる。それをルーテは視界の端で確認して、
「違うわ。もっと右のほうよ」

「こっちか」
「もっと右」
「まだか？」
「ええ、――まだよ」
「――なあ、そろそろ一回転しちまいそうなんだが――」
「やーい引っかかった！　馬鹿が見る豚のケツ――！」
「女がケツとか叫ぶんじゃねえ――！」
そう叫ぶ男は、金髪の大男だった。
歳は四十そこそこ、優に二メートルありそうでギリギリ届かない長身。
服装も、パリッとしたスーツでキメているようで胸元などは着崩して中途半端。
艶やかに光り輝く金髪の剛毛などもざんばらでむしろ粗雑な印象を受ける。
サングラスも掛けてはいるが、今は鼻に引っ掛けているだけでその黒いレンズを通して風景を観ている訳ではなさそうだ。
葉巻をふかすその顔も強面、任侠に生きる者と疑われても疑問はない風情だ。しかし、
「――何ニヤけてんのよ」
「あ？　ニヤけてたか？」
「それはもう、気っ色悪いほどに」
「てめえ……」
まあいいや、とモンジュは苦笑。彼もルーテと同じように腕を胸前で組み嘆息する。
その様子にルーテは首を傾げた。何故この男は嬉しそうなのか、と。
考え、考え、考えた後に、
「――この変態」
「バレたか」
「言っとくけど、あの子達大体十七くらいよ？　貴方の守備範囲外。

外角で高め」
「マジですかよ？　七歳分くらいボールだな。
でもま、眼の保養にはなるから大丈夫だ。うん、――全然大丈夫だな俺は！」
「いやそんなんどうだっていいんだけど」
ルーテは漸く横目だけを男に向け、怪訝そうに、
「見えてるの？」
「んにゃ、全然これっぽっちも。勘だ勘。むしろ感だ。俺の美少女センサーがビビビのビ」
「高尚な感覚器官をお持ちだこと……」
男は一息置き、続く一言は何かを含むような口調で、
「――村長様の？予知？とか？千里眼？には負けるがな」
その言葉にルーテはふん、と鼻を鳴らす。次の一瞬には眼を前に戻しており、
「ま、当然よね。んで、これもどうでもいいっちゃいいんだけど」
「何だ？」
「看板。？ひでお？ってルビ入れたの誰か心当たりある？」
「あー、あるある。超ある。――超俺だと思う」
「超殺していい？」
「死を超えた先に何があるのか見てみたいもんだなあー」
「いよっしゃあ自殺願望カミングアウトゲット――！」
うおわあ、という大男の緊迫感の無い悲鳴を掻き消そうかと言わんばかりに丘の上は鋭く生肉を打つ鈍い打撃音に満ちた。それは絶え間なく続く連打で、いつしか男の悲鳴も混ざらない純粋な音となり、
……あれ？　そういや何しにここに来たんだっけ……？
まあいいや、とルーテは目の前のことに集中した。右、左、左右右と拳を入れていく。
大男が血肉塊と化していく傍で、冬の桜はくすぐったそうに揺れていた。

くすくすと、微笑みながら揺れていた。

●

並行して。
丘の麓から上がってくる喧騒があった。それらは新たな群集により発せられるもので、
なんだなんだ、と騒ぎを聞きつけた野次馬。
一杯やろうや、と酒を持ち込む酔っ払い達。
そして、
「ガラド、何処？」
「あ、それはアレですよ。朝早く沼地方向に行くのが見えましたから多分そこです」
「ぬまち、ぬまち……――きのこ！」
「おおっとお僕のマイスウィ――トエンジェルは予想外に無邪気で短絡的ですよ！？　で、でもそんなところが可愛い！　抱きしめたい！　――だ、駄目ですか！？」
「だめ――。おうちにかえってからねっ」
「ああもうそんな無防備に！　無防備に！　こんな無血開城は反則ですよ！？　ああ何か胸が一杯で呼吸もままならない！　気分はこう、天にも上るような感じで、ぱああって」
「ナル。鼻血出て、る」
大人達の生み出した喧騒に吸い寄せられた餓鬼共だ。

●

響き渡る。
朗々と湿林を揺らすほどに響き渡るそれは声だった。
大声音。
【――――――！！】

それは即ち、大気の波濤だ。
叩きつけ、圧し潰し、飲み込み、眼にも見えないその威なる力が爆ぜた。
それは波の形で刃の如く破をもたらす覇。それは容易く人の鼓膜を割る振動となり一人と一匹に襲い掛からんとし、
だが。
「これくらい防げずに――ハンターが務まるか……！」
……声がでかけりゃ、耳を塞げばいいじゃない……！
ハンターたるガラドは実際その通りにした。そのガラドの隣では、
「まあボクは、――ハンターじゃないからいっか」
……耳栓付けてて助かったあ。
ガラドの従者であるアイルー、アーサーはその猫耳に覆いを付けていた。繋いだ二つの純白三角形にフリルをあしらった艶めかしい形状を持ったそれは、すっぽりとアーサーの三角耳を柔らかに隠し包み、つまりはさながら頭に女性用下着を被っているかのようで、
「ギルド特製、？超防響パット・朝型夜用？！　――何か恥ずかしいなあコレ……」
「それを付けていれば咆哮は防げる。寒さも緩和される。そしてよく似合っている。それが全てだ。他に何か問題が？」
「ん、強いて言うなら、デザインとネーミング？　っていうか似合っているって何だよっ」
「何でもない問題ない全ては些事に過ぎない。それより、――来るぞ！」
叫びつつガラドは振り向き走る。振り向く先は声の震源、走る方向はそのまた逆。
「咆哮が聞こえるということは――」
……飛龍がいるということ……！
ガラドの思いに応えるように、沼地に再び咆哮が響き渡った。
しかも、
「――近い……！」

●

……近い。
沼地に入った時からそこはかとない違和感は既に感じ取っていた。
匂い？　……否。
音？　……いや否。
それは本当にどうということはない幽かな違和感。
空気の流れ。住まう小動物達のざわめき。注意していなければ見過ごし気のせいと片付けてしまう、そんな違和感。
しかしそれで終わらせてはいけない、そんな違和感を。しかもそれは、
【――近い……！】
【！　何がですの！？】
【え？　あ、んん！　――な、何でもないぞ。何でもない】
【……何がですの……？】
……しまった声に出してしまった……！
この独り言癖は直さねば、と思うと同時に、上手く誤魔化せたろうか、とも焦る。
内心だけで掻いている汗を自覚しながらせめても、と胸を張り、
【――何でもない。決して敵がすぐ近くにいるとか、そんな危機迫った状況でもないし、例えばそれが人間だとか、更にはハンターである心配もない。そしてそれをお前に気取らせないままでどうにかしようと思っている訳も無いぞ！　前約束したものな！】
【えー……、ええ。……約束しましたものね？】
【ああ、だから――大丈夫だ！】
【……だから何が大丈夫ですの――！？】
……ま、まあ、嘘を付けないということは美徳ですのね……？
考えていることが丸分かりどころかセルフ暴露してしまっているのはそれで果たして良いんだろうかとも思うがそういう素直なところも愛嬌ですのね！？　ですのね！？　などと思う傍らで、それに

しても、とも思う。それは、
……人間。
口の中でその言葉を転がすだけで、ぶるりと身が打ち震えるのが分かる。
その言葉を聴くだけで、ぞくりと悪寒が背筋を這い降りる感触がある。
人間。
それは最も忌むべき存在であり、最も恐るべき存在であり、そして、
……私達から全てを奪った存在ですの……！
だから、己の感情を押し殺し、震えそうになる声を必死に抑えながら、
【――？お姉様？】
【何だ？】
【何が、とは敢えて問いませんの。問いませんが――】
問うた。
【……――いる、んですのね？】

●

訪れた沈黙。
それは何よりも雄弁な答えとなり、明確な結論となった。
それが分かっているからこそ、諦めの色を帯びた声色で、
【私は嘘が下手だなあ……】
【い、いえですの……少なくともアレは嘘でもなんでもなかったような気が！】
【そ、そうか？】
ともかく、と気を取り直し、改めて問う。
【――約束、ですのよね？】
【……ああ。なんせ私達は、？双子？だものな】

ふ、と一つ、笑み混じりの吐息と共に、
【二人セットでようやく一人前。もう離れないと――決めたものな】
生まれてからこの方ずっと苦楽を共にしてきた。
共に育ち、共に練磨し、共に慰めあってきた。血のつながりもある。
たった二人しかいないのだから、双子というのもあながち間違いではないだろう。
……だからこその、以心伝心か。
迷惑に思ったことはない。むしろ、互いの思いを共有できるということが、どれだけ励みになったか。どれだけ力になったか。
だからこそ、護ってやらねば、と思う。
安全も、安寧も、今もこれからもずっと永久に。
過保護だろうか？　まあそうだろう。だがしかし変わることはない。
そんなことを思っていると、真横から不意の衝撃を受けた。驚きはするものの、しかしそれは不愉快を伴うものでは決してなかった。
【大好きですのっ、お姉様！】
【あこ、こらっ！　急に抱きつくなと日頃から言っているだろう！
全く……】
口ではそう言いつつも、私も仕方無しに身体を擦り付け返してやる振りをする。
何のことはない。仕方無しにしている、振りだ。何故なら、
……抱きつくならゆっくりと寝床でお願いしたい……！
何故なら一番ノリノリですりすりなのはきっと私だからだ。
最近何だか頻繁にスキンシップするようになってこちらとしても自分を抑えるのに必死というか実は今からでも準備オッケーというか同性にこんな感情を抱くのははしたないかとも思ったりもするが結局は役得なので、結果オーライだ。
……いつか打ち明ける時が来るのか？
だがどちらにせよ今はまだ言わない。何故ならば、
【大好きですのお姉様。――大好き】
【全くもう、お前というやつは……】

私はまだこの愛すべき妹の姉でありたいと思っているから。

●

顔を上げる眼前。
一瞬で疑念は確信へと変異を遂げた。ひゅう、と息を呑み、
「――人間……っ！？」
続く動きも一瞬だった。
隆とした大腿が歓喜し脈動。押し付けた後ろ足が大地を掘り削り爆ぜる。
そして己の躯を前へと弾き出し止まらない。標的は、
「――人間ッ……！」

●

肉眼で確認する限りは、どうやらモンスターの姿はまだ見えない。
それはひとえにここ湿地帯に立ち込める濃霧のせいであり、決して脅威が去った訳ではないことは明らかだ。しかし、こちらから視認できない限りはほぼ見つけられていないと踏んでいい。
しかしあくまでほぼだ。しかもその脅威は名を持った脅威であり、
「――鎧龍、グラビモス！」
ガラドの発したその声は大きいものではなかったが、まるでその声に呼ばれたかのように巨大な影が紫色の瘴気の中から現れた。
その影は次第にその色彩を鮮明にしていく。
純白。まごうことの無い白。
しかしガラドの目にはその白は異常だった。
その異常はしかし、決して不快なものではなくむしろ空恐ろしい程に、
「――美しい……」
グラビモス。

普通の固体はその巨躯と緩慢な動作とごつごつとしたフォルムから、無骨なイメージしかない外観をしている。武器とするものも、その巨躯をフルに生かした肉弾戦にどんな攻撃もはじき返す堅牢な甲殻と、

……西洋の重甲冑にも似て。

まさに動く砦のように鈍い白光沢を放つ筈のグラビモス。しかし、

「こんな個体は――見たことが無い」

錯覚ではない。目の前のグラビモスは甲殻をクリスタルのように光り輝き、まだ成長途上の個体なのか巨体も流線型、女性的な丸みを帯びたフォルムだ。

動きも軽くステップでも踏むかの如くこちらの方へ歩み進んでくる。それでもやはり、こちらをはっきりと捕捉している訳でもなさそうだ。

「――こいつがあのバインドボイスを……？」

……否。

その答えはやはり轟音津波となって現れた。

三度目の咆哮。

それはかなり近くから放たれていた。しかし眼前の飛龍に吼えた素振りはない。

ガラドの疑念が確信へと移行するや否や、白のグラビモスが顕現した場所を中心に紫霧が吹き飛ぶ。そこから現れるのは、もう一つの影。

グラビモス亜種。

●

「こ、こんなのいくら旦那さんでも……！」

茂みの中からアーサーは仰ぎ見る。

どうやら同胞なのだろうか、体の大きさは先ほどのグラビモスと変わらないくらい。

だが、決定的に異なる要素がそこにはあった。
色だ。
威風堂々と一歩一歩を確かめ、そして油断なく周囲を警戒する。
その新手の鎧龍はしかし、黒。それも黒の中の黒、？漆黒？。
咆哮一つで霧を吹き消したそのグラビモスはどうやら先ほどからの声の主らしい。
何か訝る様に、伺うように。慎重に歩みを進めてくるのは警戒の証。
それだけで分かる、強敵の予兆。
加えて相手は二頭。
「――やはり、こちらに気付きかけているのか」
ガラドは冷静にそう推察した。それが正しければ今いるここも危うい。
しかし、
「美しい……！」
それは無声音。口の形だけのものでアーサーにも伝わることはない。
しかしガラドは自分自身でその事実を確認せざるを得なかった。
美しい。
その甲殻に浮く黒光沢はそもそもグラビモスには無いもの。煤っぽい、粗野とも言える鈍い黒色しかガラドは未だかつて拝んだことが無かった。
一通り周囲を確認し終えたそのグラビモス亜種は、ほっと息をつくように首を一振り、先行していた片割れに追いつこうと早足になる。
ぐお、と呼びかけるように唸れば先行していた白のグラビモスも振り返り、
「――――」
抱擁する黒白。
寄り添えば、成程輝きは一層際立って見える。その中にも、
黒の固体はどこか、片割れを護るかのように。
白の固体はそれに、甘んじるように。
親しげに交し合う自らを相手に委ねきる動作。首の根元を擦り付け

合い、ぐるる、と優しげに唸っても見せ。それは二頭の間に確かにある固い絆を感じさせるもので、
「――対の、真珠か……」
黒と、白。その曇りなき輝きはしかし、一見粗野で堅い貝殻の内に秘められたモノ。
そして堅い堅いと思っていたそれも、一殻脱げば暖かく柔らかい面を晒すこともある。
それはまさしくこの邂逅であり、垣間見せた親愛の温もりであり。
そしてこの二頭は自然物でありながらも宝石と並び賞される、真珠。
それも、死の気配すらその身に纏わす最高級品に相違ない。

●

「帰るぞ、アーサー」
「えっ……？」
このままではここも危ない。
まだ見つかっていないだけで、何時存在を悟られるかは判らない。
だが、それが判るということは、こちらが先に相手を感知した、そのアドバンテージに他ならない。つまり今ならこちらの有利。
だから選択も自由。先制攻撃も、奇襲も攪乱も、逃亡さえも。
「今、俺は準備が十分とは言えない。しかも相手は二体。手間取るのは確かだ」
「た、確かにそうだけど……」
けど。
「村のこんな近くに、飛龍を二頭も放っておけないよ！」
そうだな、とガラドは頷く。
相手は二頭。重量級の飛龍。これがもし村に接触でもすればたちまち村は恐慌し、壊滅に追いやられてしまうかもしれない。それは判る。判るが、それよりも、
……ギルドの沽券に関わるからな……。

村の外道どもにはいい薬かも知れない、とも思ったが、やはり沽券が勝った。
だから、と。
だから、俺はこれからどうすればよいか。
「是、それならこうしよう」
よく聞け、と念を押す視線。それでいて、アーサーを不安がらせないように。
ガラドは小さく、冷静な声でこう宣告した。
「お前だけ帰り、俺の分のアイテムも持って来い。――俺はここに残る」

●

「……！？」
アーサーは、ふいにその口を塞がれた。
何故、と思うが、反駁の視線はその大きな手の持ち主の優しげな視線に相殺される。
「――――……」
そして次の一拍で、アーサーは全てを理解した。
……反論は認めない、と。
そして、
……ボクは足手纏いだ、と――。
アーサーは考えた。自分の主人の真意を。
口を塞いでいなかったら、思わず感情に任せて反駁していたかもしれない。
そんなこと、と。ボクも戦える、と。
否、きっとしていただろう。
そうすれば、その声で気付かれる可能性もある。
それはひとえにアーサーの落ち度だ。
同時に、それ以外に方法がないことを行動で伝えようとしたのかも

しれない。
未熟なアーサーに。
嗚呼。
アーサーは、心の中で無性に情けなくなった。
……ボクはこんなにも未熟で、――そして、
信用されてないのかな、と。

●

否、とアーサーは首を振る。心の中では横に。現実では縦に。
……そうやって卑屈になるのを、――未熟って言うんだよ！
ガラドはアーサーを信用していないわけではない。
単なる適材適所だ。
自分ならばグラビモスを押さえ込める。しかしアーサーにはそれは無理だ。しかし長期戦となるであろうこの戦いを支えられるかどうかは、アーサーの補給にかかっている。
幸い村は近い。否、状況は見方によっていかようにも変わるということか。
「――パラドクス、だよね」
急がば回れ。
負けるが勝ち。
真は偽となり疑は信となる。虚は実で虚の実は実は虚。真理など何処にも無い。
ならば、と。
ならば、アーサーがやるべきことはただの一つ。
「是。――がんばってね、旦那さん」
駄々を捏ねない事。それだけだった。

4話　歓喜得る闘争

ガラドは身を低くしていた。
背の高い草に隠れるためだ。他意はない。
ガラドは隠れていた。
グラビモスという強敵に見つからないようにするためだ。他意はない。
ガラドはその身を、震わせていた。
……二頭、か。
今更ながら、荷が重い、と思う。
二対一などは、まあ、まあ、ままあることだった。
不慮の事態は何時如何なる時もつきものだ。それは今も昔もそうだ。
ただ、気になることが一つ。
……このグラビモスは、『G級』なのか否かということ。
知ってのとおり、『下位』『上位』『G級』と、狩場は区分されている。
だが、『上位』と『G級』はほぼ別物と考えていい。
採れる素材も、そして、生息する飛龍の強さも。だが、
「それが一体どうした、ということか」
答えはそれでも、変わらない。
敵が居る。
脅かされる弱者がいる。
勝算がある。
自信も勇気もやる気さえも申し分なく在る。ならば、
「ならば、迷うことは無い。いや否、――迷う理由すら無い！」
その身は未だに震えが止まらない。否、
「ただの武者震いだ。――他意はない！」
ひとつ苦笑をその顔に浮かべ、ガラドは右の健脚に躍動の力を与える。しかしその動きとは裏腹に、ガラドは思った。否、気付いたの

だ。
……いつの間にやら、戦いに歓喜を得られるようになっていたとは、な。
いつからかは分からない。気付いたのも必死だった本部での生活から離れたせいか。
自分は、戦闘狂（バトルジャンキー）ではない、つもりだ。
そして、この喜びも純粋なものだと思う。素材欲などでは断じてない。自分の限界を知るという、そのプロセスとしての歓喜だ。
ならば、この喜びも、自らの名には相応しいものだろうか、と。
ガラドはそう思う。
母の冠した、？歓喜（ガラド）？の名に。
そう思う頃に、漸く敵前に躍り出る我が身。
ぐあ、と来て、おお、と長く伸びる咆声が響いた。
びりびりと、その鋼の口腔から発せられる大気の振動が我が身に容赦なく浴びせられる。
それは即ち、戦いの幕開けだ。
「さて」
身を低くし、その圧力をやり過ごしながら、上目にその二頭の芸術品を仰ぎ見る。
もう既に二頭ともが臨戦態勢だ。そこに油断も隙も見ることは出来ない。
まずは合格。ならば、
「……品定め、と洒落込もうではないか」

●

一人、か。
グラビモス亜種は、心の中で静かに呟いた。
ハンターが、一人。そして私たちは二頭。
そうか、成程。成程成程――、

……嘗められたものだな……！
人間風情が、一人。たった一人で、グラビモスである我々に挑まんとしている。
問題はない。奇をてらったつもりかどうか知らないが、油断もない。
現に今も、私は用心深く周囲を警戒している。
草叢？　岩陰？　やもすると、狙撃か？
否。
誰もいない。
ならば、そう、この人間の狙いも読めた。
……死ぬ気か……！？
　ぐあ、と来て、おお、と長く伸びる咆声を響かせる。
こちらが一声吼えれば、脆弱な人間などは身を竦ませ、身動きが取れなくなる。
その程度の存在だ。人間など。
だがそのような吹けば飛ぶような存在であっても、群れ固まれば力を発揮する。
小賢しく立ち回り、罠に嵌めては必死に短い爪で斬りかかったり、さらに道具に頼って攻撃したりする。目障りなことこの上ない。
……そんなもの、効きはしないというのに。
練磨に練磨を重ねたこの甲殻の前に、人間のか細い爪は傷もつけられず砕き割れる。
そこに例外は、ない。
【……お、お姉様……？】
隣には、勇ましく身構えるもののその身を細かく震わせている妹がいる。
……無理もない。姉である私には、その震えは恥ではない。
可愛い。
その理由も原因も、分かりすぎるほどに分かっている私には。
抱き締めてやりたい。
だから私は盾になろう。剣となろう。

ぎゅーってして。
降りかかる脅威を尽く叩き潰す、鉄槌となろう。
すりすりして。
手を下す必要はない。だから私が代わりに手を下そう。
優しくぺろぺろして。
怯える必要はない。怯えの元凶は私が排除しよう。
いやいやこれも全部さり気無くやらないと。
心配する必要はない。姉は、決して負けはしない。
こんな自殺志願者、さっさと殺してまたすりすりしよう。絶対それがいい。うん。
だから、と。私は前に出た。
【下がっていろ。私に任せて、な】
一刻も早く、この敵を妹の前から消すために。
【心配するな。素数でも数えていれば、そうだな――】
いみじくも、眼前のハンターの得物も鉄槌だ。
ならば、勝負。
【――七。七で終わる。だから、】
貴様の鉄槌と、私の鉄槌。
……どちらが強いか――！

●

グラビモス亜種は突貫を掛けた。
早期決着。勝負はこれに尽きる。
「……！」
迫る。迫る。迫る。迫る。迫っていく。
獲物との距離は衝突へのカウントダウンだ。
数を刻むのは脚。
地を蹴るごとに、地が飛沫く度に、終末は近づき駆け足に。
停まらない。いや否、

【――停まる理由すら無い……！】
前傾を深め、地を蹴り抉る度に、グラビモス亜種は加速をより高めていく。
しかし。
グラビモスの視界の中で、姿勢を低くしたハンターが背後へと逃げるように跳躍した。今まで急速に迫って来ていた獲物が一瞬停止したように宙に浮く。
だが、それは悪手だ。何故なら、
【――空中では避けれまい！？】
思い返せば、確かに今までも居た。
格好だけが立派で、全く役に立たないハンター。
威勢だけ良くて、思慮に欠けるハンター。
どちらが迷惑かといえば後者だ。団体戦の場合、チームワークを乱す者はまず味方から殺すと相場が決まっている。前者は何もしないだけいい。
まあ、私は両方殺してきたが。
その観点から見ると、この眼前のハンターは一人だが、
【まさか――両方か？】
そんな命知らず、敵じゃない。グラビモスは、間違いなくそう思った。
目標の停止も一瞬のことで、すぐに自らの速度が勝り獲物に近付いていく。
どうせ殺風景な沼地だ、そこに興醒めな死体が一つ転がったところで変わらない。その光景さえ眼に浮かぶ。その算段まで終えた。
瞬間。
「――――思ったな？」
【――――っ！？】
ハンターが眼前から、掻き消えた。
間違いなく、視界から掻き消えたのだ。

●

「ね――？　がらど、どーなった、のー？」
「私も聞きた、い。――かも」
「もしかして、負けてるんですか？」
「あ、あ――、あのね、ちょっと」
そこは、変わらずドリィ村の丘の上。変わらず、村長とスーツの男と桜の樹がある。
変わったのは、丘の上にいる人の数だけだ。
「ねえ――？　そんちょー？」
「あ――もう、私は野球のラジオ中継じゃねっつのよ。もう」
ルーテの周りには、女の子が二人、男の子が一人。そして、
「おうおう、やってるかい」
「おうよ。なんかな、例の小僧が久方ぶりに仕事してるみたいなんだわ」
「そりゃあいい。若えモンは苦労してナンボよ！」
酒盛りを始める大人たちもぞろぞろと集まり始める。
輪は次第に広がっていき、既に喧騒に向けての準備を進めていた。
その中で、既にいた金髪男はもとより、そのまた隣には雄雄しい赤髪のこれまた筋骨隆々たる大男がいつの間にか座っていた。
「奇遇だなモンジュ、一献どうだ？」
「お？　悪いね。そうさなあ。――五歳は外れてっけどまあ仕方ねえ、麗しき女児達を眺めながらの一杯、つーのもまたオツなもんかもなあ」
「つまり貴様は一体何処を見ている？」
「え？　決まってんだろお前の息子に。――いやあ、良かったなあお前に似なくて」
「果てしなく余計な世話だ、なッ！！」
一閃。
赤毛の男は躊躇いなく間違いなく容赦なく遠慮なく拳を叩き込んだ。

しかし、スーツの男は自分の顔面に拳が叩き込まれる前に、間違いなく赤毛の男の顔に浮かんでいた笑みを見た。
……おいおい、体張って宴会の前座ってのも楽じゃねえなあ。
男は数メートルを飛んだ。宙を、だ。しかし彼は平気な顔で、
「おいおい、さっきといい今といい、俺って殴られっぱなしじゃね？」
「やかましい！　ヤツといいお前といい、ウチのはロリコンに目を付けられっぱなしだ！」
「なんという親馬鹿だよオメエ。要するにオメエは馬鹿だな。つー事は俺は相対的に言って？えらい？に確定な？　勝った……！」
「理屈が分からんし貴様は間違いなく馬鹿だろうが！」
そんなことを言い合いながら金髪の大男は宙に居ながらにして体勢を立て直し、赤髪の男もそれを追うために飛ぶ。しかも、
その背には、燃え盛る炎のような、紅い翼が生えていた。
激しい空中戦の最中、その放物線の下にいた者たちは賑やかに騒ぎ、囃し、加速度的に祭りの熱気をその場に蓄積していった。そして、
「わ、なんかついた。ぴちゃって。ほらみてナルー！　なにこれ？」
「あああああ舐めちゃ駄目ですよルビィ！　汚いからぺっしなさい！
ほら、ぺーっ！」
もう、と悪態を吐きながらナルと呼ばれた少年は慌てて少女に付いた血を拭う。そして空中戦を繰り広げる大人達を忌々しげに見上げながら、
「僕の天使が！　マイスウィーツエンジェルに！　――ロリコン親父共の血が……！」

●

赤毛の男とスーツの男が早くも乱闘に発展した。しかしそのフライング気味な熱気は周囲の者たちに広がり、手際のよい大人達はあっという間に酒宴を構築していく。

その中で、ルーテに群がっていた三人も騒ぎ始める。
「父上。一体何をやっているのだろう、か」
炎のような赤い眼、しかしそれを半ば隠すような気だるげな半目のままで呟いたのは、目にも鮮やかな桃色の髪をショートカットした少女だ。
うつむき多少の影を落としたその顔立ちは整い大人びて、漂う雰囲気は愛らしさよりも表情に乏しいことも加味してクールな印象を強く受ける。
しかし、どれよりも何よりも明らかに眼を惹くものがあった。
髪色と同色の、長い、棘付きの、尻尾。
それが、少女の纏うフード付きパーカーの裾から垂れて左右に揺れている。持ち主の気だるげな表情とは違い、どこか楽しげに。
その前を歩くのは、
「ねー、ナルー？　あれのんでいいー？」
「だめですよー。あれお酒じゃないですか。ルビィはまだ未成年ですよー」
「え――。だって、だって、みんなのんでるのにー……」
「駄目なものは駄目ですよ。そう決まってるんですから」
「む――！　いいもん！　かってにもらってのむからー！」
長い黒髪をツインテールに結び白のワンピースを着た、可愛らしい童顔の女の子だ。
その体躯は本当に小さく、鞄でも背負えば小学生と見紛う程。
頭の両脇にあるリボンのようなものがピンと尖ったケルビの耳のようにも見え、
いや、否。
彼女には実際に、ケルビの耳が生えていたのだ。
リボンとは別、人の耳があるべき場所から。
元気にスキップなどしながら、スカートをはためかせ大人達の輪に入ろうとする少女。しかしその肩を不意に掴む手があった。
「だめですって！　先生に聞いたでしょう？　タバコと飲酒は二十

歳から――！」
「でもせんせーいつも？間違ってもいいんですよー？っていうよ？」
「……幾らなんでも故意に間違っちゃ駄目ですよ！」
叫ぶのは、艶のある黒短髪が目を引く男子。
いや否。見るべきはそこではない。
彼の背方にも、在ったのだ。やはり黒々とした、尻尾が。
彼は黒の制服姿が似合う痩躯を少女の前に割り込ませ、進行を遮断した。
「もーっ！　ナルじゃま――！」
「へぇ――ん！　平仮名で怒鳴られても全っ然怖くないですね――！　寧ろ可愛い……！　もう、撫でますよ！？　いいんですか！？」
「後半イミ、フ」
「むー！　むー！　む――！」
「ぼ、僕を退かさないとお酒は飲めませんよ！？　でも、可愛く何か言ってみたら――」
「――どけ」
「そ、そそそれは幾らなんでも可愛くないや可愛いですけどね！？　僕、今軽くショックで意識飛びかけましたよ！？　禁止ですよ禁止――！！　めっ」
間髪入れず、彼の股間から上が僅かに跳ね上がった。
それをもたらしたのは、少女の健脚だ。
顔をしかめる周囲の男達を尻目に、崩れ落ちるナルを踏みつけて少女は往く。
「元気出し、て」
後を行くハートは少年に声などかけてみる。
すると、震える少年の右手が力強く親指を立ててきた。
「ほら、いくよー！　はいやー！　どうどーう」
「あふっ……！　そ、そこは掴んじゃ、あああ！　らめっ、ぬ、抜ける――！」
そしてその体勢のまま、彼は少女に引き摺られて行く。

それを見るハートは、首を傾げて呟いた。
「――どなど、な？」
見送る二人の姿は、喧嘩に野次を飛ばす群集の中に紛れて見えなくなった。

●

「――結局、ああなっちゃうのよねえ」
呆れたように呟いたルーテは、ため息混じりに、
「気風かしら……？」
もしそうなら忌忌しき事態だ。いつの間にこんなに賑やかに、とも思う。
……相乗効果でもっと収拾つかなくなるし……。
村長としての自分の理想は果たしてこんな感じだったろうか、と回想に耽ろうとして、
そこに、
「思うにまったくその通り、かと」
不意に応えた声があり、ルーテはそちらに目線を下ろした。
そこにいたのは少女。
「あれ？　ハートちゃんは行かないの？」
ん、とハートと呼ばれた少女は小さく頷く。短めに切られた桃髪が動きに合わせてふわりと柔らかく靡き、仄かに香る芳香は彼女特有のものだと分かる。
続く挙動はこちらを見上げるものだ。開いた口は音を紡ぎ、
「ガラド、どうなった、かと」
淡々とした口調で、言葉を置くように喋る彼女。
しかし。
よく見ると、表情は変わらないのに彼女の頬は薄く桃色に染まっており、
「心配なの？」

「そうとも言う、かも」
「クールなのに妙に純情よねー。そういうカワイイとこは母さんに似たのかしらね？」
……まあ、父親と全く似てないのはいいことだけど。
あんまり可愛いのでルーテは桃髪少女を後ろから抱きすくめた。
「む、ぎゅう」
その動きに任せて、柔らかい草の地面に腰を下ろす。
少女を抱え込むような格好になった村長は、
「よーし、ハートちゃんは特等席！　――可愛いから！」
「何の特等、席？」
「ルーテお姉さんの実況生中継。タイトルは？（仮）少女の想い人は今……？で決まりね！」
「ふぅん」
突然、わああ、と群集が湧いた。
釣られて見やると、丁度赤毛の男がチョークスリーパーを極められているところだった。
しかし、ガタイのいいスーツの金髪男は不甲斐無くも地面に伸びたままで、
「母？　本当に一体何をしているの、――だろうか」
大男を締め上げていたのは、緑色の長髪を垂らした女性の細腕だった。
「何やってんだい、スーレ？」
「ああ。実の愛妻・レイに何故か絞殺されかけているに決まっていっ」
ごきん、という異音に、皆が顔を顰めた。
……ああ、あれはホントに落ちたわね。
どうでもいいが、締め上げている方も締め上げられている方もまんざらでもなさそうなのは夫婦円満の証だろうか、と、本っ当にどうでもいいことを考える。
「――新手のＳＭプレイかしら……」

「えすえむぷれー、って、なに？」
……いや、なにって、……方向性？
まだ教えるのは早いかしら、いやでも、と考えているうちに、まあいいや、という雰囲気になって来たのでこちらとしては助かった。あんまり詳しくないし。
しかしまあ、
「あれはいつものこと、だから。早く、実況ぷりーずみー」
「ああ、ガラドね。忘れてないわよ」
そろそろ群集の関心が一升瓶をラッパ飲みするツインテール少女に向いたあたりで、改めてルーテは沼地の方向に目を凝らした。どうせ彼のことだから、
「ああよかったわね、まだ死んでないわよ」
「……死ぬことも視野範囲内、なの？」
まあね、とルーテが答えると、ハートは俯きがちになり、
「……もしかして、ガラド、死ぬかも？」
「まあ、それは――」
……ハンターだからねえ。
無難な返答として、分からない、と言おうとする。適当なことをいうのも無責任だ、と。
しかし不意に、黒い塊が二人の横に倒れ込んできた。
それは人で、しかしボロ布の様でもあり、よく見ると男だった。
「――あら、ロリコン糞オヤジ。生きてたのね」
「あったりめえよ。奥さんがドロップで乱入して来てくれたからな。でねえと死んでた」
「どこら辺が当たり前、なの？」
まあまあ、とボロ布になったスーツ男は言った。そして、
「ガラドは死なねえよ」
「そう、なの？」
微かに嬉しそうにしたハートとは正逆に、怪訝な顔を男に向けたルーテは、

「自信有りげに言ってるけど、知らないわよそんな無責任なこと言ってガラド死んでも」
「いやいや。やっぱ死なねえよ」
何故なら、
「――ロリコンは簡単にゃ死なねえって相場が決まってんだなあ、コレが」

5話　想定内の予想外

音がする。
それは軽快なビートを刻み、その刻みは一定のリズムに乗って加熱していく類のモノだ。
巷では、トランス、と呼ばれるものだ。
その音は躍動の動きの中にあった。音源はガラドの腰にあるポーチ、その中の音楽再生端末から聞こえてきている。
音量は既にマックス。
ギルド謹製の特注小型音楽プレーヤー？こ、声が出ちゃうのっ？は、サイズは小さいながらもかなりの音量が出るという優れものだ。
「――ｏｕ　ｎｅｖｅｒ　ｄｉｄ　ｂｅｆｏｒｅ――……」
その身を戦いの中に置きながら、ガラドはその音の奔流の中に身を浸していた。
音の流れに身を置けば体は自然とリズムを刻みだす。どん、どん、という大気の振動すらも大気の孕む胎動のようで酷く心地よい。そして、
……アップテンポの音楽を、闘争の序章へと。
音楽によって脳を切り替え戦闘体制へと移行する。覚悟を知らせるパルスは足指の先まで行き渡り、程よい緊張を全身に強いた。
その総てに敢えて逆らわず。
その総ての流れに身を任せ。
……高揚せよ我が五体……！
音の流れは血の流れ。駆け巡る血潮すらも音楽だ。
刻むビートを鼓動とし。かき鳴らすドラムこそが心ノ臓。
音と同化せよ。一体となれ。自らを昇華し音楽を唱歌せよ。
そして躍動を得よ。
さすれば、
「――ノッて来た……！」

そして曲が丁度サビに差し掛かった時、ガラドは唐突に思い出した。この曲の題名（タイトル）を。そして、自分が置かれている状況と重ね合わせ、ひとつ苦笑。

……素晴らしい選曲だ。

今、高らかに謳え。今ひと時限りの、自らの御名を。

肺腑に躍動の大気を取り込み、ガラドはそれを意味ある言葉として吐き出す。

「――――鋼鉄の刃……！」

そしてガラドは切り込んで行く。

眼前の強大な敵。自らの脆弱を省みた上で不意という綻びから、さながら刃の鋭さと共に切り込んで行く。

●

My blood is ice, Im a device

――俺の血は冷たい氷　まるで機械さ

Nobodys lover

――誰のものでもない

Lets make a bet, cos life is winning or losing

――賭けをしようぜ　どうせ人生は勝つか負けるかだろ

I feel so hot, Ill never stop

――かなり熱くなってる　俺は止まらない

Good time is over

――楽しい時間はもうお開きさ

Lets make a bet, cos life is spinning a top

――賭けをしようぜ　どうせ人生は回るコマだろ

Ｂｕｔ　ｙｏｕ…
――だが　お前は……

●

突然の敵影の消滅。その正体は、いや否、これは消滅などではない。
……眼の前が、真っ暗に……！
前が見えない。そう思いつつグラビモス亜種は自らの油断を呪う。受けた動揺の答えとしてその首を大きく振り上げ、左右に振り、そして振り下ろし、
【――何だこれは！？　脱げない……！】
そうやって呻くグラビモスの顔面には、布のようなものが張り付いていた。しかしそれは水分をたっぷり吸っているようで、ぴったりと張り付いて離れない。
思い返すのは、敵との接触の直前の一瞬だ。まるで地面からせりあがるようにして、暗褐色の何かが自分の眼前に飛び込んできたのだ。それを、一体何であるかも理解できないまま頭から食らい、視界が遮られた。
ままよ、とグラビモスは顔を地に擦り付け布を剥ぎ取った。それを視認すれば、
【……外套……？】
これは、
……いったい何処からこんなものが！？
こんな外套、見たことがない。見たことが無いということは勿論あの人間も最初から着てはいなかった筈だ。着ていたのなら、見覚えがある筈。仮に着ていたとしても、
……投げつけられれば気付くはずだ。一体何処から……！？
そう思った瞬間、思わぬ箇所に衝撃を受けた。腹部だ。ということは、

【――下に！？】
突然の反撃。迂闊にも潜り込まれた懐。その一撃は軽くてとてもダメージとは呼べない攻撃ながらも、不意打ちとしてグラビモスを困惑させるのには十分だった。
……外套は、この攻撃の為の布石か！？
しくじった、とグラビモスは焦りを覚えた。今まで一度も覚えたことも無い感情だ。それを生まれて初めて得ることで生まれるその動揺は並大抵のものではなく、
それでも、流石というべきか。
グラビモスは思った。これは逆だ、と。
即ち、脆弱な人間がわざわざこちらの懐に潜り込んできてくれた。
その事実に他ならないのではないか、という思いにより自らの迷いを吹っ切る。
ならば、と続く判断は早かった。判断を置き去る反射にも近い反撃。
【ここだ……！】
選択したのは純粋なる圧し潰し。
単純ゆえに明快、しかし最善の攻撃がトンを優に超す重量となってその総てが、
「――――！？」
ただ一人の人間に圧し掛かる。

●

「……ほう」
……動揺しないか……！
実際のところ、ガラドは多少読み違っていた。それは一つ一つは極微小な誤差、しかしながらそれが全ての挙動において成されれば嫌でも認めざるを得ない。それは、
「――これは手が掛かるだろうな」
先ず一つは、思い切りの良さ。

先程ガラドがさも偶然の遭遇のようにグラビモスの眼前に飛び出したのは、実のところそれは偶然でもなんでもない用意周到な罠であった。
単純明快。
ぬかるんだ地面の上に外套を広げて置いておいただけ。
目的は、それを泥と共にグラビモスに蹴りつけ視界を奪うこと。
それだけだ。
しかし、戦いなれていない者にはよく効く不意打ちだ。特に若い飛龍、人間の小賢しさを知らない相手には。なぜなら、
……全てが自分の思い通りになると思ったら大間違いだということを知らないからな。
臨機応変は戦いの初歩。
常に二手三手先を予想しろ、とまでは言わないが、最低でも予想外の出来事に対する心構えは必要だ。それが出来ていないものにはオトナの制裁が待っている。
蹴りつける前に自分の得物に手を掛けることすらも罠。敵の目を武器に集中させておくことで、無意識下における罠への警戒を和らげておくのがミソだ。
その上で引っかかった罠に驚き、驚愕の果てに前後不覚に陥り、
「まごまごやっているようなら――先に一発鉄拳でもお見舞いしたかったのだが」
しかし、そうはならなかった。
素早く現状を把握し、パニックになることなく最速で原因を排除するが最善。
水を吸って重くなった外套に思いっきり頭から突っ込んで引っ被ってしまったのを剥ぎ取るには、成程何かに――擦り付ける必要もあるだろう。
簡単なことだが、すぐに実行に移すには勇気がいる筈だ。それをこのグラビモスは今まさにやってのけようとしているのだ。
「第二に、その現状把握能力の高さだ。全く驚嘆に値する」

呟き、藻掻くグラビモスに駆け寄りながらも、ガラドは思う。
……余程戦い慣れて来たのだろう。
見たところ、この飛龍は成体になってまださほど年月が経っていない。動きの端々に見える筈の、グラビモスの成体に共通してある鈍重さというか貫禄のようなものがこの個体には全く見られない。それどころか、躍動に満ち溢れている。
その示唆する答えは？　……成程。成程成程――、
「――幼体の頃から幾度も戦わねばならん境遇にありながら、それでも尚、生き延びて来たということか……」
グラビモスの幼体、バサルモス。
グラビモスと酷似した形状ながら、その腹部の甲殻の未発達さなどの要因から、岩石に擬態して外敵から身を守る習性を持つ。性格は温厚で戦いを好まないが、時折人里近くに巣を構える事もある。
しかし、バサルモスは言うまでもなく幼体だ。
戦うにも身を守るにも未熟なその飛龍が人の目に付けば、ただ一つの例外もなく新米ハンターに狩られ、ただの鉱石の素材へとその身をやつすことになる。
その脆弱さ故の、擬態能力。
戦わぬ故の、擬態能力。
戦い得ぬ故の、擬態能力――――。
……護る者もいない、この世界で……。
否。
きっとこの二頭は互いに護り守られ、それ故にここまで生き延びて来られたのだろう。
辛かっただろう、と思う。
きっと親は早くに亡くなったのだろう。それもハンターの手によるものなら、
「――人間代表として、責任は重大だな」
救わねば。
この広大な世界に産み落とされた二人の忌み子を、救わねば。

それは使命。
ギルドナイツとして、世界のアウトサイダーとして生きる自らに課せられた使命。
……否、我等がやらねば一体誰がやるというのか。
思いは決意となり、柄を握る手にもさらに力が篭る。
我等は、護らねばならない。
我等は、戦わねばならない。
その境界線とは一体何なのだろうか。諍いと慈しみの中間とは、一体何なのだろう。
その答えとして、この若きギルドナイトは一振りの刃となる。
続く動きは仰向けのスライディング。動きの邪魔となるハンマーすらもいまや捨て、空いた右手は素早く腰に挿してあるナイフに伸び、抜刀。暴れ狂うその漆黒の巨体、その腹下に開いた空隙に向けて滑り込んだ。
勢いは十分にあり、グラビモスの下を一気に通過できる程だ。泥濘のおかげでスピードも十分に出ている。それを、
「ふっ！」
一閃。
鋭く振るわれた右手は呼気と共に、握り締めたナイフを突き通す動き。
無駄な動きは無く、それゆえに自らのスピードを殺すことも無い。しかし渾身の。
全ての条件は揃い、その結果が眼前にある。ナイフは飛龍の腹甲殻の隙間に、
「全く、手の掛かる奴だ」
――僅かに刺さったのみ。
しかしその現実を目の当たりにしても、ガラドは怯みもしない。竦みもしない。寧ろ、その笑みをさらに深くしていた。
そして、
……これで終わりではあるまい！

目の前を飛ぶように走っていく、黒い甲殻に覆われた腹。直ぐに終わりは見えた。無論その終点には当然のように、
……尻尾があるだろう！
その棍棒のような超重量の尻尾を、グラビモス亜種は腹下を脱出せんとするガラド目掛けて叩きつけるつもりだ。これを食らうと間違いなく死ぬ。手持ちの武器ではどうやっても受け切れないだろう、とガラドは即座に方策を切り捨てていく。
……まあ、知り合いの中には止められそうな奴がいることにはいるが……。
咄嗟の判断で、ガラドは身を横に飛ばした。
間一髪、ガラドが先ほどまでいた場所に尻尾が叩きつけられた振動が全身に染みた。
投げ出されたガラドはその余波に身を任せつつ跳ね起き、ふと手元を見る。
と、
「……――嬉しい誤算、というやつか」
……ここまで想定外を重ねられると笑えてくるな。
僅かな驚愕。
しかし今は、それを与えてくれることすら喜ばしい。
目的は果たした。
手の中に在った物を放り捨て、ハットを直すと、ガラドは自らに確認するように呟いた。
「――ａ　ｃｏｕｎｔｄｏｗｎ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｂｌａｓｔ．　先ずは重畳、と言っておこうか」

●

Ｓｔｅｅｌ　ｂｌａｄｅ　！
――鋼鉄のブレードよ！
Ｔｈｕｎｄｅｒ　ａｎｄ　ｓｐａｒｋ，　ｓｏ　ｓｈｉｎ

y　in　the　dark
――サンダーとスパーク　暗闇を裂く光
And　youre　spinning　like　y
oull　never　stopping
――そして　止まることも忘れたようにスピンするんだ
You　never　did　before
――今まで味わったこともないように
Spinning　more　！
――もっともっとスピンするんだ！

Steel　blade　！
――スティールの刃よ！
Youre　turning　fast，a　coun
tdown　to　the　blast
――素早くその身をかわして　爆発までのカウントダウン
And　Im　hitting　like　Ill
never　lose　it
――俺は負け知らずに打ち続けよう
One　polling　and　I　won
――一回引けば俺の勝ち
Numbar　one　！
――ナンバーワンさ！

●

……卑怯ですの……っ！
今まさにグラビモス亜種がハンターと激突せんとした時、白のグラビモスは見た。姉がむざむざと敵の張った罠に掛かる場面を。
飛龍同士のぶつかり合いしか眼にしてこなかったグラビモスは即座に思う。目潰しなど、卑怯だと。それだけにどうしようもない怒り

ともどかしさが込みあがってくる。
しかし、ただ見守るだけ。否、彼女には見守ることしか出来なかったのだ。
【お姉様と共に戦いたいのですのに……！】
……ヒトを目の前にすると、脚が、竦んでしまいますの……！
それは、幼少時代の経験。
目の前で繰り広げられた惨劇。ただ父の強さを、母の温もりを無邪気に喜ぶだけだった自分達に見せ付けられた過酷過ぎる現実。
ただ得たのは、絶望。
もう既に、護る者はいないのだ。
残された、否。残されることを強いられた自分には、認めるには辛すぎる事実しか遺されてはいなかった。それでも、
……お姉様がいてくださりましたもの……！
あの日から、沢山の試練を潜り抜けてきた。
外敵。天敵。同族との縄張り争い。天変地異に、飢餓。どれも何とか二人で協力して凌いで来た。飛龍としても若輩の自分達にはあまりに辛い道程だった。
全ては、姉がいてくれた御蔭。
その強さで、その豪胆さで、弱い自分を一生懸命引っ張って来てくれた御蔭。
なのに、ああ、どうして、どうして。
【脚が動かないのですの……っ！？】
　溢れて来るふがいなさがグラビモスの心を満たし乱し、それでも動こうとしない我が身を彼女は恨む。
……私が臆病なばかりに。お姉様はいつも危険な目に逢うのですの……！
姉として気負いすぎるところのある実姉は実のところ、妹であるグラビモスには敬愛の対象であると同時に、自分の不甲斐無さを明瞭に映す鏡でもあった。
もっと自分が強ければ。

ちくり。
もっと自分が弱くなければ。
ちくり。
その思いが強くあり、目元には涙が溢れて零れようとする。
ふがいない自分を今も姉は許してくれているが、今回は今までとは違う。
今まではその涙も眼前のハンター共と共に姉が吹き飛ばしてくれたが、今回だけは違う。
【強くてかっこよくて、凛凛しくて心も強いお姉様。……でも、それでは、】
　最後の言葉は躊躇いと共に。
【私はただの――――――足手纏いだったのですの……？】

●

【――――おかしい……】
グラビモス亜種は、早くもこのハンターの異質を感じ取っていた。
おかしい。……どこがだ？
混乱している訳ではない。だがだからこそ、グラビモス亜種は慎重に現状分析を試みた。
……こちらには、――腹に一刺食らったか。
感覚だけで確認する。それが示すのは、
……こちらの腹部に浅くだが、敵のナイフが刺さっていること……。
成程切れ味のいいナイフだ。恐らく解体用のものではないか、とアタリをつける。
しかし脆い。
見れば、敵の右手に先ほどのナイフが納まっているようだ。
否、あれをナイフと呼べるなら、の話だが。
【苦し紛れか？】
敵は愚かにも、迂闊にこちらの甲殻に切り込んだおかげで武器を一

つ失ってしまった。
即ち、
……ナイフを折ってしまったのか……。
その刃先がこちらにある。まあ、それだけの話だ。
しかし対するあちらは無傷。まあ、一撃ずつしか互いに打ち込んでいないのだから、致し方ないとする。
それでも、あちらの攻撃は効かない。何故なら、
……ヤツの得物は、こちらに在るからな！
ナイフの攻撃すらも恐るるに足りず、況やヤツは今や無手。得物のハンマーはこちらの背後に無造作に投げ捨てられている。
勝った、と思う。
けして過信は出来ないが、こちらの攻撃は総て必殺。
対してあちらにはそれが無い。
一撃当てれば勝ちの飛龍対、攻撃手段がない人間ではどちらが勝つか。
現に今、尻尾の攻撃も突進も読まれていたとは言え惜しかった。ならば勝ちは決まったも同然。長期戦になればなるほど、それが顕著になってくる筈だ。
その筈だ。その筈ではないか。これは紛れもない事実で、
【――――……】
……本当に？
待てよ、と思う。
こちらの攻撃は総て必殺。罠に嵌めたとは言え暴れまわる私を潜ってまで手薄な腹部をわざわざ狙い、あんなリスキーな攻撃を敢行した上で、その上で私の反撃を回避した。
そう。最後の攻撃は回避したとはいえ食らえば死ぬところだ。
なのに、
……何故そんな表情が出来る……？
一歩間違えば死ぬ。そこまで隔絶した力量差があるのに、何故そんなに冷静で、何故そんなにも命知らずで、何故たった一人なのに、

その口元は。
【……何故、笑っていられるんだ……っ！？】

●

その頃。
今まで宴会の場であったはずのドリィ村の一角は、誰がどうまかり間違ったのか、
「さあ、ガラドとグラビモス二頭の世紀の好カードだぜ！　張った張った！」
観戦に飽き足りない村人達の賭場と化していた。
場は思いも寄らぬ盛況ぶりで、悪酔いした男達や騒ぎを聞きつけた若者、女性も次々と参加していった程だ。
とはいっても、
「村の番人に、まさか負けろという奴はいないわよねえ」
「村、長？」
「ん？　なに？　ハートちゃん」
「いる。父が」
見やれば、
「よし。俺は決めたぞレイ。――全財産賭けようか」
「あのねえアンタ、私怨に家計巻き込むなって」
「……レイ、よく聞くんだ。これは私怨ではない。――逆恨みというのだ」
「余っ――計――悪くなってないさね？」
「敢えて無視するが許せ。さあ行けグラビモス共、ガラドなぞ一捻――」
「――りになるのはアンタだよっ！」
雪崩込むように二回戦、開幕一番に捻り逆十字を極めたレイをルーテはすがめ見て、
「夫婦円満ねえ」

「いったいどこ、が？」
「そりゃまあ、ハートちゃんも大人になったら分かるわよ多分」
……あ、でも相手がアレじゃそうでもないか？　まいいか。
よしよし、と桃色の髪を撫でてやる下、ハートは心地良さそうに目を細める。
……可愛いなあ……。
こんな子供欲しいなあ、とか婚期を逃したキャリアウーマンのような発想が浮かんでしまうのも詮無いことでしょうよ、とルーテは恨みがましく思う。
……どっかの誰かさんのせいでね。
しかしそうやって言い募る相手はもういない。そしてここまで浸ってしまうと自然に思い出されるのは勿論過去の思い出であり、気分は自爆的に下降気味で、
「あーもう、やめやめ」
「何、が？」
「あーんもう可愛いー。お持ち帰りしたーい」
「全面的に断、る」
とは言え。
どうやら今回のオッズは丁度五分五分といったところだった。二体一というハンデを純粋に支持した者や、馬券のように大穴を狙って、という者もおり、または、
「同類だから、ってね……」
……そりゃ、いろいろあるわよね。
何故なら、
……この村自体が、訳ありだから……。
「ガラドが負けたら、私達も只じゃ済まないってのにね」
ふ、と軽く微笑むルーテ。しかし、
「ガラド、は、」
「ん？」
「ガラドは負け、ない」

しかし、その苦笑を留めた者がいた。
言葉足らずながらも強い否定。ルーテの言葉への、だ。
言葉と共に背伸びをするように、ハートはルーテの眼を見詰め返した。
眉を立てた、ハートの焼けた鉄のような色の赤眼には、確固たる意思が灯っている。
しかし、その眼光もふいと力を失い、
「たぶ、ん」
「そっか。ハートちゃんは信じてるもんね。――ガラドのこと」
しかしまだハートの表情はどこか曇っていて、
……賭けるものが有ったら、とも思っているんでしょうかねえ……？
どうやらハートは持ち合わせがなかったのか、賭けに参加していないようだ。
お小遣いでもあげようかとも思うが、それでは駄目だろう。他人の金で応援などする気にもなれまい。
それでも、
「そうね。きっと皆も信じているんでしょうね。ガラドを」
……きっとガラドなら、何とかするさ、と。
……ガラドのことだから、仕事はきっちりやるさ、と。
それは、根拠などないただの憶測だ。しかしだからこそ。
信じ、頼る。――信頼とは、そういうことだ。
無根拠ながら、否、こういう物は無根拠だからこそ皆がそろって信じられる。
「いざと、なったら、」
「なったら？」
「私も、――戦えるから」
言うや、
「――嬢ちゃんその意や良し、だ！」
気付き、見渡してみれば周囲の者たちがこちらを見詰めていた。
その中の年配の老人が、

「だが心配せんでもワシらがガラドの仇は取ってやるからな！」
老人はそう言うと、懐から緑色の長槍（バンブー・ランス）を取り出した。
「長緑槍？ＢＬ・改？。――現役を思い出すのう！」
隣に座っていた男も、
「おいおい爺さん、そんな旧型で無理すっと死んじまうぞ？　それに、こんな爺いに手柄取られちまっちゃ俺らも格好もつけられんし、な」
「おいおい何かお前らエラくいい空気吸ってんなあ。――バカなのになあ！」
「お前が一番馬鹿だろうが！」
スーツ男が言えたのは一言だけで、後は打撃音と共に血気盛んな男達に飲まれていった。
ハートはそれを眺め、
……自業、――自得。
しかし、あることに気付き、周囲を見渡して見れば、
「皆武器を持っ、て？」
「そうよー。基本皆お祭り好き乱闘好きのアメリカン体質だしね」
リンチに加わっていたものは皆、武器を振り上げ、うるせー、と応えた。
しかし皆が皆、顔には笑顔を貼り付けている。
だから、と言うように、
「ガラドがピンチになったら、――皆で行きましょうか」
ルーテは、ね、と念を押すとガラドのいる方角に顔を向けた。
苦笑と共に、
「皆は、きっとこうも思っているのでしょうね」
……俺達だったら、何とかなるさ、と。
ただ、無根拠に。
「皆、馬鹿よねえ」
「全くその通り、かと」
「でもねハートちゃん。――それがウチのいいところよ」

踊る阿呆と見る阿呆。どちらも阿呆ならどちらが得か。
ルーテは、すう、と息を大きく吸い。
さあて、と前置き高らかに。
「さあ、ガラド選手、立ち上がった――。グラビモスと対峙します――」
宣言した。
「沽券やら体裁やら血気盛んな馬鹿共の乱入予告やら複雑になって参りました大一番――始まりますは第二ラウンド。今、ゴング！」
そんな自分は外からどう見えてんのかしら、と思ったところで、ルーテは気づいた。零れる苦笑は隠すこともなく、いぶかしむ少女の桃色の頭をわしわしと撫でてやる。
……気づいたら意外と、私もノッてたりするのよね。人のこと言えないわ……。
言うや、背後で馬鹿共の歓声が盛大に沸きあがった。

6話　知的な馬鹿騒ぎ

……危険だ。
グラビモス亜種はその鋭すぎる本能で感じ取る。無意識下で、しかし確実に、
【何が危険かは不明だ。――だが危険だ。それだけは判る】
……だが、それ以上は判らない。なぜ危険で、どれくらい危険なのかも。
それは、未だ嘗て感じたことのない感覚。
奇妙とも言えるような違和感だ。それはまるで、
……人間を、相手にしていないかのような……？
【馬鹿な】
有り得ない。全く自分は一体何を考えている。全く馬鹿馬鹿しい。
止めよう。何をだ？　決まっている。そう、決まっている。
【決まっているだろう……！】
この人間を侮るのだけは、今後一切止めよう、と。
今からこの小さい何かは人間ではない。――人間ではない何かだ。
そう思わなければ、殺られる。殺られてしまう。そして私が殺されてしまっては、
……残された妹を護ってくれるものはもう、……何も無い！
それでは妹を。護るべき者を。護られて然るべき者を護れない。
だからこそ、
【……馬鹿馬鹿しい……っ！】
全力で、殺る。
この奇妙な違和感など消し飛んでしまう程に。気のせいだった、と言える程に。
今も尚視界には彼のハンターが映っている。認識はもう人間、としてではない。
注する視線は奴の顔の辺り。表情は帽子で隠れてよく見えないが、

それだけではなく、
【……もう私には、奴が何をしようとしているのか全く判らないな……】
人間が次に選んだ攻撃は、単なる突貫だった。しかし武器の一つもその手には無い。
あらゆることが規格外に思えた。そんなことを思うことが余裕というものなのか。
余裕ついでに、漏れてきた苦笑すらグラビモスは噛み締める。それにしても、
【……今日は全く、ついてない日だ】
そう言った次の瞬間には、脚が泥濘を弾き飛ばしていた。
敵を迎え撃つ為に。

●

……あれは本当に人間ですの？
グラビモスは疑問を拭い去れないでいた。それは先程からのハンターの行動についてだ。
【これが……これが、――人間のやることですの！？】
それは、未だ嘗て見たこともない光景。
異様とも言えるような光景だ。それはまさに、
……無謀というか命知らず過ぎますの……っ！
【馬鹿ですの……？】
人間らしくない。
この人間は人間であって、人間らしくない。
人間とはもっと卑怯で、大勢で寄って集って、道具に頼って、そして脆い。
それは自分たちが立証してきたはずだ。
だがこの小さい何かは違う。――人間でない何かだ。
明らかに自分より強大で、勝ち目のない戦いにあって平然と命を

賭す。
ちくり。
グラビモスの見立てでは、
【三度――――いえ、四度は死んでいてもおかしくないですの……！】
しかも弱弱しい攻撃とはいえ一矢報いることにも成功している。
【あんなに強い、お姉様に……】
ちくり。
……あんなに弱い、人間が……！
ちくり、と。
先ほどから感じている胸の中にある疼痛は一体何なのか、とグラビモスは疑問を得る。
胸を患っているわけでもなく、外傷は当然ない。
戦っていないのだから。
戦っているのは姉で、護られているのが自分。それは事実で現実で紛う事なき真実で、
ちくり。
【……ならば何故、――痛みを得るのですの……？】
なんと無責任な痛みだろう。
戦いの最前線で、自分に痛みを与えまいと愛する者が傷つき続けているのに、護られている自分は満足に護られていることすら出来ない。身勝手な痛みを得続けている。
今までの戦いの中で、こんな痛みを感じることはなかった。否、感じる暇が無かった。
だから気づけなかった。そんな感情が今ここにある。
これが、
【……悔しい、ということですの……？】
悔しさ。
悔しいと、グラビモスは間違いなく感じたのだ。
グラビモスとして、誇り高き飛龍として、生を受けた自分。

……それなのにこんなにも弱くて護られてばかりで、それを、
【――当然のことだと、心のどこかで思っている自分が……！】
自分に言い訳し、肯定してくれる姉に甘え、依存する自分が。
人間ですら持てる当たり前の感情にすら気づかなかった。そんな自分が。
どうしようもなく情けなくて、恥ずかしくて。
そんな自分がどうしようもなく嫌で。
……私は、お姉様の足手纏いにはなりたくありませんの……っ！
【約束、ですの】
顎を上げ目を上げる眼前、自分の居るべき場所は既にある。
自分が必要とされている戦場が。それも思い上がりかもしれないけれど。
無意識に脚は前に出た。
自分の護るべき者を護るために。
【……約束ですもの……！】
いつか交わした約束を、守るために。

●

Steel blade！
――鋼鉄のブレードよ！
Thunder and spark, so shiny in the dark
――サンダーとスパーク　暗闇を裂く光

●

再び相見えんとする一頭と一人。
両者とも既に疾走体勢。止まることは決してない。
否、先に足を停めた者が――即ち敗者となるのだろう、この戦いは

そういう類のものだ。
しかし戦場とは常に移り変わり続けるものでもある。
人間と飛龍の一騎討ち。
片や無手。纏う防具は紙同然だ。
片や全身が武器に等しい。しかも血の通った自由自在の武器だ。
そして、
「ほう」
……切り替えてきたか。
それは眼を見れば分かる。
先程のグラビモス亜種は、油断無く、隙も無く。
……ただ驕り、傲慢だけが有った。
言い換えれば、自信。裏付けたのは恐らく百戦を経たが故。勿論幾多の人間達とも何度も手を変え品を変え戦って来ただろう、それゆえの自信。
それは罪ではない、悪でもない、ただの未熟だ。
それは脆い。
崩せば流るる砂城のようなものだ。だからこそ付け入られる弱みとなり得る。
上には上がいる、という言葉があるがまさにそれだ。教官が自分の言葉だと言い張っていたがあの調子ならきっと違うのだろう。一体誰の言葉だろうか。
きっとグラビモスにとってセオリーだったのだろう開幕直後の突貫。確かにあれだけの勢いがあれば、そこらのハンターはガードしても消し飛ぶことだろう。だが、捻りのない突進など達人の目にはお好きにどうぞ、というようなものだ。如何様にも捌ける。
セオリーが全てではなく、奇策が全てではない。全てはコインの裏表で表裏一体。
しかし、だからこそ?今?がある。
「素晴らしい……！」
今、その眼には驕りはない。その?今?だからこそ、

「是。今こそ素晴らしい――そう、素晴らしく痛快で対等の勝負を俺は、」
ただ願うように、ただ祈るように、ただ強請るように――ただ吼えるのだ。
「所望する……！」
そしてガラドは激突の為の一歩を踏み締めた。

●

一直線。
ヒトと龍は、最短距離を真逆のベクトルで突っ走った。
黒のグラビモスは疾駆する。それは、純粋に攻撃を加えんとするための加速。
ヒトは同じく疾駆する。
しかし重量、堅牢さ、そして巨大さ、速度を備えたグラビモス。
すれ違いざまに有効打を与えることは人間にはほぼ不可能だ。
だからこその後の先。
「見せてみろ……お前の全てを！」
姿勢は低く、見据える前方。大気を割り、地を揺らし、迫る黒き？力？の権化。
それは、絶対的なその質量を示し、その超重量を叩き付けんとし、
【おお……っ！】
「――――っ！？」
その身を、翻らせる。

●

And youre spinning like you
oull never stopping
――そして　止まることも忘れたようにスピンするんだ

Ｙｏｕ　ｎｅｖｅｒ　ｄｉｄ　ｂｅｆｏｒｅ
――今まで味わったこともないように
Ｓｐｉｎｎｉｎｇ　ｍｏｒｅ　！
――もっともっとスピンするんだ！

●

衝突まであと十歩。黒のグラビモスは、今自らの持つその突撃力を全て捨てた。
【定石の次は奇策が、――私なりの定石だ！】
地を抉る。軟らかい土壌はなすすべも無く削られ掘削されていく。
引き起こすは剛脚。
グラビモスは自らの脚で自らの推進力に制動を掛けたのだ。
それは横向きのスライディングの動きで絶対的な質量を全て左脚で受け止め、ただ。
深く深く深く深く深く地を削っていく。自らの脚への負担も鑑みない。
そして、
得られたのは急激な減速、左脚への激痛。更には、
【――……ぁああっ！】
黒金の鉄槌と見紛う尻尾の、薙ぎ払いだ。

●

「しかし……荒い！」
ガラドは既に左に身を飛ばしていた。
グラビモスの巨体だ。急激な旋回にはやはり無理が伴ったのだろう、歪が生じる。
一目瞭然なそれは、大仰過ぎる準備動作。当然といえばそれまでだが、

読める。それが全てだ。
突進の慣性を上乗せ、時間差で放たれた鋼鉄の尻尾の一振りも、
「当たる訳が無いだろう！　残念だったな……！」
言うべき台詞を言った後は素早く行動へ。それは即ち跳躍。
飛ぶ先は当然、尻尾が回ってくるのとは逆の方向。
つまり、
「逆らわずに、――さらに左へ！」
しかしそこは。理解するや、ガラドは呻きとともに叫んだ。
「――――真っ正面か！」

●

Steel blade！
――スティールの刃よ！
Youre turning fast, a countdown to the blast
――素早くその身をかわして　爆発までのカウントダウン
And Im hitting like Ill never lose it
――俺は負け知らずに打ち続けよう
One polling and I won
――一回引けば俺の勝ち
Numbar one！
――ナンバーワンさ！

●

【……まだまだ……ッ！】
眼前に飛び出してくるハンターをその目で確認し、グラビモス亜種は確信した。

自らの勝利を。
一点に集中したブレーキングの圧力のせいで左脚が深く地に刺さっていることが分かる。
そして振り抜かれた尻尾は勢いを維持して回り、引っ張られた体は突き立った左脚を支点に回転、独楽のようにその身を百八十度回す。
そして、
今や、自分の左隣に敵がいる。
しかも、回避のための跳躍のせいで身動きが取れない敵が。
そして、
……痛みは未だあるものの――動けないほどではない！
ぬかるんだ地面も粘土質の地層まで左脚がめり込み、踏み切り台の役目を果たした。
ならば、
【――――潰れろ！】
左脚を思いっきり踏み切れば、グラビモスの巨体はガラド目掛けて発射される。
体当たり。
後先を考えない一撃にのみ全てを費やす置いた捨て身の攻撃。自分のサイズ、ウェイト任せの力業上等。どこまでも愚直で、真正直な攻撃。ならば、
【これが、――私の信ずる、私の見せる最高の奇策だ……！】
全力は今や膝にある。あとは目の前の敵に叩き込むだけ――……、
と、
「これがお前の――全てという訳か」
踏み切りの直前で、眼前の獲物が歯を剥き、笑んだのが見えた。

●

……成程！
「大袈裟な攻撃は……ハッタリか！」

ブラフ。
例えば、ある真剣勝負の佳境において相手が大技を放ったとする。
その攻撃が威力を持った大技であればある程、受ける側は勝手に？
この攻撃が本命？と決め付けてかかる。その攻撃が意表を付いたものなら尚よろしい。
……だが、その攻撃すらフェイクであったとしたら？
当然受ける側は大技を回避する方向へと誘導される。何の疑念も持つことなく。
つまりは、油断する。
そして二段構えの大技が、そこには待っている。だとしたら、
……見事だ。
しかと見届けた。
間違いない。このグラビモスは生粋の誇り高き戦士。
戦いに美学を見出す闘士だ。
その身すら鑑みず、ただ戦う。全ては護るべきもののために。
それは、さしずめ、
「……成程。成程成程――、」
……あの、純白のグラビモスを、か。
護るという行為に陶酔し、外敵を排除することを躊躇わない。
いざとなれば、その身を投げ出すことさえ躊躇わない、究極のナルティシズム。
それを持つものは強く、躊躇いも容赦も無く、そして、……恐ろしい。
だが、と。ガラドは笑みながら逆説の叫びを放つ。
「だがお前は、護られる者のことを一度でも考えたことはあるか！？」
それがないのなら、ないとしか言えぬのならば、
「出直せ。残念ながらこれからは――卑怯な大人達だけの時間だ」
まだまだ未熟。戦いとはそういうものだ。

●

日は既に傾き始めており、いよいよ祭りもピーク。ガラド対グラビモス戦の予想外の盛り上がりに大盛況のドリィ村だが、騒ぎの渦中に遅れて参入してきた二人の女性がいた。

先に丘の上に着いた女性は満面の笑みを浮かべながら、

「あら、いないと思ったらこっちにいたんですか。ここは大人達の来る場所ですよー」

と、小走りに歩んでくるのは、腰にまで届く赤橙色の髪をストレートに垂らした、眼鏡の女性。おっとりと微笑む表情からは、彼女の美貌と、人の良さが伺える。

それを無表情な目で見つめていた桃髪少女は、いつもの通りの無感動な調子で答えた。

「ウ、ザ」

「ななな何ですかいきなり――！？　先生そんなウザいですか？そ、そりゃあ私もよく遅刻もしますし居眠りもしますけどこの仕打ちは！　この仕打ちは！　これは幾ら精神的に頑強なヤン先生でも泣いちゃいますよ――！？」

「泣け、ば」

「ふえーん教え子がグレたー。助けてフルールさーん。ぐすぐす」

「あーあ泣いちゃった。ハートちゃんは悪い子だねえ」

「つ、ん」

口調だけで拗ねた様子を伝えると、ハートはふいと目を背けた。しかし背けた先は当然沼地の方向であり、やはりと言うべきか心ここに在らずといった風情で、

……ま、まあ、ガラドさんも教師と言えなくもないですし……。

ヤンと呼ばれた女性は不安と安心で半分半分の心境を胸に秘めながらも、やはりいつ見ても微笑ましい半不良少女の純粋さに微笑む。

……誰にも懐いてくれなかったら問題ですけど、ガラドさんなら問題ないですよね。

「……ふふ。かっわいいなあハートちゃんは。食べちゃいたいくらいだよ」
「全面的に断、る」
「で、変態マッドサイエンティスト女医？　あんたは何よ？」
「ふふふ、村長そんなボクのこと褒めてないで本名で呼んでよ？　フルールって名前がちゃんとボクにも有るんだから、ねえ」
軽口を叩きながら苦笑を返すのは、くすんだ白色の髪をした白衣姿の女性。しかしこちらはほとんど表情を伺うことができない。その原因となっているのは顔の上半分を覆う眼帯のせいだ。
「フルール、よく見えてないのに状況掴めるわよね？　音かしら」
「まあ、ボクなんか村長のにかかったら形無しだけどね。――音もあるけど、後は……」
ぐるん、とフルールは首を廻らし。
「酒の匂いとか、後はアレ。男の汗の匂いとか――熱気とか――暑苦しい気配とか――」
「御免ねえフルール。貴女の見ている世界改めて見たくないって今確実に思ったわ」
「いやぁ、慣れたらこれはこれで。こう――ムラムラとね？」
言うや、彼女は自分の華奢なウエストを両手で抱き、腰をくねらせ始め、
「――ああっ！」
「こ、こらフルールさんっ！　前後不覚状態でくねくねしないっ。――息荒いですよ！？」
「いやちょっとスイッチ入りそうになってねえ。スイッチ入ったと言えばさ、ハートちゃんがここにいるってことはガラドもいるのかな？　くんくん、何か香ばしい……！」
「え？　あ、やっ、そこはちがっ……、それはお隣さんのゲン爺さんですよ！？」
「どうしてそこでガラドを思い出す、のか痴女」
ハートが問うと、フルールは先にも増して肢体をくねらせながら、

足元にに置いてあった太く長い鉄製の竹槍のようなものを掴むと興奮気味に、
「え？　いや、あははは。ガラドのことを思うとこう、僕の中の乙女の部分と猛り狂う野獣の部分が同時にこう、こうだよ、こう――――ああっ！　ああんっ――――」
「ほらほら抑えて抑えて。フルールさん白衣の下何にも着てないんですから、脱いだら公然猥褻で訴えられちゃいますよ？　ゲンさんも困ってますってえ――――」
眼前で繰り広げられる猥景に泡を吹いて失神したゲン爺さんをぼんやり眺めつつ、
……何でこの二人がいつも組んでるのか謎だったけど。
この二人が仲良い理由がルーテにはなんとなく分かった。それはおそらく、
「二人とも変なトコのネジ外れてるからね」
「全くその通り、かと」

●

「で、お二人？　何しに来た」
「うっわご挨拶。酷いなあ」
「――あ、そうでした。私はホラ、そこの飲んだくれてるルビィちゃんを引き取りに」
ヤンの指差す先。覗き見てみれば、
「だから……！　だからアレほど言ったのに――――！　誰か助けて――――！」
小柄なルビィの身体を抱き起こして虚空に泣き叫ぶナルの姿があった。
その姿はどこまでも悲壮で、周りにいる群衆もどうするべきかと戸惑うほどの必死さがひしひしと伝わってくる。違和感が有るとすれば抱えられている少女の胸に酒瓶が抱えられていることぐらいだっ

たが、それを遠巻きに眺める四人は、
「宴会の中心でなんか叫んでるの聞こえたんで。こうして来てみましたり」
「聞こえた、の」
「えへん。先生耳だけはすっごく良いんですよ？」
「頭良くないのは自覚してる、んだ」
「何でもいいけどあれ凄く良い絵だねえ。ルビィちゃんがすごく幸せそうなのはボクとしては唯一気になるところだけどね。なんか酒臭いしさあ」
「教師ならしっかり言っときなさいよー？」
はいはいー、と生返事をしたのは了承かスルーか。
……一遍この村の教育制度見直すべきかしら……？
村長としてそう思うのも致し方ないところだろう。しかし、と苦笑するのもお約束だが。
……でもま、面倒見はいいから安心ではあるけど、ね。

●

「で、フルールは？　何しに来たよド変態が」
「いいねえその扱い。なんかもう病み付きになりそうだよ」
「本当にどうし、た痴女」
ああ、とフルールは頷くとどこに持っていたのか、
「なんか診療所の前にさ？　いやに大きな毛玉が転がってたからさ」
どこかで見たような毛色の毛玉を差し出してきた。薄汚れてはいるもののよくよく見ればガラドの家の辺りでよく見かけたようなそんな模様で、意識を失っているにも関わらず時折痙攣しているそれは、
「――――だ……旦那さん……駄目だよボク……キノコなんて……太い……ああっ！」
「アーサー、かと」
「ああ、道理で向こうにいないと思ったわあ」

激震。
それを沼地全域にもたらした震源は無論、件のグラビモス亜種だ。
それは、グラビモスの誇る巨体を大地に叩きつける動き。
入射は左肩から。タックルの要領で自分の左側に大きく身を投げ出し浮かす。そこまでは間違いなく予想通り。
だが。
……左脚が――踏み切っていない！？
何故。
グラビモスは今まさに、ハンターにタックルを仕掛けようとしていたのだ。そこには一遍の疑問もない。そのために必須の動作として、傷ついた左脚で目一杯跳ぼうとした。
しかし。
……肝心の脚に力が入らず、否、――抜け落ちたのか！？
それでは、渾身のボディプレスもただ脚を滑らせ転んだのと同じで、
それでは、
……敵には届かないではないか……っ！
そして事実、周囲の状況が冷酷にも現実を告げてくる。
届かなかった。
【くっ……】
既に脚のダメージも深刻。しかしそのまま動かないという選択肢はない。
必死に起き上がろうともがき唸るグラビモスの脳裏を、今度は疑問符が埋め尽くす。
……解せない。
……解せない解せない解せない。何故だ。
「――――解せない、か？」
声がした。

顔を何とか上向きに上げ、漸く気付く。顔すら上げることも困難になっていたことに。
更に気付く。今、自分は倒れこんだ姿勢から起き上がることが出来ないことに。それは最早脚が痛むとかそういった類のものですらなく、
……力が、入らない……！？
「解せない、か」
最後に気付く。眼前には既に、かのハンターが仁王立ちしていることに。
ひ、と息を呑んだ。私はこれまでなのか、と。そして、
……私はたった一人の妹すら、護りきることも出来ないのか……！
不甲斐なさと情けなさと絶望。予測しうる最悪の事態。
余りの悲壮に打ちひしがれ、それでも戦意は失うまいと睨む前方。
……？
目の前のハンターを見れば、顎に手をやり腰に手を当て何とも言いようのない微妙な姿勢でただ佇んでおり、いうなれば、何か考え事をしているような風情だった。
……な、何だ？
そうかと思えば空を仰いでみたりうろうろと歩き回り始めたり、終にはしゃがみこんでグラビモスの顔を覗き込んでみたりして、
……ち、近い……！
そうこうしている間に考えが纏まったのか、ハンターは、是、と一つ頷く。
「――そして俺が今からする説明も解せない。何故かそれはお前が飛龍だからだ」
……？
「ならば、俺は自己満足のために喋ろう。将に俺の俺による俺のための説明か」
……え、ええ？
そこまで言うと不意にハンターは立ち上がり、

「しかし世界には便利な物がある。それは何か？　身・体・言・語、だ。
ならば俺はあくまで自己満足のために、聴覚に難の有るものや言語の壁の外にいるもの、勿論人外の存在でも一発理解できるように無意味に手話も交えて喋るとしよう……！」
【な、なんでそうなるんだあ――！？】

7話　卑怯な優しさ

廊下だった。
眼前にどこまでも続いている廊下。床は落ち着いた色の絨毯が敷きこまれ、踏みしめる足の裏にも柔らかな反発を覚える。中々上等な品だ。
窓から外を見れば、下には新人ギルドナイツの養成グラウンドがあり、食堂兼、一般ハンター用の斡旋所たる簡易式の酒場も見える。ギルドには部署が多く、この区画に入りきれなかった部署が設置されている建物も遠くにあり、全てがギルドのシンボルカラーである黒白を基調にした模様で統一されている。
ここは、その中でも一際大きな建造物、ギルド総本部の五階廊下であった。
だが、その心地よい感触と景色を楽しんでいるのは現時点、ただの一人しかいない。
否、一匹と言い換えたほうが正しい。それは一匹の猫だった。
「……幾ら上等の品でも、無用の長物でしかありません」
その声に応える者もいない。それでも猫は、
「……」
くすりと微笑んだ。
それは、先程の定期報告。独自の猫連絡網、？ニャットワーク？を通じた飛脚アイルーからの情報によるもので、安堵を伴う微笑みだった。
「楽しくやっておられるのならば、何も言うべきことは在りませんが」
その猫は、身なりのいいアイルーだった。
一際眼を引く金色のコート。それを誇らしく纏った小さな体躯を反らして胸を張り、悠然と歩くその姿。気品すら滲み出る佇まいは、
「……もう一年、ですか」

どこか寂しげで。
そして、遠く連なる無数の内の一つ、目的の扉の前にたどり着く。そしてその扉にかかっているプレートを見て、明瞭な声で、
「……第三百二十八代ネコート、？クリスタル？……入ります」
と言うや、入ったのは扉の下に設置された小さな上方開放式の戸からで、そこには『御猫様は此方からどうぞ』と書かれている。
そしてコートを纏った猫の鋭く細められた眼は、先ず部屋の有様を見た。
奥行きのある広い部屋に、文机一つに椅子一つ、応接用のソファーが二つ。間にテーブルがあるが、クリスタルの記憶にはこれを使った記憶は未だ無い。
左右には無数のファイルの詰まった本棚が一つずつ。床には紙くずがいくつか転がっており、雑務担当のアイルーによって掃除されたばかりであることが伺える。それらは屑箱の近くに集中しているようで、その殆どがちり紙だった。
「……マスター」
そして漸く、彼女の両眼が部屋の奥で佇む一人の黒髪黒衣の男を捉えた。窓の外を眺めていたのだろうか後姿しか見えないその男の背中に向かって、猫はさも当然だ、と言うような口調で呼びかけた。
「……――賭けは私の勝ちですギルドマスター。――どうぞ」

●

その声に眼前の男はゆっくりと振り向き、口端に微かな笑みを浮かべ、
「……何の、話しだったかね？」
「――賭けは私クリスタルと、敬愛するガラド様の絆の勝利だと申しました。――どうぞ」
「……ふむ」
男は再度振り向き、窓の外に目線を送りながら呟いた。

「ああ……いい天気だね？」
「聞かれても貴方の価値観を私が共有していない限り明確な答えは出すことは出来ません。そして話を逸らす行為は即ち無礼であると判断します。――どうぞ」
「その手は何かね？」
どうぞ、の声とともに突き出されたアイルーの右前足に、男は疑問を投げかける。しかしアイルーはこれも当然だとするかのように、
「お忘れになったとは仰られさせません。グラビモスが勝てばマスターの勝ち。ガラド様が勝てば私の勝ち。負けた方が何でも一つ言うことを聞く。まあ至極当然の帰結です。
何の疑問も御座いません。ですから、――どうぞ」
ふむ、という熟考の吐息が返ってきた。顎に指さえ添え、些細なことにも何やら考え込むのはこの変な男、即ちギルドマスターの悪癖だ。優柔不断とすら思えるその行為に、
「さあギルドマスター、……否、ガラド様風に言うなれば、？教官？。腹を決めて私に私の望むままの品を贈呈なされますが得策と強く希望致します。――どうぞ」
「それは忠告なのかね、――脅迫なのかね」
「是。私の命令の半分は優しさで構成されております。即ち親切忠告成分が五割で比較的お得であると判断します。ですから、――どうぞ」
「要するに命令なのだね？　主人に命令とはけったいな従者もいたものだ……」
「――それは自業自得であると判断します。なにせ……」
そうやって会話する一人と一匹は、実のところ一歩も動いてはいない。離れもせず、歩み寄りもしないおよそ十メートルの距離がある。
「……猫アレルギーのせいで従者を近くに置けないけったいな主人など一体どこにおりましょうか。否、それは即ち貴方ですギルドマスター。

そしてけったいとはどういう意味ですか、と念の為に聞いておきます――どうぞ」
「よく出来た、という意味だよ。褒めてくれて有難う、といっておこうかね？」
「おっとあんなところにゴミが。けったいな従者として放ってはおけません。――どうぞ」
クリスタルは何の前置きもなく、部屋に三歩踏み込んだ。
「ああ、ちょっ！　は、入ってくると、入ってくると我輩の穴という穴がナイアガラ……！」
「おおっとあっちにもこっちにもゴミが。そっちにもゴミが。ええ全部拾います勿論。けったいな従者を持てて幸せですか？　嬉しナイアガラですね？　――どうぞ」
「我輩ちっとも嬉しくナイアガラ――！！」

●

一通りクリスタルは掃除を終え、いつもの定位置に下がる。即ち、部屋の扉の下の潜り戸を潜ってすぐの所だ。そこから発する明瞭な声は、
「従者と主人のパワーバランスもはっきりしたところで、――どうぞ」
「しゅ、主人の弱みに付け込むとは本当にけったいな従者だね……！」
「お褒めに預かり光栄です。――どうぞ」
そういうクリスタルの右前足は依然として下ろされない。そこまでして欲しがる物とはさぞ大切なものなのだろうとギルドマスターは涙目ながらに思いながら、ぽつりと問う。
「その前に、本当にガラドは勝ったのかね？」
「是。間違いなく勝利です。報告によると、一突きだった、と。――どうぞ」

「一突きかね？」
問い返しにも、是、と言葉を受けて、男はさらに考える。
そして、ふっ、と笑みが生まれ、そういうことか、と納得に至る。
「――――卑怯だね？」
「是。卑怯です。鬼畜の所業です。――どうぞ」
「否定しないのだね？」
「実は私、ドＭですので。――どうぞ」
「嘘つけ、と言って良いかね？」
「本当です。ガラド様は私的カーストの最上位にいますので虐げられてもご褒美です。あ、因みに貴方は最下位ですので悪しからず。――どうぞ」
沈黙した男を気に留めた様子も無く、クリスタルは続けた。
「でも彼は、――鬼畜で卑怯で、優しい御人です。――どうぞ」

●

「麻痺、毒？」
「そ、英語でポイズンね。ポイズン？　パライズかしら？」
桃色髪がはためき、ハートの首は傾ぐことで自らの疑問を表す。
その視線が向けられているのは背後の視線で、対象は一人だった。
ルーテ・織銀。
この村の一切合財を女手一つで統括する村長。しかし今は遠い地、そこで行われている戦いを唯一知り、教えてくれる語り部だ。その彼女は話の続きを言おうとして、
「うは、このおさけおいしいね、みしらぬおじさんっ！　なんていうやつ？」
「へへへ……お、お嬢ちゃん、そそ、それはねぇ……はあ、はあ……」
ちょっと待て、とルーテは振り返った。そして、
「る、ルビィちゃん！　貴女さっきヤンが連れて帰った筈じゃ――

ってコラこの阿呆教師！　何で貴女まで一緒になって飲んだくれてんのよ！？」
「ぁえ？　いいーじゃないですか、ちょっとくらい。あはははは」
「……ナルまで酔いつぶれた、の？」
「ぁえ？　なぁーんですかぁー？　僕がお酒呑んだらいけなぁいんですかぁー？」
　そういうと、インターバルを置き完全復活したルビィの膝元向けてナルは這って行き、視界もはっきりしない中で掴んだ膝の感触に頬ずりをしながら、
「うえへへ、ルビィは僕のものですー。誰にもわたしましぇ――って、あ、あれ？　心なしか頬に当たる感触がいつもと違ってこう……、――わ、ワイルドですね！？」
「……ナル。それは斜向かいの、ゲン爺さん」
　そんなどうでもいいやり取りと、響いた悲鳴じみた喧騒を背後に無視した上で、
「さ。早くルーテ、解説ぷりーず」
「え、ええ。結論から言うと、ガラドはとーっても卑怯な手でグラビモスを戦闘不能にしたのよね。ま、これも戦術っちゃあ戦術なんだけど」
「最後に勝てば、おーるおっけい」
「貴女いいハンターになれるわよきっと。――ともあれ、」
　……教育上良くない戦い方だけど、ガラドは何か考えてるのかしら。

●

　まずは、とガラドは前置き語る。人差し指はこれ見よがしに立てられており、
「まずは、何故――グラビモスA。否、敬意を込めて『黒』君と呼ぼう――が、このように無様に倒れ臥しているのか、だが」

その立てた指で、自分の鳩尾の辺りを指し示す。
「答えは、これだ」
ぐる、と一声黒のグラビモスは唸ると、苦労して自分の腹部を視界に納める。
そこには、中途から折れたナイフの一部が生えていた。
「そして、これだ」
目線を戻した先、ハンターの手にはいつの間にか何かが握られていた。
そこには、
『湿気の闇に潜む陰、駒を打たれて咲きしこの生、――主の為に散らすが本懐……！』
【……？】
「これが何か、分かるか？」
何やら毒々しい色の茸がどこか誇らしげに握られており、それは記憶によれば、
……ビリビリぬるぬるして食えない生理的に気持ち悪い茸だ……！
「その通り、ビリビリぬるぬるして食えない生理的にも気持ちの悪い茸だ！」
言っている傍から茸がしょんぼりと萎れていくが、水分不足だとガラドは思った。
ともかく、と手の中に在る茸を指で弾いて立たせ、言う。
「別名を、？麻痺茸？という。知っていたか？」
つまり、
「――どういうことか分かるか」
ガラドは尚も続ける。
「ここ近辺に群生しているマヒダケは遅効性だ。それだけに、一度回りきるとかなりの効力がある。その汁を戦闘直前に、ナイフにたっぷり擦り込んでおいた」
【――……！！】
ガラドはびしりとグラビモスの眼前に指を突きつけ、言い放った。

「そして、モンスターを追い払うことを第一の責務とするギルドナイトは、剥ぎ取りなどしない。ならば答えは簡単。このナイフは始めから仕込みとして使うつもりだった、と」
一息。
「『黒』君は思っただろう？【こんな攻撃、痛くも痒くも無い】とな」

●

そこでグラビモスは気付く。でも、と。
「そう、勿論黒君の二度目の攻勢は脱帽に値するものだった。最初からあのレベルの攻撃が来ていたらどうなっていただろうか俺にも知れん、と言っておく。――他意はないが」
眼前のハンターへの警戒もそこそこに、グラビモスは呆然とした。
……もしあの時、私がこの人間を侮っていなかったら。
全力で仕掛けていれば。不可避の技の一つでも。いやこうすれば、ああすれば。
否、そう考え始めれば限がない。
結局、勝負は唯の二合。そして既に一合目には勝負は決してしまっていた。
その決定打をむざむざ許したのはグラビモス自身の過失であり、
【――く……】
たったの二合。
今までの力と力のぶつかり合いのような戦い方とは全く違う。正逆だ。負けたとはいえ、余りのギャップに納得がいっておらず、拍子抜けすら感じるほどだ。
しかし。
事実は変わりなく、形としてここに在る。そして悔しさと――未練も。何故なら私たちの戦いは一度の負けが即ち、死ということなのだから。それでも思う。

これが、本当の戦いというものなのか？
これが、本当の負けというものなのか？

●

「……悔しいか？」
【……くっ】
グラビモスは、唯一自由なその視線をきっと上げる。それは目の前のハンターを射殺さんとするような鋭いものだった。なのに、ハンターは一歩も怯まない。
……どこまでも、珍妙なっ！
「……――ところで、どうする？」
【……――は？】
「結果的に俺は勝者。目下、君の事を好きにする権利を有しているのだがあいにく、俺はギルドナイトなので、黒君を殺す事はない。しかし、幸運なことに君たちを懲らしめ、退けるための行為を行おうという意思はある」
【……殺さないのか？】
「そうだ。嬉しいか？　しかし俺にも沽券とか体裁というものがある。よって黒君が再びここに来れないような、そんな罰を与える義務もある。だから、――そうだな、」
そう例えば、と男は提案の口調でそして笑顔で懐から何かを取り出しながら、
「おおっと何故かこんなところに丁度良くギルド特注修正ペン【超極太】がある。これで、黒君の顔と言わず全身至る所に連綿と般若心経などを書き殴る、というのはどうだろう」
【……そんなに太い修正ペン一体どこで使うんだ！？】
　だからこその特注か、と無理やり納得しながら、グラビモスはあの太い棒状のものの先端から染み出した白濁した液が自分の身体中に塗りたくられることを想像し、そして戦慄した。自慢の体表に落

書きをされることもだが、それより、
……水で落ちるんだろうな！？
もし落ちなかったらもう愛する妹に普通の眼で見られなくなってしまうかもしれない。
そんなことになったら死ぬ。
その上、追撃のように男の声が聞こえてきた。器用に身振りで表されるその意味は、
「または俺が三日三晩考えた、超傑作超大作全三部作各話三時間かかる自作の落語を滔々と語って聞かせるとか……いや、駄目だ。どうしても教官のようにキレのある策を考え付くことが出来ない……！　くそ、まだ俺も未熟だということか！」
【ひぃ】
「他にも沢山ネチネチモッサリ有るが、どれがいいか――いっそ教官パクるか！？」
【いっそ殺せえ――――！】

●

「だが、これらを実行に移せるかどうか。それは、――これから決まる」
ガラドは振り返った。それは既にその行動を予期していたかのように冷静なもので、
【……え？】
一拍遅れて、グラビモス亜種もハンターの背後に見える影に気付いた。
そこには、
【お姉様……！】
純白に輝く、もう一頭のグラビモスがいた。それは世界中の誰より良く知った姿で、
【……ど、どうして……？】

「護られる者にも誇りはある。見届けろ。君が護ろうとした者の強さを」
巨影を目の当たりにしても、怯む事なく。
かのハンターはその身を完全に翻し、既に二十歩の距離まで近づいてきていた純白のグラビモスと対峙した。その手には既に得物のハンマーも握られており、
しかし、横顔だけはこちらへと晒し。
「偶には護られるのも、いいものだぞ？」
次の瞬間、ハンターは横に駆け出していた。
すぐさま、白きグラビモス――妹も、反応して追う。その姿は。
……――――嗚呼。
気付く。無様に横たわる今の姿勢。その時の視線は、人のそれと同じだということに。
気付く。その視線から見た、妹の姿は、
【――あ……、】
こんなにも、こんなにも、――大きかったのか、と。

●

Ｌｅｔｓ　ｍａｋｅ　ａ　ｂｅｔ，　ｃｏｓ　ｌｉｆｅ
ｉｓ　ｗｉｎｎｉｎｇ　ｏｒ　ｌｏｓｉｎｇ
――賭けをしようぜ　どうせ人生は勝つか負けるかだろ
Ｉ　ｆｅｅｌ　ｓｏ　ｈｏｔ，　Ｉｌｌ　ｎｅｖｅｒ
ｓｔｏｐ
――かなり熱くなってる　俺は止まらない
Ｇｏｏｄ　ｔｉｍｅ　ｉｓ　ｏｖｅｒ
――楽しい時間はもうお開きさ
Ｌｅｔｓ　ｍａｋｅ　ａ　ｂｅｔ，　ｃｏｓ　ｌｉｆｅ
ｉｓ　ｓｐｉｎｎｉｎｇ　ａ　ｔｏｐ
――賭けをしようぜ　どうせ人生は回るコマだろ

Ｂｕｔ　ｙｏｕ…
――だが　お前は……

●

ぐ、で始まり、おお、と続く声音が大気をぶち抜いた。その威力に一番当人が驚きながら、ふとグラビモスは考えた。それは過去の振り返りを含むもので、若干の懐かしさを伴いながらの、――反省。
……自分から吼えたのはこれが初めてになるんですのね。
今までは姉が率先して先陣に立ってくれていたから気付けなかった、一番槍の気分。そしてその高揚。それを噛み締め、大切なものとして味わいながら、
……でも、――弱いですの。お姉様には到底……、
及ばない。それは眼前のハンターの様子を見ても明らかだ。
それでも、
……お姉様からは遠ざけられたですのね。それで、十分ですの！
一気呵成にスタートを切ったハンター。その姿はいかにも戦闘にも慣れている、と体で言っているようでもあった。それを目で追いつつ、
【……到底、勝てる気なんてしませんの……っ】
こっちは、吼えるのも初めて、ヒト相手に立ち回るのも初めて。
……いわゆる一つの、初体験……とかいうやつですのね！
しかし、高速で動くそのハンターを威嚇しながら追う自分。
内心は、恐ろしいとか、怖いとか、逃げたいとか、決してそういうのじゃなくて。
……どうしましょう。私、
【わくわくしてますの……！】
強くて、かっこ良くて、頼もしくて、決して負けたことのなかったあのお姉様をいとも簡単に倒してしまったハンター。私に勝てる訳がない。――けれど。

……羨ましい、と。思ってしまいましたの。あんなに一生懸命なお姉様を。
純白のグラビモスは、ハンターを睨み、しかし一瞬だけ、自分の同朋に振り返る。
その瞳は。眼光は――灼熱の朱(あけ)。
……ですから逃げないのですの。お姉様。
……今度は私が護ってあげますの。お姉様。
……勝てないのかも、知れないけれど。お姉様みたいには、出来ないけれど。
【行きますの……っ！】
……私だって、グラビモスなのですもの……！
気迫一閃。
咆哮と共に、グラビモスの顎から灼熱の奔流が放たれた。

●

今日は吉日だな。
これはもう、一種の職業病に違いない。
今日一日、いや、ここ数時間ほどで、俺単位に換算して十二ガラドくらいのアドレナリンと体力と筋肉とやる気と生きる活力と明日への希望と興奮と熱狂とテンションを酷使しているような気がする。
因みに一ガラド／一ヶ月分だ。
つまり、今日の俺は、
「絶・好・調だ……！」
村での何かと退屈な毎日とどこかネジの外れたド外道村人達との絡みを差し引いても、この分なら確実にお釣りが来る。英語で言うとｃｈａｎｇｅ　ｃｏｍｅｓ――馬鹿かと。
……ふ、いかんな、テンションが異常だ。
兎にも、角にも。
「さあ、俺命名で悪いが、『白』君！　君は何を見せてくれる？」

付き合おうではないか。そして付き合わせよう。この命を賭けた、?狩宴?に。
「来るなら行こう！　来なくても行こう！　そしてこの今こそ――――」
しかし、その始まりは唐突だった。
「！？」
全てを言い終わる前に、視界は朱一色に染まっていた。

●

それはまさしく?灼熱(マグマ)?。
グラビモス種の持つ最強の技。火山を司る、火山地帯の主であるグラビモス種ならではの攻撃。
基本的に火山を縄張りとするグラビモスは移動手段として、溶岩に潜ってその地中の脈を伝い、移動することができる。
その際グラビモスは体内の?業炎袋?と呼ばれる器官に熱を逃がすと同時に、その中に熱そのものを蓄積し続けるという習性がある。
しかし業炎袋にも許容範囲があり、その一定量を超えた熱を蓄積することは出来ない。
だからこそそれを排出する行為が必要なのだが――それがこれだ。
――ただ吐き出す。口から超圧縮された?熱量?を。
それは超高温のマグマと見まごう熱波となる。そしてそれは、砲撃にもなる。
そして、それは基本的に一撃必殺であること。それを忘れてはならない。
それを眼前にして流石にガラドは肝を冷やした。
「――くおおっ！」
……いかん、冷静にならなければ――！
間一髪。ガラドは身を翻し、その熱波の効果範囲外まで退避する。
しかし。

「くっ……」
間を置かずに、第二波が来た。今度は危なげなく走って躱す。
そして続く第三、第四、五、六七と続き、
「まさか、俺を――近寄らせない気か」
第八波は、なぎ払いの動きで来た。
避けられない。
それを目の当たりにして、ガラドは吼えた。帽子を押さえつつ全速で走りながら、
「――揃って手間の掛かることだな？」

8話　矛盾の正論

……これは、卑怯な手段かもしれませんの。――ですが、

【が……！】

……戦いとは、そういうものですのよね……！

【――ぉあ……ッ！】

純白の固定砲台は、あまりにも、あまりにも小さなターゲットに向けて、対艦砲クラスのビームを放つ。放ち続ける。幾筋もの灼熱の閃光が地を穿つ度に、汚泥を蒸発させる度に、辺りを炎と熱気が支配していく。

そしてその渦中にいるガラドは、

「……これは……！」

……凄まじい。素晴らしい、――面白い！

食らえば消し飛ぶ。それくらいのレベルだ。だから、と更に加速する。

片や白のグラビモスは、

【……当たって下さいですの……っ！】

一撃掠れば逆転勝利。それ程の火力を保っているつもりだ。だから、と更に咆哮する。

何故なら、

「これが全力か？」

【――――はいですの。脆弱な人間相手の持久戦。これ以上の屈辱もありませんが――】

そうでないと、全力でないと、きっと倒れるのは、負けるのはこちらだ。

だから、容赦などしない。

固定砲台はその絶対的な火力でもって、狩人を追い詰める。右から、左へ。回り込み、灼熱の壁を狭めるように追い詰めていく。先読み、追いかけ、誘導を経て。

【もう少しですの……！】
後一歩だ。後一歩でハンターの速度に追いつく。そう思った時、
【――……っ！？】
轟音が止んだ。グラビモスが自分の顎を締め、ビームの放出を自ら止めたからだ。
その砲撃は、終に獲物へとは届かなかった。
余りにもあっけなく訪れた静寂は、焼け野原と化した戦場に奇妙な沈黙を作り出す。
……う、撃てないですの……！
「――そうだろう。君なら撃てない。何故なら、」
一呼吸置き、ガラドは告げる。既に足も止め、声色にはさも仕方ない、という風情を漂わせながら、図々しくも宣った。
「それ以上俺を撃とうとすれば、君の同朋に風穴が開くからな……！」
純白の固定砲台から見て、憎き狩人を挟んだ直線上。そこにいたのは、
【く……！】
……お姉様！？
「成程。成程成程――、確かに戦いとは無情なものなのだな？　他意はないが」
……ひ、卑怯者ですの……！

●

「いや、これは我が弟子ながら……ちょっと無いね？」
「聞かれても困ります。しかしながらギルドマスター、これを。――どうぞ」
言いつつ、ギルドマスターと呼ばれた男は従者であるクリスタルの差し出す冊子のようなものを覗き込む。たっぷり十秒ほど目を凝らしてみて、その上で、

「見えないね？」
「これは失念していました。それでは」
　といって足を踏み出そうとするクリスタルに再び大慌てしながら、ギルドマスターは、
「い、いや！　それはアレだね、きっとアレだ！　――教科書だ！　そうだね？　そこまではわかったわかったからそこからは近付かないでくれお願い――！」
「ですがそれでは私の言いたいことが伝わりません。では」
「いやだから、ええあ――そう、読んでくれ！　読んでくれればきっと分かる！　マリアナ海溝よりも高く富士山よりも深い君と我輩の仲ならば……！」
「意味するところは無限大ですか。そうですか。――どうぞ」
　ようやくクリスタルの踏み出す足が止まったことに深い安堵を覚えながら、改めて十メートル先にある小冊子に目を凝らす。
「それは……我輩が執筆した教書かね。竜撃文庫？なれる！　ギルドナイツの百の技術？といかにもな名前をギルド出版課に後付けで付けられたのだったかね？」
「是。百の技術を挿絵付きで本編に、そして書ききれなかった残り百八つの反則技をグラビア袋綴じ付録として贅沢収録しております。もはや？なれる！　ギルドナイツの二百八の技術？と改変したほうが宜しいと私は常々思うのですが。なんですかこの分厚い袋綴じ。みにくい……！」
「今のは『醜い』と『見難い』を掛けたのかね？」
「是。そして、問題はここです。第百八十二項三章、『二頭のモンスターと遭遇したら』に書かれている事なのですが、――覚えていますか？」
「そんなもの覚えてる訳が……あるある超ありまくりｎｇ――！　もうそれ以上我輩の領域を侵すと酷い目に遭うね！？　遭うね！？
　――我輩が。だから止めて……！」
「命令なら仕方ないですね。はあ、職権乱用上司を持つと部下は大

変です。――どうぞ」
……い、言い返してやりたいね？
しかし呼吸困難に陥る寸前なので無理はすまい。そう思いながら、
「――第百八十二項かね……」
「五、四、三……」
「え？　ちょ！　焦る！　焦るね？　カウントダウン駄目！　数えちゃらめええ――！」
焦りを覚える思考の中で、ギルドマスターは考えた。
……きっと我輩のことだから、何かかっこいい事を書いているはずなのだ……！　ならばそれは何かね？　モンスター二頭と遭遇したとき、その時我輩ならどうするかね？　それを正直に答えればいいだけだ。簡単ではないかね？　ならば……！
「では答えは？　はい、――どうぞ」
「ふむ、間違いない。――『逃げるべし』！　こう書いたはずだね？　ん？　どうかね？」
「なっさけない答えですね。少しはガラド様をお見習いください。答えは、」
一息。
「――『人質を取るべし』、となっております。――どうぞ」

●

「――人質か……。人質って、飛龍にも通用するのね。お姉さん全然知らなかったわあ。ハートちゃんはこれどう思う？」
「最後に勝てば、――おーるおっけい」
「あ、そう……」

●

戦場は依然として膠着していた。

動きはあった。少しばかりだが、
「……」
【ちょ、こっち来るな！　ハンター風情が……！】
「否。嫌われたものだな、同じ空の下に住む者同士仲良くしようじゃないか」
【その辺のコオロギとでも仲良くしてろ――！】
動けない者は二頭、麻痺毒に侵された『黒』と、あと一頭は、
【――お姉様……っ！】

●

【そこから離れなさいっ、――ですの！】
大声音の一喝が飛ぶ。それをまともに食らうちっぽけな人間は、
「何故だ？　俺がここを離れたら、白君は俺を撃つではないか」
【そんなこと……！】
「分かりきっている。そう言いたいのか？　それなら一層俺はここを離れることは出来ないな。俺も命は惜しい」
ガラドは一息吐き、その場にどっかと腰を下ろした。『白』を見据えて喋るは、
「少々走り回って疲れた。よって俺は今からここで休もうと思う。そうだ、白君もビーム吐き続けて疲れただろう。そこで休むといい」
そんなことまでいけしゃあしゃあと言って来る。それを聞いた白は、
……そんなことを許したら……！
無駄になってしまう、と思った。絶望と悲嘆とともに、今までの全てが無駄に、と。
【……く……！】
勝機はスタミナの差だった。
とどのつまり、こちらは一撃さえ当てることが出来た時点で勝ちだったのだ。しかしそれを許されなかったのは、純粋な速度差。

こちらが一歩を踏むごとに、あちらは優に五歩を駆けることが出来る。この機動力の差は隔絶しており、そのカバーの為に体格差や熱線を使えるのがこちらのアドバンテージなのだ。そして体力の差でもって、先に疲弊し、動きの鈍ったハンターを潰す。

しかしその両方が潰された今。思うのは、

【……これが、時間切れということですの……？】

熱線の残量が少ない。

元々熱線など自分と同等それ以上の体格を持つ相手に使う一撃必殺の武器であり、戦術だったはずだ。しかしそれを当たり難い人間に使うなど、平時の自分からすれば愚の骨頂とも言えるのだろう。

気付いてみれば、体の芯から冷えていくような感覚がある。もう限界だ。

そして熱線の補充は、火山地帯の溶岩、その中を潜る事で行っている。自家発電出来ない溜め撃ち型の技なのだ。これは。

相手のスタミナは休めば回復していく。

しかしこちらのスタミナは回復することはない。

休むことは即ち、こちら側の不利をむざむざと広げる行為に過ぎなかった。

【ならば……！】

……接近を……！

遠距離からの戦術は使えない。かといって、姉を放って行く事など出来やしない。

ならば、残された手段は接近のみ。

しかし、

「おっと、それ以上近付くなら、どうなるか分かっているのだろうな？」

【……どう、なるというんですの！？】

「――こう、なる」

ハンターが懐から取り出した物は、白く太い――何かだった。

それのキャップをきゅぽん、と外し、隣の姉にその先端を近付け

ながら、
「定番っちゃあ定番だが、――相合傘とかどうだろうか」
【ひ、ひいい――――っ！！】

●

「今向こうで凄く甲高い悲鳴が聞こえた、誰？」
「あー……、これも仕事だからね？　ガラドもやりたくてやってるんじゃないのよ？」
「……え、誰？」
「えー……」
口ごもってしまったルーテはしかし、咳払いで誤魔化し。代わりとして、
「まあ、ガラドはガラドなりに、不器用にでも伝えたいことがあると思うのよ。ギルドナイトっていう微妙な立場からしか伝えられないことをね」
一息。
「卑怯者の悪党よね、誰がどう見たって。でも悪党にまでなって、ガラドはあの二人に分からせようとしているの。――色々なことを」
それが分かっているから、ルーテはいつも迷う。自分の決定は、あのギルドナイトの努力を無駄なものにしていると。
……もっと素直に捻くれた人間なら扱いやすいのに。
しかしそれは叶わないし、本意ではない。現状として今の自分は、あの捻じ曲がったままで真っ直ぐなギルドナイトのことを、――気に入っているのだから。
……まったく、ここまで捻くれた育ち方したあいつの師匠って、一体誰なんだか。

●

「……は、はぁっくし！」
「……？　？白紙？？　戻しませんよ今更。は、一体何を。――どうぞ」
「ふあ、ふ……、ああ、引っ込んでしまった。戻すだか戻るだかどうこう言うからだね？」
「否聞かれても。……一体どうしました。風邪ですか？　――どうぞ」
「……――それはわざと言っているのかね」
「是。勿論本心です。主人の体調を心配しない従者がどこにいらっしゃいますか？　否、どこにも御座いませんね？　理解しましたか？　――どうぞ」
「我輩の理解を更に超越した従者がここに一匹いるのだがね。お、驚きだねこれはっ」
「褒め言葉として受け取っておきます。――どうぞ」
男は無視した。手元にあったティッシュの箱を引き寄せながら、
「しかしまあ、膠着しているね？　――ここからガラドはどうするのか、楽しみだね」
「是。――どうぞ」

●

「――まあ、俺は別に撃たれても構わないのだがな。うむ、どうぞ撃ってくれて結構だ」
長引く膠着を不意に破ったのは、意外にもその状況を作り出した本人からの提案だった。
【え？】
「え？　ではない。『白』君には伝わっていたはずだ。どうぞ撃ってくれて構わない、と」
……え？
思った。『白』は、確実に思った。この男は馬鹿ではないかと。

……それを、貴方が言いますの！？
【そうできないように、貴方がしているのでしょう！？】
「否。それが出来ないのは『白』君自身だろう？　俺はなにも『白』君の口を塞いだわけでもない。第一、『未だ』撃てるではないか？」
【……っ……！】
どきりとした。
何故ハンターが自分の熱量の残量について把握しているのか、と。ただ推測で、『撃てる』と判断したような聞き方ではない。あれは確実に、こちらの熱量が底を尽きながらもまだ無理をすれば『撃てる』、と。そう判断した物言いだ。
……まさか必死に逃げながら、熱量を測っていたとでもいうのですの？
抜けきれない動揺がある。
しかし、とそれを『白』は押さえ込む。これは向こうの揺さぶりなのだろうと。そして、
【……でも、】
「でも、何だ？」
【お、お姉様が……】
そう何とか呟いた瞬間、男の隣に蹲っている姉がびくりと身を竦ませたのが見えた。それを見た瞬間、思わず『白』は口を噤み、その思慮の無い一言に後悔した。
……お姉様……！
勿論姉の敗北を責めているとかじゃない。そんなこと微塵も思ってはいない。否、少なくとも姉の戦いはどう見ても尊敬に値するものだった。相手が例え人間であったとしても、決して恥じることの無い姿だと思っている。けれど、
【お姉様は……】――立派に戦いましたの。
【お姉様、は……】――例え人間に負けても、それを自分でお責めにならずに。
【お、お姉様を】――誇りに思っていますの。

駄目だ。
……何と言っても、慰めているようにしか聞こえませんの……！
酷い。これは余りにも酷だ。
動けない姉を、負けてしまった姉を、辱めている。ただでさえ傷ついた、ただ一人の肉親を、ただ一人の妹が、――辱めている。嗚呼、
実の妹である、私が。
「そうか、先に『負けた』、『動けない』、『情けない』黒君のせいで、撃てないんだな？」
【……ッ……！！】
酷い。酷すぎる。幾ら敵同士だとしてもこの仕打ちは、
【……酷い……！】
色々な物が、限界だった。こみ上げてくる切迫感がどうにもならない現状と重なり、情けない嗚咽が漏れてきて、
【……う……】
自然と涙も出てきた。それは粒になり、結晶化し、足元に転がり落ち泥に塗れてしまう。
【……うぇぇ……】
止まらない。

●

優に一分は泣き続けたであろうか。
熱い。目頭が。鼻の奥が。そして、――心が。
得るのはただ、切ない痛み。刺すような痛み。
痛覚に訴えかけてくるのではない、――苦しい痛み。
【……最低、ですの……っ】
そんな間も、ハンターは口元だけで微笑んでいる。いかにも楽しげに。
【……最低……】
それでも、涙を流しながらでも、苦しくても、ハンターから目を

離すことは出来ない。
敵なのだから。
卑怯者の、悪者なのだから。
それがせめてもの、飛龍としての矜持のつもりだった。

●

【……もういい】
ふと聞こえた声は、もう久しく聞いていないように思える姉の呟きだった。
続いたのは、衝撃。
【穿ってくれ、妹よ】
【お姉……様！？】
終に、ハンターから眼を逸らしてしまったのも、致し方ないことであろう。それくらいの衝撃が『白』を貫いた。しかしその衝撃もそれだけでは止まらず、
……そんなこと……！
【で、出来ませんの！　そんなこと……】
【甘えるな！】
ひ、と悲鳴を吸い込んだ。姉の恫喝なんて、聞いたことが無かったから。
【お、お姉様……】
【もう、私は負けたのだ、死んだのだ。だから、だから――】
一息。
【私のことを、――死体だと思って、穿て……！】

●

My blood is ice, I m a device

――俺の血は冷たい氷　まるで機械さ
Ｎｏｂｏｄｙｓ　ｌｏｖｅｒ
――誰のものでもない

●

ははははは、と。
戦場に似つかわしくない、笑い声が響いた。
長く続く高笑い。この状況に、もっとも似つかわしくない、？歓喜？を伴う挙動。どこまでも空虚な、乾いた笑い声。
……歓喜（グラッド）か。
悪役であるあの男にとっての歓喜とは、即ち我らに渡す引導なのだろうか。
下らない事を考えたがゆえに、叱責の言葉は自嘲の呟きとなった。それは力ない、
【……何が、可笑しい……】
……ああ、情けないな。
こんな様では敗者と辱められることも仕方ない、完全なる敗北ではないか。
……父にも母にも、顔向けできないな……。
こんな負け方をしたのであれば、いや、父や母もこうやって辱められながら逝ったのだろうか。
……我らも、同じ轍を踏んでいくのだろうか……？
そこまで考えていたときに、ふと笑い声が止んだ。
「ああ、可笑しい。可笑しくて可笑しくて死ぬ所だった。ああ、本当に可笑しいが……！」
【だから何が可笑しいのですの！？】
はは、と零れた最後の乾き。それをゆっくりと見送ってから、振り返ったハンターの、かろうじて見える口元からは、笑みの全てが消えていた。

「可笑しいが、――少々不愉快だな」
……ッ！？
そこにあった男の顔からは、笑みが消え失せ、その代わりに別のものが張り付いていた。
怒りだ。
そしてその高低差に二頭のグラビモスが戸惑っている間に、ガラドは吼える。
それは、全く矛盾した、全く予想できない言葉となった。
「負けたから死体だと思って穿て、だと？　ウケ狙いの下手な冗談も休み休み言ったほうがいい。いくら人間に負けたからといって妄想に逃げずに目の前の現実をよく見てみろ。誰が何処からどう見ても――貴様は生きているではないか」
は、と嘲る様な吐息の後に、
「――生きている者が、自分から死にたがるとは何事だ！？」

9話　静寂の喧騒

……――――はあ！！？

思った。『黒』は、確実に思った。この男やはり馬鹿ではないのか、と。

【き、きききき……貴様が――】

……それを、貴様が抜かすか！？

「何だ、異議があるのか」

……い、いや異議とかそんな次元の話ではなくて、さっきと言っている事が、その、

【だから、貴様がそうさせているんだろうが！？】

表情は未だ見えず、読めない。

だから声色、そして言葉の意味は分からないので身振りの激しさで、

……逆ギレ……！？

口を挟む間もなく、男の奇妙な舞は続いていく。曰く、

「断じて否、俺は明確な理由無しに飛龍を殺すことは無いと先程も言った筈だ。第一に」

言わなければ分からないのか、と出来の悪い生徒を見下すかの如き、容赦の欠片も無い声色と身振りでガラドは吐き捨てた。溜息交じりで、

「まだ、二人とも生きているし、戦えるではないか」

【――……あ、あれ？】

……ええっと、

色々疑問がある。

例えば目の前のハンターは、人間の癖に飛龍の私達を殺す訳でもなく生かすわけでもなく、結局何が目的なのかとか、ぶっちゃけこんな複雑な会話をどうやってアイツは身振り手振りだけで伝えているのかとか、

【あ、えっと待ってくれ、ちょっと待て！　ちょっと整理を――】
「だからさっきから皆で仲良く一休みしようと何度も言っているではないか！　整理でも生理でも何でも遠慮せずドバドバやるがいい！　――さあ！」
【――レ、レディ相手に最低ですの……っ！】

●

「――旦那さん、レディ相手に最低なこと言ったりしてないかなあ……」
そう呟く猫は、今はモグラだった。
狭い地中で両手を巧みに使い、土の柔らかい所を掴んでは崩しながら体を先に進める。
地中を掘り進んでいけるのは、アイルー族としての力であり、現役アイルーとしての嗜みだ。長距離の移動や隠密行動、危険な地域の縦横断などは全てこれで行われ、アイルーが人間社会で働き口を確保するためにもとても重要な要素だ。しかし、
……注意しないと外に出るとき旦那さんの股間を思いっきりカチ上げちゃって……。
頭頂部に当たる何ともいえないあの感触はちょっと忘れられない。むに、というか、ぐり、というか抉り系？　潰す系の効果音じゃなかったことがせめてもの救いか。
そういった愚を犯したときの、
「ぬうっ」
という旦那さんの呻きは今でも脳内再生が用意に可能だが、忘れたほうが旦那さんのためになるだろうか。
いや否。教訓の為にも忘れたら負けだと思っている。
忘れるといえば、
「――記憶が、無いんだよね……」
ガラドと別れた後のことだ。

「確か、旦那さんが？別行動だ？的なクネクネしたジェスチャーをしたから、ボクが？頑張れ？ってビシッと決めて、んでボクが村に向かってたら――」

……眼が覚めたら変態女医のベッドに寝ててマジでビックリしたなあ……。

目の前に青白い顔があったと思った瞬間に首筋に生暖か気持ち悪い感触が這っていったから一気に眼が冴えた。「ひいい――っ！」って逃げたら軟体動物的な動きで追っかけてきたからもっと眼が冴えた。「いやあ御免御免、動く物を見たら条件反射的に」ってそれ猫の台詞だよ！　ボクの台詞だよ！

でも、

「フルールさんの診療所で起きたのは幸運だったかな……」

起きたなりフルールさんに薬をせびって行けたのは好都合だった。でもでも、

「え？　ガラドにお薬持ってくのかい？　んじゃグレート要るかな？　グレート要るよねグレートうん今すぐにだね！？　んああっグレ――ト！」

とか言いながら手当たり次第に薬瓶の中にヨダレ垂らし始めたから五本目で止めた。正しくは逃げたけど。駄目になった薬は道中で全部捨てた。ちょっと舐めたら変に甘くて変な気分になったけどあんなん飲ませる気だったのかあの変態女医。

しかしまあ、

「遅れちゃったよね……っ！」

そう言いつつ掘る手を早める。少しでも早く着くために前へ前へ前へ。緩い地層を選び、大きな岩があれば迷わず迂回してロスを無くす。

……もうすぐだね。

それにしても、と。

……どうしてボクは気絶なんかしちゃったんだろう。

帰路で気絶したにせよ記憶の途切れ方が明らかに不自然だ。何か

と遭遇したり、戦闘した記憶が一切無いのにアーサーは意識の無いまま何者かに運ばれて、診療所の前にいた。
「わかんないなあ……」
結局答えは出ないまま、そろそろ戦闘地域の真下だ。
……旦那さん……っ！
即座に掘りのベクトルを真上に補正。重力に逆らい上がるだけ速度が落ちるが、出来るだけ速度を保ち掘り上がる。勢い良く飛び出せば、
「旦那さぁ――んっ！　助けに来たよ――！」
一瞬だけ光に眼が眩み、しかしすぐに慣らして見渡す眼前。
「だ、旦那さん……？」
日頃から見慣れたその姿は、今や狂気の二文字の真只中におり、
「――ほら、始めからいくぞ！　はい、ワンツー、ワンツー、ツー・エン・フォオ――！」
気持ち悪く、踊り狂っていた。

●

ガラドは、もはや創作ダンスの域に達している身体言語を全力で行っていた。回り、跳ね、手足を縦横無尽に羽ばたかせながら伝達する意思は、
【だから、貴様は人間で、人間だから私達と戦うのであって、でも私達のことを殺す気は無くて、でも今こうやって戦っているわけで、え？　あ、ええっと、――あれ？】
「だから、俺は人間だがハンターではなくて、お前達を殺さないが戦う義務は有ってだな」
【今更ですけど、この変なジェスチャーをぼやっと見詰めているだけで言っていることの大体が伝わってくるのが本当に不思議ですの……】
「だから、コレがこうでココがこう！　分かったか！　分かったか

――！？」
【済まない、もう一回最初から頼む】
「だから、先ずは腰をくいっと、くいくいっとこう、数回前後運動してだな……！」
半眼でそのやり取りを見つめる土竜猫は、頭だけを土壌から出したままで呟いた。
「何やってんの……？」

●

「高低差あり過ぎじゃない？」
正座だった。
アーサーはちょこん、という擬音がぴったり来る背筋を伸ばした綺麗な正座で『白』のグラビモスと向かい合っていた。背後には『黒』のグラビモス、そして隣には、
「まあ、こうなることは一度や二度ではなかったではないか」
「それはまあ、そうなんだけどね」
正座したガラド・ドレッドルート。こちらも綺麗な正座姿勢で凛と座っている。その双眼は真っ直ぐに前、どうやら『白』と名付けたらしいグラビモスを見つめているようだけどネーミング単純過ぎないかなコレ。まあいいか今に始まったことじゃ無し。
【え――……、私もなんでこんな事なってんのか全く分からないんだが……】
【心配せずとも私も付いて行けてないですのお姉様。でもまあ、】
とにかく、
「ああ分かっている。――現状の確認と、これからのことを話そうではないか、と」

●

「この場合決着ってどう、なる？」
「んー、どうなると思う？　ハートちゃんは」
もう日も傾き始めていた。
斜めに差す夕日がのろのろと後片付けをやっている大人達の影を長く引き伸ばす。少し離れて座っていたこちらに届いたのも数条あり、それがゆらゆらと揺れていたが、
……もう飽き、――たの？
談笑の声もちらほらと聞こえては来るが、それももう下火だ。ある者は酔い潰れた仲間を背負って退避し、ある者は広げたシート類を丸めて片付け始めている。酒だ賭けだとハシャいでいた姿も今や面影でしかない。
「もう、終わり？」
「ん――……」
間が空いた。
それは僅かな思考の間。なんと言おうか、と逡巡している風情だ。それを経て、
「皆の中で一応の答えが出た、ってとこかな」
「それじゃ分から、ない」
「そっか」
じゃあ、とルーテは腰を上げた。――え？　と微かに困惑を表す少女を安心させる笑顔のままで、村長たるルーテは己の右手を差し出した。
「んじゃ、見に行ってみる？」
「え？　もしかして、ガラド？」
「いやそれはちょっと危ないから。とりあえず皆のとこに、ね？」
えー、と渋るハートを、いいから、と無理やり引き起こす。その上で、
「そうね、面白そうだったら手伝ってあげて？　――きっと面白いと思うから」

「……とかなんとか言って、結局ボクが通訳を手伝わされるんだよね」
もう日も傾きかけている。
ただでさえ暗い湿林には、更なる闇の気配がじっとりと落ちてきていた。それでも、
……戦いはまだ完全に終わったわけじゃないよね。
力比べでも知恵比べでも、双方が互いに納得し、身を引いた分水嶺こそが決着だ。
そうするならば、一見馬鹿げたこの人間とその従者、そして飛龍の構図もまた、種族の威信を賭けた大切な戦いの一つなのだろう。
「仕方ない。ギルドナイトがオトモアイルーを雇うのは、こういうケースが少なからず有るからだ。つまりこれも職務の一部だろう」
「ま、そうだよね」
こうやって人間の言葉を話す獣人、アイルーの生態はきわめて特異だと言えるだろう。
弱く、群れることしか出来ないような存在のアイルーが、どうしてこの過酷な自然界で生きていけるのかという疑問は、この特異な生態によって全て説明できる。
それは、アイルー族の象徴とも言える、言語理解能力。
もちろんそれは生まれついてのものではなく、アイルー族は自身の？生きる力？として別種族の言語を学び、身に付けるのだ。それによって別種族との交渉・調停を図り、さらにそれに応じて臨機応変に立ち回ることで、？集団？としての存続を続けている。
人間とは、似て非なる在り方だと言えようか。
人間は自らの住める環境に既存の土地を『作り変える』ことが出来る。しかしアイルーは、厳しい環境下でも既存の土地に自らの住める環境を『作り出す』ことに優れている。
勿論、巨大な飛龍がわんさと住んでいる土地であっても、アイル

ーはその縄張りの隙間に自らの居場所を見出すことが出来るのである。
だから当然、交渉事ともなれば、アイルーは素晴らしい人材となるのだ。
「ならば、先ずは此方からだ。順序だてて行こう」
【先ずは、こっちから話していくよ？　後ろのグラビモスさんも聞いててね】
一拍置いてから双方からの頷きが返ってきた。おそらくその間は、猫が自分の知る言語を喋ったことに対する驚きだろう。
まあ、それもアリだ。今はそれをとやかく言う場でもないのだから。
そして、
「世界の広さを、教えてやろう」
世界には、まだまだ知りえぬことがたくさん溢れているのだから。

●

「――簡単にいこう」
これ以上ないというほどに居住まいを正しているガラドは、その揺るぎ無い姿勢ゆえに、そのままの姿勢で切り出した。隣のアーサーはしかし、やはり緊張があるのか背筋を反り返るほどに逸らして胸を張る。そして、
「俺が君達に要求する事項はたった一つ。そしてこの件を一挙に解決する方法もたった一つだ。分かるか？　たった一つしかないのだ。
それは、『白』君、そして『黒』君の即時撤退だ」
ガラドはアーサーが通訳するのを横目に、先ずは、という事項を挙げていく。
「この先には人間の集落がある。ぶっちゃけ個人的な意見としては打っ潰して頂いても結構なのだが、建前ではそうもいかん。俺はそれを護る義務を負っているからな」
【……えっと、この人は、つまり、――この先にある人間の群れを

護る義務を負った人なんだね。キミらで言うとこのリーダー、いや違うかな。えっとなんていうか――捨て駒？】
「何やら哀れみの眼で見るのは止めていただきたい『白』君。アーサーが一体何と伝えたのかは知らんが、俺は頑張って生きている。生きているぞ」
……何故か話は噛み合うんだなあ。
まあいっか、とアーサーは特に訂正することも無く伝えていく。哀れみのオーラがより強くなったのは気のせいではないだろうが。
「……そんなこんなで、俺は何らかの手段で君達を元の場所に落ち着け、ここの安寧を維持しなければならないわけだ。しかし、そこに武力は必要ではない、と考えている。
話し合いの場を持ち、互いの利害の一致を模索し調停する、それこそが本領だ」
一息。
「その上で言う。我らの利益とは当面、君達がこの場から去ることだ。これをこちらからの要求とし、以降、君達の要求を聞こうと思う」
そこまで言うと、再び場が静まり返った。そこにアーサーは一抹の居心地の悪さを感じながらも、
……これからだね。
飛龍と人間の歩み寄りという戦いの、その始まりを、肌に感じていた。

●

【――成程。成程成程――、】
……目的はあくまで、群れを護ること、ですのね。
その言葉を聞いて、漸く納得がいった、という思いがあった。それは先ほどの戦いの記憶で、何故あの男がこちらを積極的に？狩り？に来ず、スタミナ切れと戦意の喪失を狙っていたのかの答えがこ

こで漸く出た。
……どちらかといえば、此方よりの考え方なのですわね。
此方、とはグラビモスのことだ。元々好戦的ではないグラビモスは縄張りを侵されたときにだけ、つまりは仲間の危険にのみ立ち上がり、威を振るう。そしてその温和な気性は、
……食生活の違いですわね。
グラビモスの主食は、主に岩石。及びその中に含まれる微生物や虫などのたんぱく質。つまり、他の生物と争うことで殺し、その肉を食らう肉食の生物とは生態が根本から違うのだ。それを鑑みれば、
【……人間は、草食動物。……否、雑食と、そう捉えるべきでしょうか】
「そうだ」
【そうだ、……ってさ】
明確な答えが返ってきた。ならば、
【なれば、此方としても戦う理由はありませんの。私達は、自らに降りかかる危険さえ排除できれば十分。最も、――未だ貴方を信用したわけではありませんけれど】
「そうか、此方は君達を十二分に信用しているがな」
【それは――嘘ですの】
ほう、とガラドは息を吐いた。両手を広げた大げさなジェスチャーでその疑念を示し、
「一体それは何故だ？」
【忘れた、とは申させませんですの。――振り返って御覧なさい！】
当然、ガラドとアーサーの背後には、
【人質など取っておいて、それを盾にして、何が信用ですの？　何が調停ですの？　真に信用があるというなら、そこを退ける筈ですわね、――退けるものなら、ですわ。
これは余談ですが、人間の血には、――鉄分が豊富に含まれているらしいですわね】
これは戦いだ。それを明らかに自覚しながら、『白』は言い放っ

た。
【――人質を解放しなさい。それを以って、双方の信用の証としますわ！】

●

「あっちも、楽しそうなことになってるわねえ」
呟いた声は女のものだった。しかし、それを発するのは、
「なあ、この姿になったら身長差で声が遠くなんだよ。呟くにしても、俺に聞こえるようにもっと大きい声で呟け。なんつった？」
「だって、聞こえさせるつもりも無いもの。独り言、よ」
そうかい、と応える声は、男のものだった。しかし、それを発したのは、
「んで、またやんのかよ？　こんなことしても、あいつらの為にはなんねえと思うぜ？」
「あら、どうしてよ？　楽しいじゃない」
「いや、俺もよくはわかんねえけどさ、あの、なんつーの？　モラル？　っつーのか？」
「――――ごめん、今アンタからそんな難語が出てくるとは思わなくて絶句したわ」
「ひでえな」
「日ごろの行いが悪いのよ、アンタは。でもま、アンタもいい感じにガラドに毒されて来たわねえ。いいことよ、自分の考えを持つって」
「うるせえな」
「ま、それにつけても私は、――快楽主義者なのよねえ」
蠢く影は二つ。そしてそれはとても巨大で、片方は流麗なフォルムを夕闇に描き出し、もう片方はさながら小山のような形に景色を切り取っていた。
見据える先には、やはり、

「――萌えが、足りないのよねえ……」
「は？　何つった？」
「独り言、よ」
ガラドの居る、湿密林が在った。

１０話　夜闇の相対

数刻前だったろうか。
飛脚アイルーから、現地の動きを伝える知らせがあってから暫く経つ。
変わらずの一人と一匹、壮年の優男とクリスタルは、その場に腰を落ち着けて事の成り行きを見守る体制に移行した。大仰な机とセットの椅子に深く腰掛けている男は元より、廊下と部屋の狭間に位置するクリスタルも、気を利かせた近衛アイルー隊の面々に茶やら座布団やらを差し入れられ悠々だ。
幸いハンターギルド本部は廊下まで空調が効いているため、戸を開けていても部屋が冷えることはなかった。そもそも、クリスタルが部屋に入り扉でも閉め切ろうものなら、目の前の優男が顔面の穴という穴から大洪水になることは自明の理か。
だがクリスタルにとって、とりわけ今に限っては、己が主人などどうでもよかった。
「……実に無念です。――どうぞ」
「そうかね？　我輩は寧ろ安堵しているが。何故だろうかね？　貴様からどんな無理な要求をされるのか、未だ分からないからかね」
「それはまあ、極秘事項というわけで。――どうぞ」
「何故秘密なのかね？」
「何故なら、――言えばきっと、賭けなど受けなかったかと」
「――今また急速にほっとしたっていうか急激に後悔してきたね……！」
「気のせいです。――どうぞ」
しかしまあ、と改めてギルドマスターたる壮年の男は呟き、伸びた前髪が視界を覆うのも構わずに、目線を落として手元の教本を読んだ。声に出して、
「――ペイントボールの極意入門編・多増球（たまたま）……？」

「是。参考としてこの教本の発売当時におけるギルド通販サイト？甘損？のカスタマーレビューから幾つかを抜粋します――この項目に関して述べますと、『極意なのに入門とはこれ如何に』『入門編でいきなり増える魔球はハードルが高すぎる』等々。そして一番多かったのは『シモい』『最低』でした。
幾らなんでも球が二つに分裂して黄金色に光るとは。つまりは、ええ、――超不評で」
「決め台詞は『魔球・ゴールデンボールズ！』か……。これはまた、ふむ……」
男は考え込む様な素振りをして、ゆっくりと椅子の背もたれに沈み、嘆息しながら、
「我輩も、若かったのだね……？」
「いい感じにイカれてますね？　おっとこれは褒めてませんが。――どうぞ」
「清々しい貶し言葉を有り難うかね？　クリスタル」
是、という承認の声と、その声の揺れ具合から、クリスタルが頷いたことを男は察することができる。覗えば、美しい毛並みのアイルーが、綺麗な正座で茶を啜りながら、
『……周波数合いました。ええ、こちらギルド通信部、あ、えーと、クリスタル様。本日も毛並みが麗しゅう御座います――』
「是。世辞はいいので早く定時報告に入りなさい。――どうぞ」
『あ、すみません。最近入ったばかりで慣れなくて……。――どうぞ』
「ガラド様はどうなりましたか？　首尾よく勝たれましたか？　――どうぞ」
インカムで逐一送られてくる報告を聞きながらの応答は、果たしてガラドを心配しているのかそれとも賭けの結果の是非を憂いているのか微妙なところではあったが、恐らく両方であろう、という結論が最もしっくり来る。
それにしても、と。かつての教え子の活躍を見守るというのも、

「中々、面映いものであるのかね……」
教官としての喜びというのは、実のところはここにあるのかも知れない、と思う。
懐かしい弟子の近況を聞くことで？今の？ギルドマスターは、そして、終にその地位を己が弟子に悟られることなくその責務を終えた？かつての？教官は、なんとも表現しがたい複雑な感傷を得た。それはどうにも？喜び？と近似したものだ。
くすぐったくも、僅かな羞恥すら覚えるような奇妙な歓喜。これは、……親心、と言ってもいいのかね？　いや、――否。
おこがましいな、と思い直す。
自分が幾ら彼の人生の幾許かに関与し、生きる術の幾つかを教えたからと言っても、所詮それは仮初の物。血の繋がりや肉親の愛情といったものとは及ぶべくもない。
しかし。
『否です、クリスタル様。ガラド様とアーサーは、グラビモス二頭に対し交渉姿勢へ移行しました。――どうぞ』
「そうですか、それは重畳。これ以後も首尾よくお願い致します。――以上」
『は』
……師として、誇っても良いものではあるのかね……？
我ながら女々しいことを考えているのかね、とギルドマスターは苦笑を一つ。そして、
「――一つ、追加をしても良いかね？　必要ないかもしれないが」
「何でしょう？　――どうぞ」
「現地のアイル―実働隊に通達してくれるかね？　以後、該当地担当ギルドナイト・ガラドに対する物的支援を、――一切自重するようにと」
「――少し、お待ち頂けますか。ギルドマスター」
クリスタルは目線を落とし、考え込む素振りを見せる。そして暫しの後、再び此方へと目を向け、静かに口を開き、

「……――その命令は認められません。――どうぞ」
「ふむ」
はっきりと拒絶した。
しかしそれにも男は然したる揺れを見せず、それどころか寧ろ楽しげな口調で尋ねた。
「それは何故かね、と聞いてもいいかね？」
「是。一つは、それを行うことにより私の賭けが不利になりますので。今は小康状態とは言え、これから状況が悪化し、再度の戦闘に移行する可能性もゼロでははないのですから」
「もう一つ、は？」
一息。手元の茶を啜りつつ、クリスタルは事もなげに言った。
「一つは、――最初からその命令は通しておりますので。全くの独断ですが、支援などなくともガラド様の敗北の可能性などゼロに等しいかと。司令官が同じ命令を二度繰り返すなどと腑抜けたことをしていては部下の信用も何も有りませんし。――どうぞ」
く、と喉から息が漏れる。それは徐々に勢いを強めていき、は、という声になる。
そして男は、満面の笑みとともに言った。
「――――矛盾しているね」
「是。――女心とはそのようなものですから」
どちらからということもなく窓越しに見える外に目をやれば、とうに日は暮れている。
夜が迫っていた。

●

【――夜、か……】
ただでさえ暗い湿原も、景色に夜の色を帯び始めていた。
その下で、蠢く一匹と微動だにしない二頭と一人。その内一頭と一人は睨みあい相対し、あとの一頭は手負い、一匹は新参者だ。

黒のグラビモスは、ことの推移を見守る。腹下から伝わってくる湿った冷たさを感じながらも、しかし抗うこともなく、――ただその場に横たわり、見守る。

……まだ毒は抜けきらない、か。

思い通りにならぬ我が身を歯痒く思う一方で、思うのは、

【――済まないな、手を煩わせてしまって……】

「え？　あ、うん。どうせボク達のせいなんだからさ。このくらいのことは当然だよ？」

先ほど彼の人間から受けた、腹の傷跡を手当てしている小さき者のことだ。

名をアーサーと名乗ったふわふわの獣は、先ほど己が主人に事の経緯を聞いたのち、自分の出来ることを行っている。それは主人と相対する者との通訳であったり、また、

「うん、これで終わり。結構深く刺さってたから早めに手当てしてよかった、かな」

【……】

……矛盾している。

そう思うのは、おかしいことだろうか。

まだ日が空にあった今日、この目の前の人間と自分は戦っていた。人間は本気であったのかどうか杳として知れないが、少なくとも自分は、――本気だった。

殺そうとしていた。あの男を。

その殺気を、少なくとも手練のこの男が察することができない訳はないし、その助手だというこの獣が、主人に害を及ぼそうとした相手に対してどうとも思わない筈もない。

それなのに、

【……おっ、おい。お前】

「んっ？　何？」

結構ぞんざいに呼んでしまったな、と思うが早いか――振り向く小さな獣の上目使いに、

……か、可愛いなあ。
思わず見惚れて、言おうと用意していた言葉をグラビモスが発せないでいると、訝った小動物が不思議そうに小首を傾げ、
「え、えっと……。どう、したの？」
【あ、あ……あり、あ、】
「え？　アリ？」
……ああもう、無暗に可愛らしい……！
漆黒色のグラビモスは苦悩した。何故なら、
……こ、これは、このままでは、――う、浮気にならないだろうか！？
「も、もしかしてまだお腹の傷が痛むの！？　そうなの？　言葉が出ないほどに……！」
【あ、や！　ち、違う！　違う、違うが……！】
落ち着け、とグラビモスは思った。自分に言い聞かせ、そして考える。
……こんな時は、自分の好きなことを考えることで気を鎮めるのだ……！
脳内でそう結論し、大急ぎで自分の好きなものの検索を脳内で行いコンマ一秒で検出ワードのトップに金字で？妹？と出た。？猫？でないならば迷うことなどない、と脳内で、
……妹、それは至高！　血縁に因る絆、いや義妹ジャンルもアリか！？　呼び方は王道の『お姉様』もしくは『お姉ちゃん』と幼さも残してみるか！？　ならば、急に後ろから抱き付いてすりすりした時の『もぉ、お姉ちゃんったら甘えんぼさんなんだからぁ』というのも親しさが増してｇｏｏｄ！　いや寧ろｇｏｄ！！　嗚呼、これが妹萌え――！！
ふう、という吐息は自然に出た。絶頂まで上り詰めた興奮が急速に冷えていくその感覚までもが心地よい。軽く首を横に振るようにし、爽やかな声で、
【……姉でよかったなあ】

「――――ってホントに意味不明だよっ！　少なくとも絶対頭打ってるよね！？」
何かを悟った彼女にとっては、全てが些事に過ぎない。
冷え切りスッキリとした思考で考え、そしてゆっくりと、
【……うん……！】
「ううう打ってるの！？　っていうかもう駄目だこの人も！　珍しくまともな人だと思ってたのにボクは！　ボ、ボクもうね、――駄目になっていいかな！？」
「この人、ではなくこの龍、だがなアーサー少し落ち着け。――だがまあ、」
そう言うガラドは背後ではなく、眼前に控える龍を見ている。
眼を逸らさず、覚悟を持って見る先には、同じく覚悟を持ってこの相対に臨む龍がいる。
ならば、とガラドは小さく微笑み、そして呟いた。
「人質。否、――龍、質か」
笑みとともに、彼は正座の姿勢を崩して立ち上がる。
力を伴わぬ相対が今、始まろうとしていた。

●

【……！！】
人間と相対する龍は、初めて敵に伴った動きに思わず筋肉を緊張させてしまう。それがまるで怯えのようにも見えて、
……いけませんの。
その眼光はそのまま、目線はそのままに、改めて自分の経験のなさをグラビモスは自覚した。これはこれまでの一切の諍いを姉に押し付け自らはその後ろに隠れていた、そのツケということになるのだろうか、と。
噛み締めた顎が軋りの音を立てた。こんな体たらくで、この相手に勝てるのかと。
その動揺が見て取れたのだろうか、帽子を目深に被った男は余裕

のある言葉で呼びかけてきた。
「何だ、緊張しているのか」
は、と顔を上げたアーサーは素早く顔をあげ、その意を伝えるため口を開き、
「緊張してるのか、だってさ」
【それは、――そう、ですの】
「意外と、素直なのだな」
逐一、アーサーはグラビモスの言語で通訳をする。それを頼もしく思いながら、
「素直は美徳だと、俺はそう思うぞ」
【別に、こんなところで嘘を吐いて強がるほど、私は弱くはありません。それだけですの】
「だが、緊張しないほど場慣れもしていない、と」
【……】
成程、成程、と男は頷きながら笑んでいる。その底意地の悪そうな表情にグラビモスは苛立ち、声を荒げてその意を問うた。
【それが、どうしたのですの！？】
「いや、すまないな。どうやら俺も緊張しているらしい。ほら見ろ、足も――震えている」
身振り手振りは大げさに、男は自分の足を指差している。しかしその足は、
……遠すぎて、暗すぎて、ここからでは分かりませんの……。
「どうした？　遠くて見えないか？　それは仕方ないな」
【……く……！】
苛立ちで、身が震えた。しかし、とグラビモスは考え直す。
……ペースに乗せられては、いけませんの！
【そんなことより、貴方は真面目に条件を飲む気はありますの！？】
「無いな」
【な、ななな無いんですのっ！？】
……ど、どういうことですの！？

戸惑っていると、すぐに応えが帰ってきた。それは余りにも毅然とした態度で、
「何故なら、――俺は人質など取っていないし、取ったこともないからな」
【はあ！？】
面食らった。
しかし、動揺してはいけない、とその思いのみで『白』は言い返す。
【な、何を言っているんですの！？　だって今、現に……！】
「『白』君、何か勘違いしてはいないか」
再び、は、と聞き返す正面。見てみろ、と男は前置き、芝居がかった手振りで大きく両手を広げて見せた。そして、
「――この状況を」
【だからそれが、一体……】
言われて改めて確認する。それは、
……私が居て、お姉様が居て、その直線上に一人と一匹が居て、私は熱線が撃てなくて、
【だから、お姉様は人質に――】
「――否」
俺はこう考える、と前置き、ガラドは宣った。
「俺達は、グラビモス、それも二頭に、――挟み撃ちにされているのだ、と」
【は、はあぁですの！？　一体何を今さら屁理屈言っているのですの！？】
「冷静に考えてもみろ。飛龍二頭に挟まれているというこの構図は明らかに俺の不利だ。よって、『白』君の言うような譲歩の余地は無いのではないか？　と」
……め、滅茶苦茶……！！
まさかの開き直りに目眩すら覚えた『白』の視界の中で、未だ動けぬ『黒』が体をゆすりながら口を開け、叫んだ。

【そ、そんな詭弁に騙されるな！　そうやってこの男は――】
「――おっと」
そこまで『黒』が反駁したところで、急に男が体勢を崩した。足の力が入らないかのように後ろに数歩よろけ、足を縺れさせ、
「ああ、駄目だ。緊張のあまりに足に力が入らない……！　どこか座るものは――」
【――！！？　ちょ！　貴様！？　何を……！】
「お、おおっとっと……。ふ、良かった。近くに座るところがあって、と」
腰掛けた。
しかし、その場所がいけない。そこは、
「んん？　ああ、『黒』君か。お邪魔しているぞ」
【ほ……！　ほっはほ！　ほは！　はお！？】
【あ、貴方、ど、どどど何処にすすすす座っているんですの――っ！？】
「ああ、それは――」
一拍置き、どう言おうかを考えているかのような素振りを見せるや、足など組んで見せてから、勿体付けた口調で言った。
「――――下顎だな」
倒れて動くことの出来ないグラビモスの開いた口腔、その下顎に、腰を据えたのだ、と。

11話　本音の建前

鎧龍グラビモスは、主食として度々鉱物を食す。そのため、固い岩も容易に磨り潰せるように、上下の顎は鋭さというよりは鈍さ、硬さに特化したつくりになっている。
石臼のように平たく揃った下あごの歯は、さながら古代の建築物のように完璧だ。
だから、という訳ではないが。
彼の男、ガラド・ドレッドルートは、交渉相手の下顎に座ったまま。
ややあってから、上顎を上げたまま下ろそうにも下ろせないでいる姉の姿に、遅れがちの思考が漸く追い付き、『白』は咎めの叫びを上げる。
【お、おおお姉様から今直ぐ離れなさいですの！　早く！】
「？　何故だ。理由を述べろ」
この状況でも男の笑みは消えず、顔に張り付いたままだ。それに苛立ち、『白』の語気は更に強く激しくなっていく。
「さあ言ってみろ絶対怒らないから。一体何故、離れなければならないのかを」
【――さっきから何故、何故と！　私達を馬鹿にしているのですの！？】
「馬鹿になどするものか。しかし、恥ずかしながら一方の俺はどうやら馬鹿なようでな。目下、君が俺に『黒』君から離れろと言うその意図を図りかねて仕方がないのだがな」
【だから……！！】
瞳には明らかな憎と蔑の色。
幾ら勝った相手だとはいえ、あたかも相手が命無き無機物であるかのようにその下顎を腰掛け代わりに使い、薄汚れた尻を乗せるなど冒涜にも限度がある。

現に、
【……！？　……！！？】
哀れ口を閉じることも出来ない実姉は戸惑いうろたえ、視線だけをまるで誰かに助けを求めるように彷徨わせている様が痛々しい。
目の前の、否。口の中にいる男の奇行を量りかねているのか。兎にも角にも、これは異常な状況だ。だからこの状況は打開せねばならない。
その為には、
【貴方が、――貴方が今座っている場所がどこか、分かっているのですの！？】
「下顎だ」
【うっ……】
……駄目ですの。話が全く通じない……！
男は未だ踏ん反り返ったままの姿勢だが、組んだ足の腿を揉み解しなどしつつ、しかしその表情に多少の憤慨を載せた。口調にも同じ色を浮かべながら、
「馬鹿にしているのは君ではないか『白』君。自分が何処に座っているか、だと？　そんな赤子ですら分かるようなことが分からない筈がないではないか。これでは尚更、交渉者として相対するには足りないと判断するを得ないぞ、俺は」
【あ、あのねえですの……！】
幾度目かの反駁を、押さえきれない怒りと苛立ちと共に吐き出そうとした。
小馬鹿にしたような態度を続ける目の前の無礼者に対し、ありったけの激昂をぶつけようと、見据えた一直線の視線。
しかし、予想外の声が、予想外の方向からそれを遮った。
それは呟きの小声で、しかしだからこそ、不毛な言い争いの間隙に滑り込んできた。
聞こえたのは一瞬。疑問含みのそれはあまりにも微かな、
「――矛盾、してない？」

小首を可愛らしく傾げた、小人猫のものだった。

●

【……――む、矛盾ですの？】

沈黙が降りた。

その沈黙を招いたのは、猫の呟きだ。

一瞬でその場の全ての目線を集めたことに、一拍おいた遅めの驚きを露にした当人は、

「あ、――え？　ご、御免。何でもないから、つ、続けていいよ？」

【え、あ？　え、ええ。えーと、では……】

「――駄目だ」

沈黙を拒絶される。

それは猫の主人からの勅令であり、面白い、というような笑みを含んだ命令だ。

鼻から上は被るテンガロンハットにより隠されているが、それで隠れきれない口元には、隠そうともしない微笑の歪みがある。

「矛盾、と言ったな？　では一体何が矛盾しているのだろうか。それを教えてくれ」

「え？　それってさ、もしかして……、命令？」

「否。もちろん、お願いだ」

「それは心からのお願い？」

「――心ばかりのお願いだ」

「ええー。それじゃ仕方ないなーもー。はーあ。心ばかりのお願いされちゃうとなー」

「ふふ、特別大出血サ――ヴィスだぞ？」

【あ、あの……。心ばかりの、の意味はお分かりですの？】

「え、知らないの？　心から、のパワーアップヴァージョン。感謝の心がたくさん集ったら心ばっかり、になるでしょ？　だから、心ばかりのお願い」

【……な、何かおかしいような】
「ええ？　そ、そうなの？　でもそう言っていつも旦那さん、が……」
沈黙した猫が無言のままで振り向くと、ガラドが先刻の羅生門ダンボールをゆっくりと取り出していたので慌てて正面向いた。
実力行使は卑怯だ、と思いながらも、猫は笑って、
「で、でも。――お願いしてくれたしさ」
【……そうですの】
「では、何処が矛盾していたのだアーサー。言え、一体誰が一番おかしいのかを」
「それは旦那さんだよっ！　――って凄く言いたいけどまあ駄目だよね。真面目に行くよ」
は、と一つ息を吐く猫。
そして改めて振り返ると、その目線の上に居るのは、
「今、一番おかしいことを言っているのは。否、矛盾しているのは――」
一呼吸おいた。尚も続く沈黙に居心地の悪いものを感じながら、アーサーは告げた。
「――『白』さん、だよ」
【あ、え？　わ、私ですの！？　それは一体……？】
だって、という前置きは次の問いの呼び水だ。その言葉は、
「さっき自分で言ったことを忘れたの？　確か言っていたよね。人質を解放すれば、交渉に応じると。人質を取るっていうのは、取る側から取られる側への一方的な行為だよ。
だったら、――今この状況はどうなるの？」
【この、状況……】
……私が居て、お姉様が居て、その直線上には猫が一匹、私は熱線が撃てないけれど、
【――え？】
違う所がある。先程とは決定的に違う状況が。頭に血が上ってい

て気付かなかったが、状況を丸ごとひっくり返すような変化が、ある。
それは、と『白』の思考が整う刹那。まるで測っていたかのように男が口を開いた。相変わらずわざとらしい口ぶりで、しかも『黒』と『白』に聞かせるための大声で。
「おおっと、これはしまった！　特に何の考えも無く、思わず座ってしまったが、今俺が座っている場所をよく見ろ俺よ！　毒が回って首から下は動かないとはいえ、否、――首から上は確りとよく動き、よく話し、そしてよく噛むことも出来る『黒』君の！　しかもその口の中に、座ってしまっているではないか！？　嗚呼、しかし我が両の足は未だ健在ならず、それどころか膝が笑っている！　否、大が付く爆笑だ！　待てよ、これでは――」
ふ、という自嘲した笑いを呼気とし。
男は言った。
――これでは、俺が人質のようではないか、と。

●

一瞬の、しかし確実な沈黙が夜闇の湿林に流れ込む。それはその場に居合わせた者達の、動揺と、確信と、焦燥と喜悦と、未熟者を上から見下ろす歪な慈愛に満ちた一瞬だった。
その一瞬を噛み締めるように、男は静かに続けた。
「――確か、『白』君はこうも言ったな？　『人の血は鉄の味がするらしい』と。それでは何故、俺は今なおここに座り続けていられるのか？　そして、君達はその『血の味』とやらを、一体誰から聞いたのか。親か？　兄弟か？　それとも、――赤の他人か？　俺の記憶では、グラビモスという種族は決してナマモノを食べない主義と聞いたが――」
【そ、それは……】
言いよどむ白銀の鎧龍を目の前にして、ガラドはしかし笑い続け

る。違いは、それが神経を逆撫でるような卑屈な微笑から、幼子を見守るような快い嘲笑に変わったことだけだ。
頃合を見て、ガラドは立ち上がる。あ、という声にも似た、焦りを帯びた漆黒の鎧龍の唸りを背にしながら、
「気が変わったなら、『黒』君が後ろから俺を撃てばいい。俺はここから逃げない。それでこその人質、そうでなければ『白』君は交渉の相手にもなってはくれないようだからな」
さて、
「問いを整理しよう『白』君。――俺が『黒』君の口に近付いたとき、人間の血の味を知っている筈の君達が、腹をすかせたティガレックスのように俺を食らおうとせず、それどころか困惑してその場から離れろと俺に宣った。何故か？　――また、君達は俺が君達との対等の交渉を求めていることを知りながら、食べたことも無い人間の血の味など引き合いに出しながら俺に意地悪を言う。それは何故か？
その上、俺自身が人質になるという、俺と君の要求を折衷し且つ君の要求へ応える最高の解決法を、沽券など考えつつタテマエを織り交ぜながら提示してやったというのに、君達には一向にその覚悟に応じてくれる様子が無い。それは何故か」
そして、
「最後に、未だ君達は俺に言うべき何かを隠している。――何故か？　全ては、君達が俺を信用していないからに相違ない。そうだな？」
【……】
その間を、ガラドは肯定と受け取る。その上で、
「未だ、か？」
【……未だ、とは？　何を――】
「未だ、話してはくれないのだろうか。何故、君達がこのような辺境に追いやられたのか。何故君達が、まだ母龍の保護を受けねばならないような未熟のままで、この弱肉強食の世界に送り込まれねば

ならなかったのか。
そして何故、――人の血の味などと、物騒なことを知り得たのか」
続きは、『黒』の傷の状態など確かめているアーサーが言った。
「キミ達は、旦那さんを一思いに殺すことを躊躇ってくれた。そして、家族を思いやる、とても大切な感情も持っている。交渉の席に着く条件は既に揃ってる。
でも、何故ボクたちは今、こうやって戦っているの？　その原因は？　理由は？　感情は？　嘘を吐いて隠し続けていたって、解決も、譲歩も、妥協も、何も出来ないんだよ？」
だから、
「ボクたちが交渉の席に着く条件は、――キミたちが嘘を吐かないこと、だよ」
【……――でも！！】
強い、悲鳴のような逆説の否定が、静まりつつある空気を断ち割り、響き渡る。
それは子が親に縋るような、何もかもを投げ出し委ねるような叫びとなった。
【貴方は、ヒトですの！　ヒトは敵、私達を殺し、切り刻む悪魔ですの！　それをどうやって信じろというのですの！？　どうやって安心しろというのですの！？】
一息。
【貴方達が、――貴方達が私達の母親と父親を殺し、全てを奪ったのに……！】

●

既に笑みは消えていた。
再び表情を消したガラドは、静かに、しかし力強く。促しの問いを『白』に投げかけた。
「……それは、どういうことだ？」

【――忘れもしませんの。あの日、私達が眼を覚ますと、既に母親はどこかに出ていて。それがあまりにも長すぎると、そう言って父親も巣を離れました。未だ小さな、私とお姉様を置いて】

『白』は、胸の中に積もり、凝り固まった何かを搾り出すように、啼き続ける。

【でもその後すぐに、母がどうして帰ってこなかったのか、それを思い知りましたの】

それは、と。背後にいた『黒』が静かに続けた。

【――外には、ヒトがいたんだ。それも大勢の。四人じゃきかない……】

「……そ、それって」

「ああ。恐らく――、密猟だ。それも規模の大きな」

密猟。

それは、ギルドから依頼されるクエストとは全く異質の、犯罪行為。

クエストが依頼される条件は、主に二つある。

一つは、モンスターが人里近くに巣を構え、危険と判断された場合。

もう一つは、モンスターが異常発生し、生態系に影響を及ぼすと判断された場合。

どちらも、決して私欲や営利目的に行われるものではない。

しかし。

【私達は見たのですの。あの強かった父が、どんな飛龍にも負けなかった父が、あっけなくヒトの群れに囲まれて、――嬲り殺しにされたのを！　そしてきっとその時、母も……】

ハンターの中には、金や貴重な素材目的で日流を狩る輩がいる。それを取り締まるのも、ギルド直属のハンターであるギルドナイツの管轄だ。しかしそれだけに、

……密猟者に向けられるはずの咎めが、ギルドナイツにも向く……。

しかも今回は、ご丁寧にも直接の被害者からの訴えだ。更にそれが

?ヒト?という大きな括りに向けられたものであるならば、
【貴様は、私達と交渉したいと言った。ならば、貴様はヒトの代表だ。そして我等はヒトに大切な者を奪われたモノたちの代表として、貴様に損失の補填を要求するぞ！？】
　それはつまり、過去において為されてきた全ての人の業を一人で背負えということだ。
【それが、貴様に出来るというのか！？】
【――いいえ、是が非でもして貰いますの。それが叶えられぬ限り、私達は決して?ヒト?を許すことはできませんの……！】
　だが、ガラドは、皮肉にも内心では穏やかな喜悦を得ていた。それは、
……漸く、だな。
「――甘いな。甘過ぎる」
……漸く君達の本音を、本気の訴えを聞くことができた。
【甘い、だと？　貴様、一体何が言いたい！？】
「君たちの考えが、だ！　甘い、甘過ぎる！　もっと言おうかああ激甘だ！　そんな甘ったるい子供染みた考えでこの世界を生きていけると本気で思っていたのか！？」
【……なっ！？　言わせておけば……！】
……ならばこちらも、本気で。与えよう。押し付けよう。思い知らせてやろう。
「――オトナの世界を、教えてやろう」
――全力の叩き潰しと、それ以上の救済を――。

●

　不意に言葉を切り、続く動きとして、ガラドは被っているテンガロンハットを取った。
　零れるのは、黒。
　何処までも黒く無機質な、闇としての黒色だ。そこには一筋の光

沢すらなく、ただ黒の塗りつぶしのような黒髪が明らかに異質。それを纏うのは、
「ギルドナイツ、ガラド・ドレッドルート。時刻は２３・３２、人を助け、龍を護る、我ら矛盾の道を歩む者なり。世界に尽くし、世俗に尽くさぬ、我ら半端者の眷属なり。
天道は此処に在らずも、遍く咎人を照らす？日？の下に、我ら永久の？正？を約束す！」
髪と同じ暗黒色の眉。
同色の刃の如き鋭い瞳。
精悍な顔は、挑むような笑みに満ちている。
「交渉に余計なハッタリや嘘は要らない。俺が求めるのは、本音と、建前による武装だ。さあ、俺は既に要求を述べたぞ。だから君達も同じように、高らかに激甘要求を述べろ。
真っ向から、正面から、オトナとして、正々堂々と、――叩き潰してやる」
私は、と『白』は吼える。
【私が要求するのは、――過去、ですの！　当然のように存在し、私達が当たり前のように享受でき、――しかし奪われた。幸せな過去を取り戻すことを！】
ならば、と『黒』が吼える。
【私が欲するのは、――未来だ！　私達がこれから、自らのために生きていくための未来、そして他人のために生きていくための未来が、私は――欲しい！】

12話　優しい否定

整然と並び立つ影がある。
それは長椅子だ。それらが落とす影は非常に頼りなく、照らす光も薄い。
夜のギルドナイツ寄宿舎、その一階に在るロビーは、人気も無く静まり返る。
しかし、それらを見上げる低い視線の持ち主は、漸く目的のものを薄暗い情景の中から見つけ出した。それは人影であり、他と同じく自販機の薄い光に照らされている。
姿勢は座。手には冬らしく、湯気の立つお汁粉など持って。
「ああ、ここにいらっしゃいましたか。とは言うものの、別段貴方はどこにいらっしゃったところで同じですけれど。――どうぞ」
「ずいぶんな言い草だねクリスタル。我輩は一応、ギルドマスターでもあるのだがね？」
「『一応』と評する辺り、身の程を知っている感じが出ていて非常にいい感じですギルドマスター。どうせ、今は特に仕事もありませんし。強いて言うなら――」
クリスタルは、懐から一枚のコピー用紙を取り出す。
「――ガラド様の件、こちらは実に重畳に仕上がりました。ギルドに保管されている過去十年前までの逮捕記録。私有している親衛隊も総動員させ漁ってみたところ、それらしい事案が漸く出て来ました。――どうぞ」
「『漸く』と評する辺り、決して満足はしていないのだろうが、十分に良い働きではないかと我輩は思うがね。流石、と言っておこうかね？」
「否。半端者たる我らには、褒め言葉など似合いません。何より――」
言に間を置き、据え置かれているテレビに電源を付けながら、ク

リスタルは呟く。
「――世界の代弁者には、誰も成ることは出来ません。我らを正しく評価出来る者がいると仮定するのならば、それはきっと、？世界？以外の何者でもありませんので」
そこまで言うと、クリスタルは黙した。
目線は先程付けたテレビに向けたまま、何かに疲れたように、男の隣に座る。
黒長髪の男は穏やかな目でそれを眺めながら、ゆっくりと懐からガスマスクを取り出す。
装着。
途端、穏やかな表情がガスマスクの中で急に崩れ、苦悶の声が漏れた。
「――っぶは！　ああこれで、やっと、やっと息を吸えるのかね。はあ、はあ、ふう……。――って、これでは汁粉が飲めないではないかね！？　な、何ということだねこれは」
「難儀ですね。同情します。――どうぞ」
「な、何という同情の仕方かねこれはっ。――まあ、もう慣れたがね」
まあまあ、とガスマスクの男は飲めなくなった汁粉を自分と従者の間のスペースに置き、おかまいなく、とクリスタルがそれを取り上げた。代わりに飲もうとして、
「……――どうぞ」
「――難儀だね？　猫舌とは。同情するね、我輩も」
「否。私は、飲めないのではなく、飲まないのです。貴方のような男と間接接吻することを私のささやかな自尊心が許さなかったのです。――どうぞ」
「――一つ良いことを教えてやろうかね？」
何を、とクリスタルが首をかしげたのを気配で悟りながら、ギルドマスターは告げた。
「丁度一年前、ガラドもそれをここで飲んだ。何というアニバーサ

ルディステニーかね？」
一拍。
僅かな沈黙を経て、ゆっくりと横を向いたギルドマスターが見たのは、
「……おや、一体どうしたのかねクリスタル。――同情するね？」
何かを我慢するかのようにふるふると震えるクリスタルの姿だった。

●

「――同情はしよう」
夜の湿密林。
元々光源となる物の乏しい地だ。昼でさえ生い茂る樹林のしな垂れかかるような葉によて空は隠され、夜になれば星の光すら阻んでしまう。
しかし、交渉相手の姿が見える。それは何故か。
「――しかし、我らギルドナイツは、同情しかしない」
……いい雰囲気だな。
湿った地帯には、虫が多い。
それら虫の中には、自発的に光を発する種類が少なからずいる。
仄かな電光を残していくのは、雷光虫。
消え行く命の眩い光を断続的に飛ばしてくるのは、光蟲。
各々の光量は決して多くはない。しかし、虫は群れる。
小さな群れが幾つも、幾つも、湿密林中を照らして止まない。
「親が殺された。それは悲しいことだ。住む場所が無い。ご愁傷様、だ。しかし、あえて言おう。――だからどうした、と」
【よくも、そんなことが言えたものだな！？】
『黒』の猛りが、幾つかの光蟲の群れを散らせた。一瞬漆黒のグラビモスの顔が闇に飲まれ、しかし直ぐに、その陰影が新たな光の群れによって露になる。
【貴様らが、私達の親を殺さなければ、私達が路頭に迷うことなど

無かった！　私達は、今よりももっと安らかな暮らしが得られたはずだ！　なのに、貴様らが……！】
「だから、俺達に何をしろと？　土下座でもしろというのか？」
【――そんなもので足りるわけがありませんの！！】
悲痛な、泣き叫びのような『白』の咆哮が響く。それはトーンを幾らか落とし、続けた。
【分かりやすく答えを求めますの。私達は、この地の幾らかを新たな住処として割譲して頂きたいのですの。それを以って、私達への償いに代えますの】
無言のままで、ガラドは『黒』を見据える。
【勿論、私達は貴様らの縄張りには入らない。これが、――私達の条件だ】

●

成程。成程成程――、と。
ガラドは幾度も頷きながら、明るい声で繰り返す。
「ということは、アレだな？　我らが勝手に奪ってしまった君等の親の命、その償いはどうしようと償いきれるものではない。だから、その償いは住む土地を割譲して貰うことで、それで妥協をすると、そういうわけか？
よく考えたものだ。ぶっちゃけた話、ここの土地はあまりにも広大で、その内の幾らかを割譲したところで屁でもない。そして、我らの住む土地には侵入せず、静かに暮らしていく、と。そういうことか？　何と素晴らしい案だ、それはいい！」
【――で、では――】
うん、とガラドは頷き、快活に答えを述べた。それには笑顔もついたもので、
「ならば、俺は君達に要求しよう。君達がこれまで生きてくるに当たって消費した貴重な鉱石、及び殺された微生物、それら諸々に代

わる償いを」
【――――え？】
吐き出された答えを理解できず、二頭のグラビモスは固まる。その沈黙もそ知らぬ顔で、ガラドは述べ続けた。
「そうだな、――支払いは、土地でいいな？」

●

いいか、という前置きを一つ。
「――今から否定を述べる。お前達の甘えに対する否定だ」
答えは無い。
ただ二頭のグラビモスは、前と後ろから此方を睨み据えているだけだ。
それをただ無視し、無言を肯定とする。
「一つ。――お前達は、命を一体何だと思っている？」
返るのは沈黙のみ。ガラドはあくまで静かに、続ける。
「命を土地と等価にする、だと？　寝言も休み休み言うがいい。それで本当に納得がいくのかお前達は？　それならばとんだ親不孝者だな。死んだ両親も浮かばれまいな」
【――く、う……】
「挙句の果てには命の賠償を求める、だと？　ならば我等は君等だけではなく、狩った飛龍、食った家畜、摘んだ植物、殺した虫の一匹に至るまで賠償せねばならないだろうな。一匹につき、お前達に与える土地の半分か？　そんな土地がこの世界の何処にある？」
答えはない。
「覚えておけ。我らはただ生きているというだけで、絶えず一定の命を食らい、それを気付かぬうちに黙認しているということを。それは世界の道理であり、貴様らが今考えているほど命というものは決して軽くもなく、ましてや重くもない。そして、そのことをどうこう言える者はこの世には居ないのだ、と」

しかし、ガラドの諭しを掻き消さんとするかの如く、激昂の砲声が上がる。
【そんな、そんな詰まらない一般論で、我らの訴えを煙に巻こうというのか！？】
「だが正論だ。さらに言うなら、お前達こそ道理に合わぬことを言っているが？」
【な、何だと！？】
やれやれ、とガラドは溜息をつく。それを小休憩として、
「……まず第一に、お前達の両親が殺されたとする証拠がない。ギルドナイツは確かな事実の下でしか動かない。二つ、仮にグラビモスの密猟が他の人間によって成されたとしても、それは我ら人間の本意ではない。
そして、三つ。お前達の両親は確かに戦って、そして敗れ、狩られた。この事実はどう足掻いても変わらない。それを後からどうこうと喚くのは――」
一息。
「……敗れた者への、――侮辱ではないのか？」
【……う、くっ……！】
ガリ、と岩と岩が擦れる硬質な音が聞こえた。
『黒』の喰いしばった歯が、軋みの音を立てながら横に滑る。
しかし、反論の言葉は生まれることはなかった。
ややあってから、
【……な、らば――】
搾り出すような呻きが、『黒』から漏れた。
【――私達は、殺された父や、母のことを、忘れねばならない、とでも？】
「そうではない。そうである訳がない」
【ならば、一体私達は、どうすれば――】
「――誇れば良い」
命とは、価値観だ。

ならば、考え方や想いによって、その在り方は変わっていく。
「感謝すれば良い。怒れば良い。謝れば良い。懐かしめば良い。笑えば良い。泣けば良い。学べば良い。支えにすれば良い。救いにすれば良い。戒めにすれば良い。
そうでなければ、――君達の両親は、何の為に死なねばならなかったのか？」
【……っ……】
「少なくとも、君達はここにこうやって生きている。君達の両親は、自らの命を犠牲にする覚悟で死力を振り絞り、漸く君達の命を後世に遺した。それが本当の等価だ。
それは命を物と交換したり、先程の『黒』君のように、敗北の責の重圧に負けて易々と生きる責任を放り出した上、自己犠牲というナルティシズムに浸ることでは決して、ない」
言葉の余韻が、染み込むように消えていく。
そして、容赦なく重く冷たい沈黙が流れ込んでくる。それを身に感じつつ、
「――さて、交渉を続けようか」
「だ、旦那さん！」
突然声を上げたのは、隣に座るアーサーだ。
見れば、その小さな顔は僅かに俯き、明らかに気勢が削がれている。
「も、もうさ、いいんじゃない？　普通に？訳？を話して帰って貰おうよ。だってほら、言えば二人ともきっと分かってくれるよ、ね？　だから……」
「まだだ」
一喝。
冷たく言い放つその一言に、アーサーは怯えたように竦む。
「で、でも……」
「でも？」
まるで泣く寸前のように僅かに息の上がったアーサーを、ガラド

は見据え。
つっかえつっかえの言葉の、その先を促す。
「これ、以上は……」
「……なんだ？」
すると根負けしたかのように、アーサーは弱弱しく本音を漏らした。
「……ボクも、辛いよ……！」

●

もうすっかり冷めてしまった汁粉をちびちびと啜りながら、クリスタルは呟く。
渡した資料を呼んでいる隣の主人にも、誰にとも向けた言葉でもない。
「アーサーは、幸せ者です」
「……そうかね？　あんなへそ曲がりを相手にして、幸せと言えるのかね？」
「是。勿論です。……アーサーはあんな甘ちゃんのちんちくりんで、恐らく今もそうなのでしょうが――」
ず、と僅かに汁粉を啜る音がする。
「――自分にないものを持ったパートナーがいる、ということは、多分に幸せなことなのではないかと、私はそう判断します」
ガスマスクの中で、歳不相応の線の細い顔が歪む。勿論、笑みの形に。
……ギルド特製汁粉・マタタビ風味――、不味かったが、中々役に立つではないかね。
「どうぞ、とはもう言わないのかね？」
「是。これは独り言なので。――どうぞ」
「――そうだったかね？　これは失礼、と」

●

頭に、何かが置かれるような感触がした。
見れば、置かれているのは大きな手のひら。その持ち主は、
「旦那、さん……？」
「相変わらず甘いな、お前は……！」
言うや、間髪入れずにガラドは迷いなくアーサーの頭をワシワシと乱暴に撫でてやったりくすぐってやったり頬ずりしたりし足りないのでもう一巡した。
「え、うわ！？　な、何！？　何だよ旦那さん！　ちょ、見られる！　見られるよ！？」
「大丈夫、大丈夫だアーサー、――真っ暗だからな……！」
「何が大丈夫なんだよ――！？」
満足すると、ガラドはアーサーを元に戻し、告げた。
「勿論全てが、だ」
「……え？」
一息。
ガラドはアーサーを見据えながら、言った。
「俺も。アーサー、お前も。そしてこのグラビモス達も。ついでに村も。全て大丈夫だ。だからアーサー、お前はお前のままで、時折甘いことを抜かしながらついて来い。
そうすれば、俺は俺のままで、――悪者の卑怯者の半端者のままで居られる」
「い、いいの？　ボクはこんなに甘いし、未熟者なのに？」
アーサーの小さな叫びは、柔らかな主人の笑みによって砕かれていく。
その最後の一片は、やはり主人の一言によって砕かれ、粉になった。
「――それが、俺の救いになる。お前のその甘さ、未熟さが、な」
……だから、今は。今は精々被害者ヅラでもして、俺の台詞を言

わされていれば良い。
ガラドにその台詞を言わせるほど、アーサーは未熟ではなかった。
く、と顎を上向けるその横顔に、迷いはない。
ならば、と。笑みを内に秘め、ガラドは優しい否定を述べ続ける。
半端者という、仮初めの世界の代弁者としての矜持を以って。

13話　馴れ合いの諍い

何か、互いに決まりの悪い沈黙が漂っていた。
それは険悪、という目に見えぬ圧力。確実に双方の意気を阻害しているように思えた。
……だが、これも必要なプロセスだ。
ガラドは、遅々としながらもしかし確実に、この交渉の目的が果たされていることを感じていた。それが確かならば、他に何も言うことはない。
ただ、次のプロセスに進むには、切り口となるきっかけが必要だ。
……先までの俺なら、ここで攻めあぐねるだろうな。
しかし今は、その適材がいる。
「なんか、空気が湿っぽくなっちゃったねー……」
よくやった、と声に出さずにガラドはアーサーを褒めた。
こういう場面では、傍観者の立場は非常に有用だ。当事者の間の空気に違和感なく一石を投じることのできる傍観者は、潤滑剤として作用する。
【それは誰のせいだ、と？】
敵意の視線と共に寄越された問いも、今は涼しいものだ。
「強いて言うなら気候のせいだな。言うまでもなく、ここら一帯は湿気に満ちている。夜ともなれば尚更だ。……何かおかしかっただろうか『白』君？　そうであれば訂正するが」
【――い、いえ。別に、本気で言っているのであればいいので……】
「？　おかしな奴だな」
【……妹よ、あの男の言うことを真面目に聞くと耳が腐るぞ】
【そ、そうですのね……】
他愛もないやり取りをいくつか交わし、空気が解れてきた。
「ふふ……」
それを確かめ、ガラドは次の一手を打ちこんだ。それは、

「そこで、いい話がある」
【……何？】
流れを、変える一手。
「……どうした？　俺の話を真面目に聞くと耳が腐るのでは？」
【……真面目に聞かなければいいだけの話だ】
「それもそうだな、では、話半分に聞いてくれ」
畳み掛ける。
言葉を重ねることで、流れをこちらに引き寄せる。
「そもそもの原因が、違法な？密猟？であることも鑑みるに、然るべき賠償をするべきであるとギルドナイトの見地からも判断されることだろう。そして、以下の状況を総合すると、別の方策を採ることも出来る」
【その、道とは？】
漸く気配を察したのか。
怯えの色を帯びていた『白』の声色に、明るい色彩が混じり始めたことが分かる。
それを見ても、ガラドの表情は変わらない。しかし、その言葉は告げられた。
「――貸与権限、というものがある」
【貸与……？】
是、と繋ぎを入れる。
「ギルドナイツは、担当地域の生態管理をもその責務とする。その権限のうちならば、人里ではない区域について、色々と勝手が利くのだ。例えば――植林、灌漑、駆除、そして、野生動物の保護区域の設定、などだが――」
『黒』はその言葉を吟味するように、口の中で転がすように呟く。
【保護、区域……。その体をとって、私達に土地を貸与する、と……？】
「是。まあ貸与とはいっても、期間は特に決められてはいない。当地ギルドナイツの判断による、ということだ。逆に言えば、都合が

悪くなれば即刻、立ち退き要求に応えなければならない、ということにはなるが――」
ガラドは一拍の間を置いた。そして、
「どうだ？　――君達にとって決して悪い話ではないと思うが？」

●

【……ふん、成程な】
『黒』は何かを確認するように言った。
それは頷きの動きを伴う言葉で、
【野生動物扱いにされるのは気に入らんが、確かに、その話を聞く限りでは確かに私達に損はない。私達はただ、住む場所が有ればいい。他の動物を狩るということもないから、人間からしても、自分たちを襲う危険も限りなく少ない、ということか】
『白』は納得の声色で言った。
その言葉尻にも、先程までの揺らぎはない。
【これならば、人間ではない飛龍相手にも納得のいく、分かりやすい賠償というところなのですの？　成程、よく考えられた制度ですのね】
「そうだろう？　ならば、これを鑑みた上で、君達の返答を求める」
ガラドは穏やかな笑みとともに、答えを要求する。
そしてそれに応える二頭のグラビモスは、快活な声で、
【ああ、それは勿論、】
【決まってますの！　応えは、】
前と後ろ、『黒』と『白』の両方から溜めの息吸いの音が聞こえ、
「――答えは？」
迷いなく、放つ。
【――――却下だ】

●

合わせた声は、明瞭に響き渡った。
この場にいる誰もが聞き漏らすことなどない、それほどに。しかし、
「……それは、何故だ？」
凍った微笑のまま、ガラドは再度問うた。底冷えのする声で、
「もう一度言う。決して悪い話ではない、と」
【ではこちらももう一度言おう、――却下だ、と】
その声に、臆しの色はない。むしろ、自信に満ちている。
「それは、――どうして？」
……旦那さんも、演技派だなあ。
アーサーは、僅かな安堵を感じつつ、問いを投げかけた。
「どうして、この話が不利益だと、そう感じたの？」
【説明が、要りますの？】
いかにもわざとらしく、『白』は溜め息など吐いて見せてから、
【よく考えられた制度ですの。きっと、人間の中でも利口な者がお作りになったのですのね。――反吐が出ますの】
全くだ、と声が聞こえる。
【先ず、最初に気づかなければならない。――旨すぎる、と】
呆れたように、『黒』は続ける。
【――仮に、そう。仮に、だ】
もし仮に、『黒』達が男の言う?貸与?の名の下で保護された場合。
【私達は、そこから一生死ぬまで抱え続けることになるのだろうな。圧倒的な立場上の不利と、――致命的な負債を】
保護される、とはどういうことか。
それは全く害のないことが前提の、可愛らしい愛玩動物を愛でるかのような扱いだ。
一見幸せのようで、しかし一片の自由もない。一度でも飼い主の手に噛みつけば、支配者の顰蹙を買うようなことがあれば、即刻駆

除の対象に入れられる。
あまりに一方的な、絶対的な力関係。
例え、この二頭が何らの問題も起こさなかった場合でも、それは変わらない。
二頭の飛龍を、ヒトの管轄内の土地で監視、管理する。
それはつまり、ヒトによる実質的な支配に他ならない。
あらゆる事後交渉は、自分達の住処との引き換えになる。即ち、
……住まわせてやる代わりに、我らの要求を呑め、と。
得た土地も、常に何かと天秤に掛けざるを得なくなり、更には、交渉を拒否すれば即ち、再び流浪の身となることを余儀なくされる。
それで済めばまだ良い方だ。最悪なのは、
【?貸与?の名の下に、代価を請求されることですの……!】
そうなれば、後に待ち受けるのは実力行使であろう。二頭のグラビモスが被害なく狩れる程の規模の討伐隊が直ぐに派遣され、逃げ場もない。
終に辿るのは、親と同じ運命だ。
そこまでを確信した上で、『黒』は反駁した。
【このシステムは、うすら寒い欺瞞に包み隠された、搾取のシステムに他ならない!】
そして示し合わせたかの如く『白』は畳み掛ける。
【そのような提案、よくも出来るものですのね? ――恥を知りなさいの】
「はっ、手厳しいものだな」
諸手を挙げて、降参の意をガラドは表した。
その顔には、もう冷ややかな色は無く、面白がるような微笑があるのみだ。
「人の手は借りない、と。それが君達の総意であると、そういうことか?」
【与えられる利益などいらない。自らの手で得た物でなければ。――ましてヒトなどに与えられた施しなど、受けよう筈もない。そう

いうことだ】
「それらがすべて、君たちの憶測にすぎず、誤りであるかもしれないのに、か？」
【それでも後悔はしませんの。自ら得ようとして、得られた結果ですもの】
成程、とガラドは頷いた。
「成程。成程成程――、」
幾度も繰り返し、
「くくっ……」
【ふん、何が可笑しい？　貴様は今、私達から一本取られたのだぞ？】
「何、この交渉においてのコンセンサスを取り合っただけだ。調子に乗るのは未だ早い」
【なら、私達は勝手に、これで五分ということにしておきますの】
「ああ、――それで構わん」
ああ、とガラドは頷きを返す。
勝ち誇ったように、『黒』は吠えた。
【ふ、貴様は先程、私達に甘さを思い知らすと言ったが、どうやら私達は貴様の言うほど甘くは無いようだぞ？　これから一体、どうやって私達を叩き潰すというのだ？】
「こんなもの、甘さの内に入らんがな。だがまあ、」
一息。
「俺は君達の甘えを一つ叩き潰し、君達は俺達人間の甘さを一つ叩き潰した。だが――」
【だが、何ですの？】
ここまで全てが順調。
「――だが、次で最後だ」
そして結果は総て重畳。
文句無しの満点だ。贔屓目もあるが、
「今から一つ。そう、たった一つだけ問う。それに正しく答えて見

せろ。嘘を吐くことなく、ただ愚直に、馬鹿正直に、だ。制限時間は三十秒」

……だが、君達は自らの甘さを叩き潰すことは出来るか？

「問いは、――今、君たちが何故ここにいるのか、だ」

１４話　甘美な痛み

【……何故、我々がここにいるか、だと？】
男が問うた、その疑問は哲学的ですらあった。
何故、此処に立っているのか。
どうとでも、答えられる。
しかし、どれを応えればよいのか、分からない。
多岐に渡る答えの中の、一体どれを、目の前の男は欲しているのか。
「二十五秒――」
それを、絞らなければならない。そのために、『黒』は一石を投じた。
【何を言うかと思えば、さも貴様がこの土地の所有者であるかのような口振りだな。思い上がりも甚だしい！　別に誰が此処に居たところで、人にそれを責める権利はないはず、】
「問いには正確に答えろ。それが出来ぬなら、沈黙せよ」
な、と面食らったのはやはり『黒』だ。
「もう一度問おう。――何故、俺達は、ここにいるのだろうな」
……ヒントは与えないということか。
『黒』は推察する。
？俺達？と、確かに男は言っていた。
ならば、男が聞きたいのは、
【私達が此処に居るのは、自らの力で、自らの未来を得る為だ。そして、貴様が此処に居る理由は、その邪魔をする為だ。違うか？】
――私たちの、覚悟か？
放つ言葉には、少々の毒を載せて。
【つまり私達が此処に居合わせたのは、戦う為だ。己が得たい物を己が力で得る為だ！】
違うか？　と逆に問いかける。しかし答えはなく、『黒』はそれを促しと取った。

【閉じられた世界に、二つ以上の種族が存在する以上、戦いは必然だ。否、生物が複数存在する以上、諍いというものは起こる。それは一体何を表すか？】
唯一自由の利く首から上を僅か起こして、『黒』は男を睨みつける。
【――相互理解、などというものは幻想に過ぎぬということだ】
一息。
【戦わなければ、奪われる！　戦って奪わねば、何も得ることは出来ない！　馴れ合いで例え何かを得た気になったとしても、それはまやかしに過ぎないッ！】
間髪いれず、捲くし立てた言葉。それは、短いながらも生を歩んできた彼女の叫び。
望まぬ戦いの渦中に身を置かねばならない、その苦しみを知るものの言葉だ。
【私達は、戦い、己が手で自らの未来を勝ち取るために此処に来た！　いくら貴様が我らの邪魔をしようとも、我らは我らの力で必ず貴様を排除する！
そしていつか必ず、誰からの文句も言われない安住の地を手に入れて見せる！】
……それが我らのやり方だ。そして、
【――それが我らの、現実だ……！】

●

暗闇の中、叫びの意味は通じずとも、『黒』はその感情の奔流を叩き付ける。
感情で、圧し潰すように。
それは行き場のない悲しみの嘆きを燃料にした、想いの爆薬。今を置いて他にはないと言わんばかりに今まで受けた理不尽を全て吐き出す。

――綺麗事をほざくな、と。
『黒』は、戦い続けてきた。たった一人の肉親を護るために。
戦わなければ、いつかその宝物までも、奪われてしまう。
そしてこれからも、彼女は戦い続けるのだろう。今まで受けた、どうにもならない理不尽を誰かに叩き付けるように、叫び続けるのだろう。
彼女は、それしか方法を知らない。
【交渉など、それこそ甘えではないか。少なくとも、我らの戦ってきた相手には話し合いで解決しようなどと甘ったれた言葉を吐いてくる輩はいなかった！】
戦い続けることでしか、己を守る方法を知らない。ならば、戦い続けるほかにない。
一見独りよがりな、しかし背水必死の理論。
しかしその事実に、偽りはない。そして、
【この覚悟すらも、貴様は『甘さ』だと、間違いであると、一笑に付すつもりか？】
答えはない。
しかし、引き下がることはなく、『黒』は、問い詰めた。
【答えろ！　そして提示できるものならやってみろ！　これから我らが戦い続けなくとも良く、しかも安穏を得られる、その『大人のやり方』とやらをな！】
しかしガラドは、動かなかった。
【……？】
座り、腕を組む姿勢が、こちらを見据える顔が暗闇の中おぼろげに浮かんで見える。
その今まで一片も変わらなかった表情が、口元だけ、意志ある動きを見せた。
それは、ほんの一言。
「残り十五秒――――」
【な……！？】

どこまでも無感動の、カウントダウンであった。

●

【……何故、私たちがここにいるか、ですの……？】

『白』の姉、『黒』の応えた回答は、不正解であったということか。

現に、ガラドと名乗った男は、たった一言のみ発した後は沈黙を保っている。

あと十五秒。

そのカウントダウンが何を意味するのかは分からない。一体何の猶予であるのかも。

ともあれ、先ずは行動しよう、と。

憤り、その体を震わせている『黒』に代わり、口を開いたのは『白』。

【今、私たちが何故ここにいるか。私は額面通りに取りますの。――それは、】

残り十五秒を無駄にしないように。

【私は貴方にお話しますの。包み隠しのない、私たちの過去を】

●

「……過去？」

アーサーは問い返す。

「……過去って、どういうこと？　君たちは、密猟者に親龍を殺されて、それを目撃して、今まで自分たちの住処となる場所を探しながら、やっとここまで辿り着いた」

可愛らしく、無邪気な問いに、『白』は優しく微笑む。

しかし時として、悪意無き無知と無邪気は残酷だ。

【……私達が、初めから二人であったと。貴方は思いますの？】

「えっ……？」
……だから、この位は言ってもいいですのね？
『白』は、告げる。決して消えようも無い、無残に刻まれた記憶の爪痕を。
どこまでも無邪気に、自慢げに手術跡を晒す子供の様に。
【……最初は、十頭もいましたの。敬愛する我が両親の、その血肉を分けた同朋が】
その記憶を、一つ一つ引き出しては噛み締め、痛みに似た感情を得る。
ちくり。
【長の兄は、真っ先に死にましたの。最も体も大きく、責任感が強くて、――其のせいで】
ちくり。
【最も小さかった、皆に愛された妹は、五番目に死んでしまいましたの。初めて横断したジャングルで、熱病に侵されましたの】
ちくり。
【まあ、それはしょうがなかったですの。最も体が弱い子でしたから……。でも】
自嘲の笑みが零れる。
無我夢中で、今までろくに思い返しもしなかった、同胞たちの最期。それらを思い返すことはとても辛いが、その傷を他者に、感傷の発露としてぶつけることはこんなにも。
【暫く食事と『熱』を摂っていなかったので、こう言いだすものが居たのですの。それはやんちゃな六男で、悪戯好きで、でも憎めない。そんな子が……】
……こんなにも、甘美なものでしたの？
【――？食べちゃおうぜ？と。彼は躊躇いながらも、そう言いましたの】
沈黙すらもが、心地好い。
それは子供同士が、何処からともなく自らの不幸自慢をしてしま

うような感傷。
辛いのに、痛いのに、それが心地好くて。
自分が不幸で、それを同情してくれるのが、何より嬉しくて。
【結局、その末妹は丁重に葬りましたの。四匹もの兄が戦いで死に、皆を守る役が回ってきたばかりだったお姉様の決定で。しかし、そのせいで新たに、――その六男が飢えて死にましたの。きっと、あの提案をした時も辛かったのだと思いますの……】
……嗚呼、痛いのに、気持ちが好い。
矛盾した感傷を『白』は得ながら、ただその事実だけを、告げ続ける。
【飢えで死に、逃げ遅れた者が死に、しかし結局生き残って、この天国のような地を見つけた時は、思わず疲れた体のことも忘れて喜びましたの。直ぐにお姉様に窘められてしまいましたけれど。そして――】
「……ボクたちと、出会った？」
ええ、と肯定。
【でも、不思議と辛くはありませんでしたの。これで最後だ、この戦いが終われば、って。その最後の戦いが、こんなことになるなどとは思いもしなかったですけれど】
どうですの？　と『白』は問いかける。言うまでもなく、目の前の男に。
ギルドナイトであり、臨時人間代表であるガラドに、だ。
【貴方は最初、？私たちは何かを隠している？と言って、私たちの過去を知ろうとしましたの。ですから私は、貴方に敬意を払い、――真実をお話ししましたの】
……これでも、貴方は私達を『甘い』と評すことは出来るのですの？
悲痛なる『白』の訴え。それは余りにも幼い叫びであった。
ただ何の見返りもなく、ただ相手の気勢を挫くだけの、不幸自慢。
その嘆きは、見方によれば死者を出しにして同情を買った、とも

言えるだろう。
だが、それを一体誰が指摘できるのか？
不謹慎だと、一体誰が注意し得るのか？
ましてやこれは、粉う事なき真実。掛け値なしの事実。
それを責めることは、誰にも出来やしない。出来るとしたら、余程の冷血漢だ。
感傷という名の鋭利なナイフが、静かに刺さってくる。
そのナイフには、柄がない。刃そのものとも言えるナイフで、握るだけで血が滴る。
しかも触れても、払おうとしても、こちらも必ず傷が残る程の鋭利な刃物だ。
それを同情という鞘で包んで誤魔化しても、そのナイフの存在は消すことは出来ない。
……ならば、どうするのですの！？
【――これで、こちらには隠すことは一つも御座いませんの。さて、】
底冷えのする被虐的な笑みを湛え、『白』は詰め寄った。
感傷のナイフを握りしめ、腰溜めにして。
【――私たちの現実は、貴方の問いに、応えられましたの？】

●

「――――旦那さん！」
「先から喧しいぞアーサー。俺はきちんと聞いているが？」
「そ、そうじゃないよっ！」
……一体、どうするの！？
『黒』と『白』の訴えは、あくまで感情に徹するものだった。
しかも今度は、全てが掛け値なしの『真実』であり、『事実』であり、『現実』だ。
反論不可能。

二人ともがこちらの『同情』しか求めていない。そしてその理解を。
しかし、
……この論を認めてしまったら、こっちはもう何も言えない。
ギルドナイツは、あくまで龍と人の調停者だ。
その手段はアイルー族の翻訳頼みの交渉。その範疇を超えてしまえば、残るは武力による制裁行動のみだ。そして、
……この二人は、龍と人との調停という、その行為そのものを潰しにかかってきた。
『黒』は交渉の意義を直接的に否定し。
『白』は交渉の正当性を間接的に揺らがせてきた。それはつまり、
……交渉では、誰も幸せになんかなれない、って……？
【理屈では、理は其方に有るかも知れないですの。しかし、私たちの感情の方が強い！】
【半端者の貴様は、それを見て尚我らを否定し、見離し、拒否できるのか？】
そう言外に訴え、土地を譲渡することを強制する。理論による拒絶の正当性を揺るがす。
拒絶すれば、半端者であるはずのギルドナイツは、所詮人の味方だと。
受諾すれば、守るべき人里を脅かす存在を許したとして、龍の味方だと。
……この流れは、マズいよ。
どう答えても、対等中立のギルドナイツの存在意義は崩される。
それは即ち、龍と人は共存できないと、その証明をしてしまうことになる。
どちらかはいずれ滅びると、そう明言することと同義になってしまう。
――それでもいいの！？　旦那さんは、
「それでも旦那さんは、――応えられるの……！？」

……ああ、応えて見せるさ。
『黒』の覚悟にも。
『白』の想いにも。
「さて、タイムアップだ。最終テスト終了、二人の成績は――」
人にも、
「『黒』君、――４０点。『白』君、惜しかったが――５８点だな」
【なッ……！？】
龍にも。
【い、一体それに、何の意味があるというのですの！？】
須らく等しい救済を。それが、
「つまり、君たちはギリギリで落第だ。君たちは最後の問いに残念ながら、正しく答えられなかった。だから――、」
我ら、ギルドナイツの矜持だ。
「――これから最後の『甘さ』の、応え合わせをしよう」

15話　始まりの終わり

ガラドは、問いかける。
「何故、君たちが此処に居るのか？」
座の姿勢を崩し、ゆっくりと起立しながら、
「それは、至極まっとうな問いだ。――本人以外からすれば。そして、至極簡単な答えだ。俺達がこうやって何気なく問うのと同じ位には、な」
見据え、
「それは、些細な疑問でしかない。そして、誰もが恐らく心に過りながら、しかし口に出すには憚られる。そのような問いだったのだが」
そして、
「どうして気付かない？」
【だから、一体何が……】
「……そうか、隠していないのならまあ良しだ。では、もっと分かりやすく行こう」
仕方ない、と肩を竦めて、ガラドは続けた。
「ヒトの常識から、教えてやる」
【そんなもの、知りたいとも思わない！】
「ではこれは二人言だ。――アーサー、一つ確かめたいことがある」
そう言うと、ガラドは不用心にも目の前の巨龍から目線を外し、問う。
「普通、グラビモスという種族は、……火山に棲むものではなかっただろうか」
そして付け加えた。それは不敵な笑みを伴うもので、
「もしや、俺の思い違いだったか？　――ここまで全て通訳して伝えてくれ、アーサー」

応え合わせをしようと、ガラドは言った。
しかしながらそれは余りにも一方的なもので、問う是非もなかった。
しかしまた、ガラドには迷いも、揺らぎもない。
ただそこに、一人と一匹の淡々とした言葉が響くのみだ。
「何故、君達は此処に居るのか？　答えは簡単、――此処に来たから、だ。……しかし、それでは十分な回答とは言えない。何故ならそこにまた、新たな疑問が生まれるから」
【……一体何を、賢しらに……！】
「相槌をありがとう、『黒』君。では、その疑問だが……」
【それが……何故、？此処に来たか？、ですの？】
「――正解だ、『白』君。どちらかといえば君のほうが冷静だな」
【……？敵？に褒められても、ちっとも嬉しくないですの】
「敵、ではない。？交渉相手？だ。――これは非常に繊細な差異だ、間違えるな」
【……ふん、ですの】
続けるぞ、とガラドは前置く。
直接に言語は伝わらなくとも、向ける言葉は前方の二頭。
その声は、揺らぐことはない。
それが人間の、ギルドナイツの矜持であると、誠意であると。
それだけしか伝えることは出来ないから。だからガラドはただ態度を示す。
それを知るアーサーは、
……責任重大だあ。
「続けるよ、『黒』さん、『白』さん」
ただひたすらに、第三者として。
懸命に前だけを向いて、他者の言葉を自分の言葉で伝え続ける。
「交渉を遂行するためには、ボク達の間の認識の誤差を少しでも減

らさなくちゃいけない。でないと、正しく情報の整理ができないから。――すると、やっぱり足りないんだよ」
【……足りない？　一体、何が足りないと言うのだ？】
「……情報のピース、って言ったらいいかな？　とにかく、キミ達の事実と情報は、色んなことをこの交渉で教えてもらったけど、それでも未だ、足りないんだ」
ふう、と一息を入れる。その間だけ、通訳に空白が出来た。
しかし、隣の主は何も言わない。
……有り難う。こんなボクを、足りないボクを、――信用してくれて。
「キミ達の情報には、空白がある」
……だからボクは戦える。自分だけの、この戦場で。
「キミ達の情報は、――矛盾してるんだ。その矛盾に、キミ達は応えられなかった」
……言うよ。伝えていくよ。ボクの言葉で。ボクの意志で。
「それを今からボク達が、埋めていくよ。キミ達が応えられなかった、その矛盾に、キミ達の代わりに、ボク達なりに」
……でも、
「――これは、ペナルティーだよ」
……旦那さんは、本当にそれでもいいの？

●

一つ。
ガラドは、挙げた右手の、その指を立てた。そして、
「――当ててやろう」
言うぞ、と。
今から言うぞ、と。
そうやって前置くあたりが、ガラドなりの手加減だ。
先に言っておけば、痛い所を穿たれないよう、そこを守るだろう。

守れないならば、打たれても我慢できるように、覚悟を決めるだろう。
厳しい現実は、それさえも許さない。
ただ叩きのめすのに、予告などしない。全力で、不意を突き、ただ殴る。
だからこそ、ガラドは前置く。
「君達が、何故此処に居るのか。――その答えを、代わりに応えてやろう」
……今から、穿つぞ。
今から言うことは、目の前の二頭にとって致命傷ともなり得るフィニッシュブローだ。
誰が何と言おうとも、これで決まる。
それは不可避。
そして不可護。
その一撃を、いつ打つか、どこに打つかまで予告した後、そして放つ。
……矛盾、しているか？
守れないのに、護ってみろと言い。
躱せないのに、避けてみろと言う。
これほどに甘く、そして残酷な、――手加減があるか。
……可笑しいな。
ガラドは微笑む。
笑みながら、挙げた右手の人差し指を下に向け、告げた。
「君達がこの地に辿り着いたその時。君達はきっと思ったことだろう。――ここは何という天国だろう、とな」
……これほどに手を尽くしても、考え抜いても、結局現実はどうにもならないのだ。
「流れ落ちる溶岩が、甘露に見えた。そこらじゅうに露出した、色とりどりの鉱石群はさながら、お伽噺のお菓子の家だ。まるで夢の中にいるようだったろう――……」

そう言いながら、ガラドは喉を鳴らして笑む。
……嗚呼、オカしい。
そしてガラドは笑みながら、手加減しながら、前置きながら。ガラドはさながら大人が子供にするそれの如く、無遠慮に二頭の未熟者に手を伸ばし、
「――それが、裏切られるまでは」
【……ッ！！？】
全力で、フィニッシュブローを見舞うのだ。

●

「……甘露だと思っていた、上質な溶岩に口をつけたか？」
打つ。
「旅の疲れをいやそうと、天然のスパリゾートにその身を浸けたか？」
穿つ。
「空いた小腹を癒そうと、輝く岩肌に歯を立ててみたか？」
抉る。
「そして得られたのは、喜びか？　希望か？　満足か？　――違うな」
言葉で、抉る。
「――絶望だ。違うか？」
【……くっ……！】
そして、笑む。
「ここの溶岩は、熱かったか？」
笑み、打つ。
「子供の君達には、此処の火山サウナや溶岩風呂は早過ぎたか？」
笑み、穿つ。
「綺麗な宝石たちは、本当に甘い金平糖だったか？」
笑み、抉る。そして、笑み抉る。

笑みまでもが、穿ちの動きを持って抉り打たれる。
「希望のどれもが君達を拒絶し、見捨て、絶望へと変わった後、しかし君達にはたった二つの希望が残った。歯を毀し、その身を焼いてまで得た動力（エネルギー）と――」
く、と絞った笑みが溢れた。
それは決して喜悦の笑みでも、優越の嘲りでもない。
自嘲の、諦めをも伴う嘆息だ。
「自分たちは、何も火山でしか生きることが出来ない訳ではない。熱は摂取できなくとも、『食べられる』鉱石さえ有れば死ぬことはないのだ。それならば、と――」
甘いな、とガラドは笑った。
何度目かわからない、交渉相手の二頭のグラビモスの歯軋りの音を聞きながら。
……オカしいだろう、本当に。
「『ピュアクリスタル』などの水晶質の鉱床や、一ランク落ちる鉱石の岩盤を求めて沼地に住むことに決めた。沼地なら大丈夫、そこでゆっくりと体力をつけ、熱を摂取するときだけ火山に出向いて、溶岩の熱で参ってしまう前に棲み処に戻ろう、と」
……本当に。世界というものは、オカしくて仕方がない。
ガラドは軽く両手を横に開いて、受け入れのポーズをとり、
「どうした？　これは？応え合わせ？だ。俺の答えが間違っていたら、君達もそれに応えて、正しい？応え？にしていこうではないか。――どうだろうか？」
……嗚呼、おかしい。おかしくて、仕方がない――。
「……異論がなければ、この事実が正であると見做す」
返答は、なかった。
ただ、息の詰まるような沈黙の空白が無為に生じるのみだ。
「――是」
両手を下して、一つ嘆息。
この二頭のグラビモスは、ガラドが言った通りの経過を歩んで来

たということだ。
「これが、君達の最後の甘さだ」
【――何故ですの？】
不意に、疑問が飛んだ。
ガラドはその声の方へ、顔を向けた。
「何故、とは？　『白』君」
【……何故、私達が自分達の力で、自分達の意志で、自分達の棲み処を見つけた、それだけのことを以てしてそれでも、？甘い？と――、そう評されなければなりませんの？
妥協したことが悪いことですの？　それとも貴方のようなこの地の所有者と勝手に称するような者に、お伺いでも立てろと言うつもりですの！？】
わかりませんの、と『白』は言う。
【だって、そんなの、――おかしいじゃないですの！？】
……ああ、おかしいな。
おかしくて可笑しいから、笑いが止まらない。
【……一体、何がオカしいのですの？】
「君が言ったではないか。？そんなのおかしい？と。おかしいから、可笑しいのだ」
【……ふざけるのもいい加減にしろ！】
そこにさらに、『黒』の激昂の怒号が加わる。
【貴様が私達を？甘い？と評し、愚弄するからにはその根拠があるのだろう！？　我らは貴様にその根拠を明らかにすることを、今ここに要求する！】
「是。その要求、呑もう」
ガラドは前置く。
そして、穿ちの言葉を放った。
「君達は甘い。だからこの沼地に易々と踏み込んだ。――それこそが根拠だ」

●

「君達は、認めたな？　火山よりは沼地のほうが棲み易いのだと、確かにそう考えたと。だが、敢えて問おう、――何故そう考えたのか、と」

【――今問うているのは私だ！】

「ならば代わりに応えよう。それは君達が、未熟だからだ」

【貴様……！　いい加減に――、】

「君達を、我らがこの地に留まらせぬようにしているのは、何故だ？」

それは、と『黒』が言葉を挟もうとするも、ガラドはそれを遮り、続けた。

「君達を、極力傷つけぬように無力化したのは、何故だと思う？」

それは、と『白』が反駁するも、ガラドは無視し、さらに続けた。

「『黒』君の傷を、手当てして密閉保護したのは何故だろうな？」

二頭から、反駁の声は上がらない。

「火山に行って分っただろうが、他の生物が居ないことに気づいたか？　ならばこの沼地にも、生物が居ないことには？　何故居ないのか、とは考えなかったのか？

しかし、今問われているのは俺だ。代わりに応えてやろう――」

そして言う。

「……君達は、この地には棲むことは出来ない。それは紛れもない真実で、現実だ」

●

【……棲むことが、出来ない？】

茫然。

その一語、そのものとも言える呟きが漏れた。

【ど、どういうことですの！？】

「説明しよう」
しかしガラドの口調は、未だ揺らぎを見せないまま、
「此処の地は、所謂『G級』に認定されている。……アーサー、通訳可能か？」
「……えっと。キミ達は、土地と、其処に生息する動植物の関係については知ってる？」
茫然とする『黒』に、アーサーは声をかけた。
しかし、戸惑いを隠せない『黒』は最早、話を聞くことしか出来ない。
【い、いや……】
「この世界には、先ず自然があって、自然によって生き物は生かされる。草食動物は自然の恵みを得て暮らし、肉食動物はその草食動物を食べて生きる。全ての根幹には先ず、『自然』が在るんだ」
与えられた情報を、鵜呑みにするしかない。
【私達は、自然に生かされている……？】
『白』の繰り返しを、アーサーは是、と肯定した。
「そして、自然は選別を行うんだ。自分の『土地』としての格、っていうべきかな。それに見合った居住者のみを生かし、見合わない侵入者を排除しようとする。つまり――、」
一息。
「この地は、その『格』が最も高いとされてる。それをボク達は『G級』と呼んでるんだ」
【ちょ、ちょっと待ってくれ！】
『黒』は、肺腑から空気を絞るように、呻く。
【確かに、私達は火山に入ったとき、ここでは到底生きることが出来ないと感じた。しかし、今、此処で、確かに私達は生きていられているではないか！？】
「それが未熟だというのだ、『黒』君」
な、と『黒』がたじろぐ。
しかし、あくまで淡々と。

ガラドは告げる。
「君達が此処で生きていくということと、この地に取り殺されるということは同義だ。こうしている間にも、君の命は危険に脅かされている」
【一体、何に、脅かされていると!?】
ガラドは不意に右足を振り上げ、振り下ろす。
足下のぬかるんだ地面の飛沫が舞い上がる。その動きの勢いに乗せてガラドは言った。
「――破傷風だ」

●

不意の動きに、群れていた光蟲の群れが散り、一瞬ガラドの姿が闇に飲まれた。
しかし徐々に空いた空間を埋めるように新たな蟲が集まり、少しづつガラドの陰影を浮かび上がらせていく。
さながら、闇から姿を現した漆黒の悪魔のそれ。
彼の名は、ガラド・ドレッドルート。
喜悦を司る、恐怖の化身たる男だ。
「その目に見えぬ悪魔は、どんな小さな傷をも見逃さず、生きとし生けるものに侵入し、その命を食らう恐ろしい病だ。この沼地は、特にその病原菌が活動しやすい環境だ」
その顔は、既に笑みのそれではない。
「――気づくのは、既に手遅れになってからだ」
怒りの色濃く、しかし怒りを向ける鉾先は。
「一度かかったが最後、成人でも生存率は五割、幼児だと一割を切る」
まるで感情の爆発を向ける先を見失ったかのような、不条理な憤怒。
「そんな悪魔が、君達を狙っているぞ。この沼地に居る限り、」

ガラドは再度指差す。その指は真っ直ぐに『黒』を射抜き、
「――その傷が治らぬ限り」
そしてその指を二本に増やした。
「そして君達が、自分たちの不幸を振り翳し、意地を張り続ける限り！」
気圧された二頭は、しかしその目線を外せぬまま。
【つまり、我々は、ここにいる限り、】
【怪我を、することが出来ない……？】
それは、まるで救いを求めるような声。
しかし、
「――そうだ」
現実は、事実としてただ存在し続ける。

●

再三訪れた、深い沈黙。
ただの一言が、何も言えなくなるほどの衝撃となって二頭のグラビモスを襲った。
【――待ってくれ……】
しかし、『黒』の予期せぬ絶望が、言葉となって零れ落ちた。
【……それを、貴方は、知っていたのですの？　私達がここに留まれぬことを】
悲壮なる思いが、ひび割れた感情の器から、漏れ落ちる。
【その事実を、現実を、――知ってなお！　貴様は私達を弄んだのか！？】
【知っていて、悪戯に私達の過去を穿り返し、塩を塗るような真似をしたのですの！？】
迸る怒りは、水や電流と同じだ。
より流れやすい方へ、流れやすい方へと向かう。
【――何が交渉だ！】

吼え飛ばす。
気づけば、絶望へと堕ちた僅かな希望は、終には手に負えぬ怒りへと身をやつしていた。
【騙して、いたのですの……？】
「ちょっと待ってよ！　別に旦那さんはそんなつもりで……！」
「黙れ、アーサー」
制する。
ガラドはアーサーをただの一喝で黙らせ、二頭の怒りに向き合う。
挙げていた腕で、アーサーを庇うように制の姿勢をとり、
「――訳せ」
でも、と。アーサーは呻いた。
「いいの！？　旦那さんは、――これでいいの！？」
「いいんだ。訳せ」
でも、と。アーサーは繰り返す。
「こんなのおかしいよ、やっぱり……！　旦那さんは、な、何もしてないのに、こんな責を負わされるなんて！　悪役にされるなんてっ！　ううん――」
しゃくりあげの動きが溜めの動きを作り、
「自分から、悪役になろうとするなんて、嫌われようとするなんて、――そんなの何の意味もないよっ！　そ、そんなのボク、ボクっ……！」
……嫌だよお。
その真意を知っている者には、あまりにも辛い。
そして、その者をよく知り、敬愛する者には尚更だ。
更に言えば、アーサーの通訳という立場は、他者の叱責すらも一度自らの言葉に変えて伝え直さなければならない。それはまるで、自分の尊敬する者を無理矢理に責めさせられているようで。
仲介者としては、余りにも酷な立場だ。
しかし、それは仕方がない。いくらおかしくても、どうしようもない。

それは、アーサーにだって分かる。
……でも、もっと他のやり方だって……！
「おかしい、か」
え、とアーサーは問い返す。
「おかしいだろうな、俺達は。それは何故か？」
それは。
「我らが半端者で、世界の代弁者で、そしてその世界すらもがおかしいからだ」
そして、
「世界は、現実は、どうにもならない。故に嫌われ、憎まれ、呪われる。しかし存在の曖昧さ故に、誰もが世界に対して憤るということをしない。――無意味だからだ。
しかし我らは、其処に意味を与える存在だ」
だからこそ、
「我らは、世界に徹する」
つまり、
「世界の代弁者となり、不条理な世界の象徴となるために、我らがある。
どうにもならぬ現実への怒りを、受け止めるために、我らがある。
人にも、龍にも、等しく味方し敵となるために、我らがある。
そして世界は、何が起ころうと、決して揺らがずそこに在り続ける――」
「だから、ボク達が揺らぐことは、世界が揺らぐということ……？」
ガラドは頷く。
「しかしギルドナイツはたった一つ、世界から逸脱する。それは、――救いを求める者を可能な限りで救済することだ」
一息吐き、
「このままでは、終わらせない。だから、――訳せ」
二頭の怒りを受け、ガラドはどうにもならない現実として、立ちはだかる。

そして、ガラドは告げた。
「――交渉を終わらせよう」

●

【――こ、交渉を終わらせる、だと？】
ふん、と『黒』は鼻で笑った。
【貴様が勝手に始めたものを、自分が都合が悪くなったら終わらせる、と？　――何とも身勝手な話ではないか！】
「……」
【希望は全て打ち砕かれ、選択肢は全て奪われ。――貴方は、これで満足ですの！？】
……旦那さんのせいじゃないのに……！。
アーサーは、口惜しかった。
自分では何も出来ず、どうにもならない我儘染みた思いを己の主にぶつけ、今やその主に向けられた叱責を伝え直すことしか出来ない。
……でも、このままでは終わらせない、って……。
それを思い、アーサーは伝え続ける。身を切るような叱責の声を。
【ふん。――時間の無駄だな】
【ええ。本当に無意味な対話でしたの】
……交渉が終わってしまう。
否、実のところ、もう既にこちらの『二頭のこの地からの撤退』という要求は通ってしまったので、交渉はもう終わっているも同然だ。
対話の理由がない。
【どうした？　もう貴様は私達には用はないのだろう？　私達は貴様にやられた毒が抜けるまでは動けないが、動けるようになればこの地を去るつもりだ。……それとも、まだ説教したりないのか？】
【……別に、貴方がそこでいつまででも喋っていても宜しいですの。

でも私は、お姉様の看病で忙しいので相手はできませんけれど、です の】

「……」

……旦那さん……！

こんな終わり方は嫌だ、と。

アーサーは、それでも懸命に言葉を伝え続けた。

夜も深まり、全てが静まり返った沼地の一角で、ガラドは、

「希望が落ち砕かれ、選択肢を奪われ、か。確かにこのままでは、この交渉に意味など無いな。確かに、このままでは時間の無駄以外の何物でもない――、」

その言葉をそのまま伝え続けるアーサーは、違和感を覚えた。

……このままでは？

殊更ガラドが強調し続ける、『このままでは』。

それは、前置きだ。

このままでは、無意味。ならば、

……有意味にする、何かがまだ、有る？

「――思い出したのだ。嘗て俺が読んだ、記録の一部を」

返事はない。

無くとも、この場にいる者たちの注意を確かに惹きつけているという確信がある。

「場所は火山、およそ十五年前の事件だったか。六名の密猟者によってグラビモスが無為に狩猟され、首謀者含む組織のすべてを摘発、犠牲となったグラビモスは、その死骸の全てを一旦回収、供養ののち、事件発生地点付近にて埋葬。その子のバサルモスは不明」

しかし。

「確認した死骸は一頭のグラビモス成体、雄。恐らく群れのリーダーであったものと推測される。――及び、傷ついた雌のグラビモスを保護。番であることは恐らく確実――」

【な――何だとッ！？】

驚愕の声が挙がる。

しかし、ガラドの淡々とした声は続く。
「数日間の保護ののち、飛龍の野生をむやみに侵すべきではないとし、目隠しを付けて当地まで輸送、解放した。経過をさらに数日観察したのち、監視を終了、撤退した」
【そ、それって……ですの】
「――同飛龍は、暫く巣の付近を行動していたが、後に鉱脈を沿って西へと移動した」
以上だ、とガラドは静かに締めくくる。
再び沈黙が降りてくるが、しかしその沈黙には確かに意味があった。
【――う、嘘ですの！】
叫んだのは、『白』だ。
【またそんな出任せを言って、私達を惑わせるつもりですのっ！？
まさか、そんな都合のいい話が――】
「雌のグラビモスは、――亜種だったそうだ。黒真珠のように光る美しい甲殻をギルドの上層部が惜しがったらしい」
【――っ……！！】
息を呑む、気配がした。
「……君達に残された選択肢は、二つ」
「――ふたつ？」
……だって、さっき、選択肢は奪われた、って……。
「――ここを去るか、正々堂々と我らの村を襲うか、だ」
今度は、アーサーが息を呑んだ。しかし、反駁する前に、
「伝えろ」
「え、あ……」
前もって、戒められる。
「俺はここから村を直線で繋いだルートを通って戻る。そして、肉眼で村が目視出来るギリギリの地点で野営することにする」
【――な……】
「次に会うときは、村を守るためという口実があるからな。全力で

殺りに行く。覚悟があるなら、リベンジマッチでも何でもしてやろう」
一方的な宣告は続く。
二頭のグラビモスには、最早言葉はない。
「――これで、交渉は終了だ。アーサー、此処までだ。戻ろう」
「あ、う、……うん」
暗くてあまりよく様子は伺えぬものの、気配が二頭の感情を如実に物語る。
「交渉は、これで終わりだってさ。……お疲れ、様」
返答は、やはりない。
きっと、それどころではないのだろう。
踵を返し、ガラドは歩き始める。決して、振り返りはしない。
それをアーサーは追い、戸惑いながらも、主の横について歩く。
振り返っても、其処には暗闇が有るだけだった。

●

遠く微かに、村の明かりが見える。
もう夜中であるのに、まだ村人は時を忘れて騒いでいるのかもしれない。
一方のガラドと従者のアーサーは慣れた動きで野営の準備を整え、火を囲んでいた。
そこは見晴らしの良い、開けた野原だ。格好のロケーションに、大小の影だけが蠢いている。
「なあ、アーサー」
「ん、何？」
く、と漏れる笑みを噛み殺しながら、ガラドは問いかけた。
それは楽しんでいるような、それでいて何かを、諦めているような顔で。
「俺はこの交渉に、……意味を与えられたか？」

こうして、人と龍の、実にオカしな交渉は終わりを迎えた。
それは実にあっけなく、静かで、
「――それは、ボク達には分からないよ。でも、」
「……でも？」
「でも、でもさ。少なくとも、――無駄じゃなかったとは、思うよ」
「フ。そうだと良いな。……本当に」
どこか妙な清々しさと、後味悪さを湛えた幕引きであった。
そして長かった夜は、静かに更けていく。
焚火に照らされる一人と一匹の半端者を、闇はただ暖かく、包み込み放すことなく。
遠くに聴く喧騒を聞きながらガラドはまた、囀るように笑うのだった。

15話　始まりの終わり（後書き）

これでようやくプロローグの終わりです。
タイトルには一応各話ごとの意味を持たせているつもりですが、この話のタイトルは「プロローグの終わり」ということで一つご理解のほどを。
ちょっと使い古された感が否めませんが、「始まりの終わり」「終わりの始まり」という言葉が好きです。いい感じで矛盾してるしね。お気づきの方が多いかと思われますが、今作のテーマは「矛盾」、「半端」といった「どちらともつかない」ことです。大人になると「どうにもならないこと」や「答えのないもの」がたくさんあります。そんな問題に取り組み苦悩し、うまい折衷案というか平行線を見つけること。そういうのって、難しいですよね。
そんな苦悩を根幹に、うまいこと自然と人間の関係とか、私が考えたことをどんどんぶちこんでいったらこんなに長くなってしまいました。
いい意味で、楽しく読む人の予想を裏切る作品を作れていたらいいな、と思います。
これからも推敲はしますし、まだ続きます。（次はプロローグのエピローグを掲載予定です。お楽しみに！
末永いご愛顧、よろしくお願いします（感想、評価も待ってます！

１６話　親愛なる急襲者達

綺麗だ、とただ『黒』は思った。
そこは宵闇の深い湿密林。すべては黒一色に染まり、天はしな垂れかかる木々の天幕によって見えず。しかし、
【天然のライトアップですのね……】
『白』もまた、同じことを考えていたようだ。
【ああ、――綺麗だなあ】
此処は虫達の楽園。
昼間の殺風景な雰囲気とはうって変わって、夜になると静かに騒ぎ出す、虫の群体。
光を放つもの、放たないもの。
静かなもの、囀るもの。
飛ぶことの出来るもの、そして出来ないもの。それら全てが、しかし平等で。
華やかに舞い踊り、そして儚く舞い散っていく。しかしその中に苦痛は皆無だ。
在るのはただ、？喜び？。
限られた生を正しく、そして全うできるその充足に、苦しみなど在りはしない。
ただそれを、それだけを、躰一杯に、命を賭して伝えるのだ。
しかし。
「……折角、ここまで辿り着いたのになあ」
それは、結局手に入らないものであると、二頭のグラビモス達は悟ったのだ。
……こんなにも、綺麗なのにな。
彼の男は、ここが死に満ち満ちた場所であると言った。
ここにいつまで居ても、望む楽園は手に入らないと、そう言った。
それは、

……身の程を知れ、と。
まるで、そう警告されているようで。
しかし、彼の男はグラビモス達にそれを告げただけで。そしてそれどころか、与えた傷を塞ぎ、無為な死を許さないとして去ったのだ。
今、『黒』はその傷のおかげで、動けない。
だがその回復を待つ間に、気持ちの整理を行っていることも確かだ。そうやって思考を重ね、冷静になればなるほど、
【――勝てないよなあ】

●

【……ええ、そうですの。お姉様】
そう答える白のグラビモスもまた、姉と同じ思いに囚われて、逡巡を重ねていた。
滅茶苦茶に叩きのめされ。
散々に説教され。そして、
……ご丁寧にも、手加減と、希望を与えて下さいましたの。
まるで、大人が子を叱るかのように。
厳しく、冷たく、しかしその深奥には思いやりがある。そんな叩き潰しを、先程までこの二頭は受けていたのだ。それが後になってよく分かるのは、
……私たちが未熟だから、ですの。
今になって思い返せば、自分たちの論の陳腐さが、ひどく身に染みた。
過去の、どうにもならないようなことを態々掘り返して、それを一番嫌なやり方で、関係のない他者にぶつける。その身勝手さが、恥ずかしくもあった。
でも。
【彼は、向き合ってくれましたの。……私達の、身勝手な我儘に】

『黒』は何も言うことなく、ただ黙っている。
【私たちが、どうにもならない私たちの私怨で駄々をこねた時も、どうしようもない絶望に支配された時も、言葉は辛辣でしたけど、あれは――、】
……後ろ向きになろうとする私たちを、閉じてしまおうとする私たちを、諭してくれていれたのですの……。
しかし、最後までは言わない。
言わずとも、分かっているだろうから。
賢しらに皆まで言うことは、この二頭の間では無意味であり、蛇足だ。
だからこそ、有意味な沈黙が増える。
【――――】
僅かな時間の沈黙の中で、二頭はその間、言葉を交わすよりも多くの想いを交わす。
その末に、
【――西、か】
……それもまた、好いかもな。
今は未だ、彼の男には勝てない。
しかしそれはいつか、覆る。否、絶対に、覆らせて見せる。
……見ていてくださいですの、お父様。
そして必ず、いつか己が母を見つけ出し、これまでの生に意味を見出す。
それが、希望だ。
【ふふ……】
こんなにも、辛い旅路であったのに。
【はは……】
これからも、終わりなんて見えないのに。
【あははは……！】
それでも笑みが零れるのは、どうしてなのだろうか。
それはきっと。

【そうだ、私たちは……！】
独りじゃない。
もう独りじゃ、ないんだ。

●

しかしそこに、水を差す者が在った。
「いいわねえ、麗しいわねえ姉妹愛」
声がした。
不意を衝くにはあまりにも緊張感のない声、しかし故に、不意を突かれる。
【――誰だ！？】
「さあ？　誰かしらねえ。貴方のその目で確かめて御覧なさいな」
『黒』が見渡す視界の中に、――居た。
その姿は、余りにも無防備。親しい人と街角で出会い、挨拶もそこそこに歩み寄って来る。そのような風情の人間の姿が、闇の中に浮かび上がる。
【また変な輩が、ですの！？】
「あらあらまあまあ失礼ね。でもまあその様子じゃ、余程こっぴどくアイツにやられたのかしら？　ふふ。当たりかしら？　まあ、――観てたんだけどね」
ヒトでありながら、強大な飛龍に対して僅かも怖じず、それどころか、
【――女性！？】
ああ、と『黒』は呻いた。
【しかも、貴様は何故、……龍と会話ができる？】
「そりゃあできるわよお。私は会話を望み、貴方たちはそれを拒絶するに足りない」
暗闇に浮かんだその表情は、妖艶、ともいえる笑みを浮かべた。
「――簡単じゃない？　ねえ」

……不気味だ。
『黒』は、長く研ぎ澄ませてきた己が本能をフルに使い、眼前の妖女が明らかな危険信号の原因であることを察した。
それでも、
……逃げられない。私は、だが――。
【――逃げろ！】
【は、はいですの！】
それでも、『白』だけなら。
群れとしての生存本能か、それともこの二頭の覚悟の表れかそれとも場数か。この明らかな異常に対しての判断は素早く、『白』は『黒』を切り捨てた。しかし、
「逃がさないわよお。――モンジュ、ＧＯ！」
「へいよ」
……新手か！
『黒』が第四者の声を聴き、そして逃げる『白』にそれを警告するよりも早く、
「嬢ちゃん、右だぜ？」
【えっ！？】
そのとっさに聞こえた、右、という情報に『白』は本能的に反応し、前傾気味の体勢を無理に捻り咄嗟にその身を左方向へと飛ばした――その刹那。
続いたのは、衝撃。
……何ですの！？
大地が哭いた。
断末魔にも似た爆音とともに、『白』がいた地点を中心にした巨大なクレーターが完成。それは瞬く間に直径を広げていき、一重、二重、十重二十重――、
「いよっしゃ、――ちゃんと避けたな」
【……貴方は誰ですの！？】
「俺かあ？　ああ、そうだな、えーとなあ」

やはり、人間だった。
気配を消し、有り得ぬほどの跳躍から、見えぬ一撃で大地を抉る男。その姿が、己が抉ったクレーターを挟んで反対側に降り立つ。
体勢を立て直し、『白』が見据える正面。暗がりに僅か見えるその顔は、金の髭面。
纏う服は黒。そして手に持つ得物は、巨大で異様な形の棒だった。
【それは、棍ですの？】
「あ？　おお、よく知ってんな。てか、一遍に質問すんな。答えらんねえだろ？」
……変な奴ですの……？
訝しみの視線は、つまりは警戒の意志だ。まず兵法の常道は、相手を知ること。
しかし、それを待たずして、
「そうな、先ずこいつが俺の相棒で、『青天大晴』ってんだ。見ての通りの鉄棍。先に言っとくがな。――変形するんだぜ、コレ。カッコいいだろ？　なあ。そんで、俺の名前はモンジュ。カドキ・モンジュな。えーと、んで、まあよろしくな」
……そこまで聞いておりませんし変な奴ですの。
少し訝しみの視線を呆れのそれに変えながら、『白』はさらに問う。
【……なぜ、そこまで詳しく教えてくれるのですの？】
「おお、そりゃ決まってんだろうが。なんせ――」
ぽん、と右手の大鉄棍を軽く肩に担い、軽く彼は言う。
「――教えねえと、死んじまうからなあ。オメエら」
……えっ？
途端、『白』の見ていた世界が、変わった。
全てを覆い尽くしていた闇は一斉に幕を開けるように晴れ、
眼前のクレーターも消え、代わりに一面の荒野が広がり、溶岩が噴出し、
そして遠く立つ男が、巨大な威圧感を纏い出した。

否。目に見えて、巨大化したのだ。
遥かに見下ろすほどの小ささだった男の目線が、いつの間にか己のそれを凌駕している。
そして僅かにこちらを見下ろすようになった金髪の男は、意に介した様もなく雄叫んだ。
「いいかよ？　――忘れねえように、もう一度教えといてやる。我が名はモンジュ、カドキ・モンジュ。この手に持つは『青天大晴』。闇払い、悪を断つ、力の担い手だ」
いいか、と男は前置く。
「今から俺がオメエを死なすように打つ。だけど俺はオメエを死なせたくねえ。だから俺はオメエに教える。教え続けるぜオメエの行く先、逃げ先をな。
オメエは死なねえように、逃げ続けろ。聞いて逃げて、逃げて聞いて、――生きろ」
【――っ！？】
最後の三文字は、耳元で聞こえた。
……速い……！？
「おら、今度は左だぜ」
振り向く暇すら与えない。
【――くぅっ……！】
『白』は身を捻り、左に。声が聞こえた方向とは逆に、その身を飛ばし、
そして、
「……あァ？　左は、箸持つ方だろうが」
迎えたのは、盛大な破砕伴う風だ。

●

【――これは、一体何の手品だ……！？】
そう呟くのは、『黒』だ。

そしてその目に映るのは、
【……一面の、花畑か？】
「お気に召したかしら？」
ふん、と鼻を鳴らし、目線を戻す正面。見渡す限りの極彩色の中に包まれるようにして、軽く腹を腕で抱くように組んだ白髪女の斜め立ちが見える。
湛えるのは、軽い笑み。
「まるで、夢を見ているようでしょう？」
……この女は腹の中に何を秘めているのか。
意味もなく笑み持つ人間は、必ず腹に一物秘めた危険人物だと思え。
あの男も、そうだった。
そのようなことを考えながら、『黒』は軽くその細い顎を上げた。
【――さて、いくつか聞きたいことがある】
「あらあら、冷静ねえ。アイツとの戦いを経て、大分肝が据わったように見えるわ」
……観ていた、と言ったな。
先程の、あの変な男との交渉中に、近くに他の生物の気配はなかった。
しかし、目の前の女は、その場にいなければ知り得ないようなことも、全て知っている風な口振りだ。ならば、疑うことにあまり意味はない。
問題は、
【まず一つ、】
深呼吸を置き、『黒』は言った。
【――私の『この』躰は、一体何なのだ？】

●

……一体何なのですの『この』躰は！？

そう思考する『白』は、硬い荒砂の上に尻餅をついた姿勢で、頭上を見上げていた。
左、と男は言った。しかし、
【この男、右と左を間違えて覚えていますの……！】
思えば最初もそうだった。
不意からの一撃を落とす際、男は右、と言ったはずだ。そして現に攻撃は右から飛来し、故に左に躱すことができた。しかしあれは、
【……彼にとっての右、つまり左に躱せ、ということだったのですのね】
その勘違いのせいで、今の結果がある。
「……はッ」
その金髪髭面の男は今もこちらを見下ろしていて、そして巨大な鉄棍を振り抜いたままの姿勢で、しかし表情は驚きの色濃く。
本来ならば、左に行った『白』の体を、回り込むようにして行った金髪男の鉄棍がカウンター気味に打ち抜いて終わりだったのだろう。
男もそれを確信しての、この表情だ。
そこで、この小さく、華奢な、未だ慣れぬ躰が活きた。
「……まさか、オメエがそんなに見事なズッコケ回避スキル持ちなんてなあ――」
別にワザとじゃないですのよ。
生命の危機に瀕してもなお不慣れなこの躰は、一度左に行こうとした体を無理にターンさせようとして、バランスを崩し、足を滑らせ、
そして見事に尻餅をついた。
それが思わぬ下方回避となって、頭をヒットしに行った金髪男の鉄根を空振らせる。
……どれも、前の体では起こりえないことですの。
まだ死んではいない。まだ確かに、生きている。
しかし、男の巨躯はまだ動きの中にある。ややもすれば、こちらにその得物を振り下ろしてくるなりなんなりすることだろう。現に、

「ま、よく避けたな。――左ぃ！」
男が左に振り抜いたフルスイングが、返しの動きでそのまま袈裟に振り下ろされて来た。それは、
……成程、僅かにフォロースルーで左側に届きますのね！？
【きゃあっ！？】
そして振り下ろされた威の塊を形振り構わぬ横ローリングで、？右に？躱す。
肘を折りたたみ脇を締めコンパクトに。そのままの姿勢で転がって距離を取る。地面と接した箇所が角ばった砂利に圧し返されて僅かに痛いが、気にはしない。
兎も角も、先ず『白』は、相手と距離を取ることを先決した。
……それにしてもああもう邪魔ですのこの長い毛の束！　絡まりますのよ！？
何とか飛び起きて、改めて己が手足を見れば、
【な、ななな何ですのこの貧相なカラダは！？】
「――自分で自分の体を貧相だって言う女は初めてだなあ俺。今日は色々新鮮だよな！」
【私は新鮮どころか現在進行形で誰か説明プリーズですのよ――！？】
「まぁた説明かよ面倒くせえなあ。小難しい言葉なんて要らねえよ。――オメエは今、五臓と六腑、二百六の骨、味噌と柔らけえ肉と皮で出来た体で動いてんだ。
つまりな？　オメエは、――どっからどう見ても人間になってんだよ。分かったか？」
【――人、間……！？】
細い手足。
縮んだ背丈。
柔らかな皮膚。失われた硬い甲殻。
そしてその代わりに柔らかく頭皮から生えた白色のウェービーなロングヘア、そして全身を覆う、純白の無駄にひらひらした服飾。

それが全てだ。
【な、何で、どうして、ですのよ……！？】
呆けたようになって、『白』はゆっくりと顔を上げた。
そこには先程と変わらずあの男が立っている。笑みすら浮かべて、
「――オメエも今日は色々新鮮だよなあ！？」

１６話　親愛なる急襲者達（後書き）

急展開です。
新しい概念が色々と足されますので乞うご期待。

１７話　夢中の攻勢（前書き）

服飾に詳しくないので、服の描写は出来ません。
想像にお任せします。

17話　夢中の攻勢

「――新鮮な感じでしょう？　人間の目線に立つっていうのも」
ここは、一面の花畑。
そう描写する他にないような、余りにも現実離れした地平線までの原色の海だ。
時間の感覚すらも曖昧で、空は澄み渡る青空。燦々と輝く太陽。
そして十メートルほど離れた位置に立つ、ヒトの女性。
それが、目に見える全てだ。
【……人間、だと？】
否。
辺りを見渡していた視線を下に向けると、見慣れぬものと、見慣れた色が目についた。
見慣れた色は、深い漆黒色。かつての己が甲殻のそれ。
そして見慣れぬものは、先端が五本に分かたれた二本の前足。頭から生える艶黒糸の束。そして前足の先を除いた体全体を覆う、黒白のやたらとひらひらした布、布、布。
……邪魔だ。
見慣れぬ以上に、動きにくい、と思う。そしてちょっと可愛い、とも。
「可愛いでしょう？　ゴスロリって言うのよ、その衣装はね」
ゴスロリ、と意味の分からぬ単語を口で転がし、『黒』は視線を戻す。
「人間よ、ニンゲン。――貴方が何より嫌っていた、ヒトよ」
【……そうか】
『黒』が呟くようにして返した返答に、女は首を傾げる。
「……驚かないのね？」
【いや。驚いている、と思う】
そう呟く声は、もちろん人間のものではあるが、発した言葉はそ

うではない。
ぐる、だか、ぐう、と言ったような鳴き声だ。
そしてその声は、ひどく冷静なものだ。
無理もない、と思う。
そもそも、龍の身だった己がいきなり人間の矮小な体躯に押し込められたなどということが土台無理のある話である。それに加えて、この有り得ないほどの広大な花畑だ。
そう、余りにも事実が、現実から乖離している。
……まるで夢のように感じているのだろう、私は。
今はただ、驚きの感情を呆れにも似た？非現実感？とでも呼べるものが上回っている。
ただそれだけのことだ。
しかし当然、体が人間になった所で、完全な人間になった訳ではない。妙なところで、現実は現実として新鮮に感じられて。
故に、元グラビモス現少女の発した声音はなんとも舌足らずに響いている。
「あらやだぁコレ可愛い。褐色黒髪ロングのゴス少女が慣れない感じで、それでも一生懸命喋ろうとしてるのって新し可愛いわ。ここでまさかの新ジャンル開拓っ」
【……何？】
そんなことを言いながら、くねくねと身を捩じらせる眼前の女性に戸惑う。
女は、身を抱く姿勢のまま道化のようにくるくると回り始めた。
「あーんもう、抱きしめたーい。そのままお持ち帰りしたぁーい」
【はあ……】
「あ、今？いい歳こいたおばさんが一体何を？的なこと思わなかった？　思ったわよね？　いいえ思ったに違いないわそう、だからそんな呆れ憐憫ビンビンな目で私のことを――！」
【見てない、見てないから】
面倒くさそうにそう告げると、

「そう？　おばさんちょっと安心」
……ああ、もう。
調子が狂う、とはこのことだろうか。今の異常な状況も相まって、非常にやりづらい。
【……質問を、続ける】
「あら、やっと？　私はその質問をさっきからずっと待ってたのよ？」
……先刻の男といい……。
舐められている、ということはもう既に分かっている。
先刻の男は、『黒』らを？甘い？と評した。それ程の優越が、自信の根底にあった。
しかし、この女は、
【貴様は一体、――『何』だ？】

●

「あら」
……得体が知れない……！
種族としての優劣というものが、確かにこの世には存在する。
本来なら、人間とグラビモス、その間にも絶対的な種族としての力量差が在った筈だ。
しかし一方でそれを覆し、その上で強大な龍を子供扱いする人間もいる。
それでも、そんな例外がいつも起こるわけがない。
それを鑑みた上での、この女のこの余裕だ。
「やっぱり、分かっちゃうかしら？」
【……貴様は】
今回もその『どうにもならない』力量差に似た感覚を、『黒』は感じている。己が感情に震えのようなものを先刻から、得ている。
こちらがグラビモスで、相手がただのヒトだとか、そんな話をし

たいわけではない。
【ヒト、】
「ではないわよ。御明察」
その、真逆だ。
この感情の震えは、畏怖か、怯えか。きっと、そうなのだろう。
【……そうか】
「驚かないわね？」
【驚いてはいる、筈だと思う】
「……ふうん」
しかし、意外なほどに冷静なのは己自身だ。否、冷静な己自身が意外なのだ。
何故、私は、動揺しない？
【最後の質問だ。――いいか？】
「ええ、どうぞ？」
【有り難う。では、問おう】
そして何の気なく、問うた問いが、全ての答えとなった。
【私の妹を貴様は一体何処へやった？】
「……」
『黒』に帰ってきたのは初めての沈黙。
しかし時に、沈黙は何よりも明らかな答えとなり得る。
……嗚呼、そうか。
先刻から『黒』が、異常なほどに冷静だったのは何故か。
体が人になったことに、心を揺らせなかったのは、何故か。
『黒』の眼前の、女――恐らくヒトではない、龍でもなく、もっと強大な何か――に相対し、己が感情に僅かな震えを得続けていたのは、何故か。
それは、それらが全て、
……些末事だから、だったのか。
人間になった？　それが何だ。
一面の花畑？　それがどうした。

目の前の女はヒトではないから気をつけろ？　――だから何がどうなるというのだ。
それよりも、何よりも、
……妹が、何よりも大事な妹が、居ない。
気付いてしまえば、自ずと肝は据わった。成すべきことも、決まった。
先ず何よりも、大切なものを取り返すことを考える。
そのためには、
【答えなければ、貴様を殺す。現時点、そしてこれからも妹に危害を加え次第殺す。返答如何によっては殺す。嘘を吐けば殺す。――妹は、何処だ？】
台詞など、選ぶ意味すらない。
女は、あらあら、などとは言うが毛ほども堪えた様子は見せず、肩さえ竦めて言う。
「……結局、最後まで驚かせられなかったわねえ」
【今の私の感情を支配しているのは、きっと怒りだろうからな！】
「ん。……成程、成程成程――」
ふ、と面白がるような笑いが一つ。
それはもはや、『黒』の眼には嘲笑にしか映らない。
【……本当に殺すぞ？】
「あら怖い、でもね、『黒』ちゃん。――そんなこと私に言ってもいいのかしら？」
【何だと……】
変わらぬ優しい微笑みのまま、女は告げた。
「人に非ざる女が、ヒトに非ざる貴方を迎えに来たわ。貴方に与えられた選択肢は二つ。素直にヒトになって私達と共に来るか、ここで私に殺されるか、よ。お分かり？」
【妹は、どうなる？】
「あらら好いシスコン。前者ならば解放。後者なら、……まあ、いつかは死ぬでしょうね。あの戦闘狂があれ程の上玉を放っておくと

は考えられないもの。
……でもね、貴女も妹の心配してる暇があったら、――貴女自身の心配したら？」
女は人差し指をすいと上げ、
「ここは私の領域、？夢幻空間？よ。この中における概念は総て私の支配下。言っていることはわかるわね？　つまり、貴方を永遠の夢に誘うのも、その逆も、私次第よね」
人好きのする笑みのまま宣う。
「言葉遣いには、気を付けた方がいいわよ？」
【――っ！？】
そして雷鳴が、『黒』の頭上に降り注いだ。

●

そして降り注ぐような攻撃が、モンジュの右腕から放たれ続ける。
緩急などと言うのも最早、生温い。
等速、そして高速の波状攻撃。それが、『白』のか細い体躯を薙ぎ払いに往く。
しかし、それでも。
【……く、はあ、はあ、うっ……、く】
白の薄布を翻して、金白の少女が飛ぶ。
柔らかく広がる色素薄めのブロンドが、コマ送りのように『白』の動きに追随する。
それは、まるで地を這うかの様な低い動きだ。
「おうおう上出来、上出来。よく避けてくれるよなあ、オメエ。
まあ、俺が手加減してるとか、避ける方向教えてやってるとか色々あっけど、それでもオメエ、十分頑張ってるぜ。うん、マジで。
――褒めてんだぜ？　おい」
【……別に、嬉しくないっ、ですの……！】
ハ、と乾いた哄笑を一つ。それを合図に、男は地を蹴り『白』へ

と急接近する。
「素直に喜んどけっつ――の！　次、右方三十度後方へ飛べ！　あ、頭は下げとけよ？」
【く！】
そして体重を乗せた力任せの鉄棍の薙ぎ払いが来る。それはやはり、『白』から見て左上から、薄く斜め右下への振り下ろし。リーチもあり、広く扇型に広がる凶器攻撃だ。
……相も変わらず、左右は逆ですけど……。
それを潜るようにして、後方に下がる。
「次い！　そのまましゃがめよ――、下ぁ！」
速度ある鉄棍が、二メートルほどもある重みある筈の鉄棍が、その速度を全く落とすことなく戻ってくる。しかもそれは、死の暴風を纏った一撃だ。
くん、と。しかもそれを、あの男は右手のみで行う。
想像より余りにも軽いその挙動に最初こそ戸惑ったものの、今は単なる等速運動として捉え、『白』はただ避け続ける。次は、
……しゃがみですの！
腰を落とす。
すると、下がった頭上を擦るようにして、鉄の風が薙ぐ。長い毛髪が数本巻き込まれ、刺すような痛みを覚えたが、
……我慢ですの！
【――次は――！】
「おう、そうだな。真っ直ぐ振り下ろすから、左でも右でも好きな方に転がれや」
【……っ……！】
……よし、この流れは距離を取れますの。
心がけることは極力、筋肉を使わないこと。しゃがんだり、転がるのは少しだが、筋肉を休めることができる。その機会を逃さず得ていくことで、少しでも長く、避ける。
しゃがんだまま、身を重力に預けて自然に。

……行けますの。
慣れて、来ている。
動作をパターン化し、無駄な挙動をしないことで、体力の保全を。
相手の攻撃の流れを見て覚えることで、少しでも先読みをし、回避時間の確保を。
そして、あと一つ。
「また避けたなあ、偉い偉い！　その調子で頑張ってくれよ？　そしたら俺はもっと殴れるしな。そうだろ？　でもな、自分で考えて勝手な行動取ったりは絶対すんなよ？　はずみで殺したらつまんねーぞ。分かってんな？
だから、余計なこと考えねーでただ言った通り動いてろ。そしたら最低死なねえからよ」
【……】
この敵は、所々おかしな挙動を取る。
そのうちの一つが、これだ。
「お？　何だその目は。まさかこの俺に一矢報いようとか思ってんじゃねえだろうな？　そりゃあいけねえぜ。ああ、やめとけよ？　なんつってもオメエは弱えんだからよお。
よく見ろよこの鉄棍。当たったら痛えぞ？　痛い、何て思う暇もなく骨を砕いちまう」
男は得物を軽々と振り回しながら、尚も喋り続ける。
【……棍、というより、もはや鉄柱と呼んだ方がよろしそうですのね？】
それは、おかしな形の鉄棒だった。
長さは二メートル程で、直径はかなり太い。まるで鋼鉄の支柱のようだ。
しかし、柱というには妙に意匠が凝っていた。
よく見ればその鉄棍は、一本の鉄の軸の周りに太めの鉄の針金を幾重にも巻くという二重構造になっており、さらに主柱の両端には豪奢に龍をあしらった石突が付いている。

さながら鈍色に光る双頭の龍が、とぐろを巻く様を彷彿とする。
「その鉄柱で打ん殴られたくなけりゃ、しっかり俺の言うことよく聞いて、素直に言った通り動いてろよ？　いいか？　俺との大事な大事な約束だぜ？」
【――ええ、そうですのね。私もこんな所で死にたくはないもの、ですの】
……それにしてもこの敵は……、
よく喋る。
それが、『白』がこの眼前に立ちはだかる金髪サングラスの大男に持った率直な感想だ。
また、この男が長話をするときは、決まって彼我の距離が離れた時だ。
先ず、男が四、五回程、攻撃する。
それを、『白』が避ける。すると、
大抵その次に来るのは？避けやすく、隙の多い、攻撃後に距離ができる攻撃？だ。
【……もしかして、ですの】
そして、その後に、まるで何かの時間を稼ぐかのようによく喋る。
その内容の殆どは、どこか忠告じみた警告だったり、わざわざ己が手の内を明かすような無駄話。
……わざわざ整理してみると、本気でおかしいですのこの敵。
つい先程も、同じような思いをしたばかりだ。
ならば、このまま思い通りにされているのも癪のような気がしてくる。
そう思ったところで、
「――おらよ！」
男が大跳躍から、上段振りおろしの一撃を見舞ってきた。
しかし、その動きは余りにもよく見える。それは当然、向こうも承知の上であろう。
「両手でガード！」

【――っ！？】
……ガードなんてしてたら、死にますのよ！？
しかし言葉の意味が脳裏に染みる前に、動きが先についてきた。
選択したのは、
【両手でガードですの！】
「いい判断だぜこの野郎！」
『白』の眼前で組んだ両腕に、ずん、と重みがきて、次の瞬間に後方に引かれた。
こらえる間もなく、『白』は両足で地を蹴って全身のバランスを取った。衝撃分散のために解いた腕の奥で見えたのは、
【……蹴り！？】
男が大上段から棍を叩き付けた姿勢のまま、逆立ちから旋回蹴りを放つ姿だった。
「想定外のタイミングの攻撃から、即座に最適な回避が出来るかどうかは大事だぜ。まあ今のは、俺のヒント有りの難易度イージーだったけどな？」
……また喋り始めましたのね！？
今は未だ自分の体は宙にある。
低空でバックステップしている最中だ。それを、
「今までずっと必殺の攻撃を受け続けて来て、急にガードしろっったって、まあ普通は無理だわなあ。ただでさえ死と隣り合わせなんだ、無理はねえ。だが、」
地に着く前に、？溜め？を作っておく。
背を軽く丸め、膝を曲げ、前かがみ気味に。その上で、
「俺のヒントを聞いて、即座にそれが最善と理解できるかどうかで半分、その上で俺の蹴りを受けて、崩れねえで受け切れるかどうかで半分ってなとこだ。良かったな、オメエは多分強くなるぜ、ここから生きて帰れたらなあ！」
顎を引き、目線は真っ直ぐ前へ。眼前の敵の元へ。
そうすれば、意志も覚悟も何もかも、真っ直ぐ前へと向いてくれ

る。
「まあ、俺の言うこと聞いてりゃ死にゃあしねえ。だから、もう暫くは大人しく――」
……真っっっ平ですの！
いつまでも殴られっぱなしでいてやる道理はない。そして何より、
……私が言うことを聞くのは、お姉様だけなんですのよ！
男は、何故か攻撃の合間に時間稼ぎをする。理由は知らないが、例えばそれが、
……攻撃の合間に、インターバルを取らねばならない理由があるのだとしたら？
つまり、あの無駄話がカモフラージュだったとしたら。それは即ち、あの隙が彼の唯一の弱点ということだ。それならば警告のような物言いも、合点がいく。
敵は今、無理のある体勢だ。逆立ちの、蹴りを浴びせた姿勢から立ち直っていない。
スローモーションのように流れる視界が、減速に従って鮮明になっていく。
一矢報いるなどとは言わない。それよりも、
……敵を倒して、正々堂々とお姉様の所へ行きますの！
右足が着いた。
しかし、未だだ。左足が着いてから。そして左足が、
【――行きますの！】
着いた。その瞬間、
地を抉る感触を、その足の裏に得た。
急速に逆行する視界の中央には、あの男がいる。別に憎いわけではないが、
【少しの間、眠っていて頂きますの！】
狙うは、上下逆さまになった男の顔面。そこに一撃イイのが入れば、流石にどんな力量差が有っても、同じヒトである限りは沈められるだろう。

得意の武器は今や地に着いていて、直ぐには振れない筈だ。そして攻撃は、
……蹴りですの！
走りざまのサッカーボールキック。それなら体重も乗る。
向こうは両手を地に着き、こちらは既に速度に乗っている。『白』の足は間もなく男の脇を走り抜け、抜けざまに見事なボレーを叩き込み、男の髭面を打ち抜くだろう。
十分に間に合う。　それに、
【……想定外のタイミングの攻撃に、対応するのは難しいのですのよね？】
条件は揃い、『白』は勢いに乗ったまま、
【食らいなさいですの――！】
男のサングラス目掛けて強烈なボレーシュートを見舞っていった。

１７話　夢中の攻勢（後書き）

評価感想、待ってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8008j/

狩人のパラドクス

2011年12月2日01時56分発行